



米国帆船

チエスボロー号 漫画誌

一八八九年（明治22年）

アメリカメーン州バス市から

出航した三本マストの帆船

チェスボロー号は、石油

6000箱を積み、神戸港に

8月に着きました。

残りを売るため函館港に寄り

すべての石油を完売し

そこで買った硫黄を積みこみ

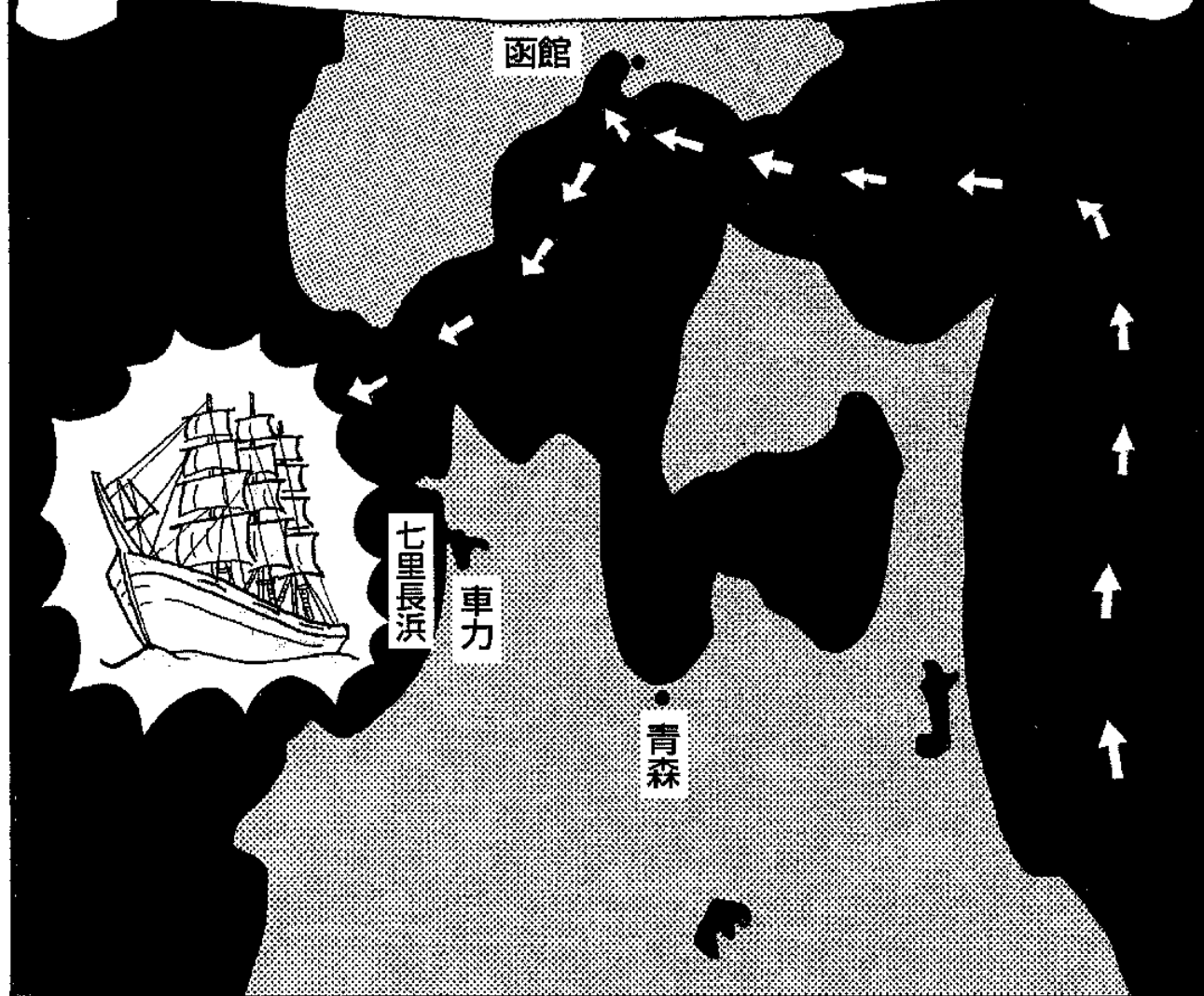
あとは故郷に戻るだけでした。

これから起こるお話は

乗組員23人の運命と

車力村の人々が遭遇する

感動的な実話であります。



米^{べい}国^{こく}帆^{はん}船^{せん}
チエスボロー号^{ごう}
漫^{まん}画^が誌^し

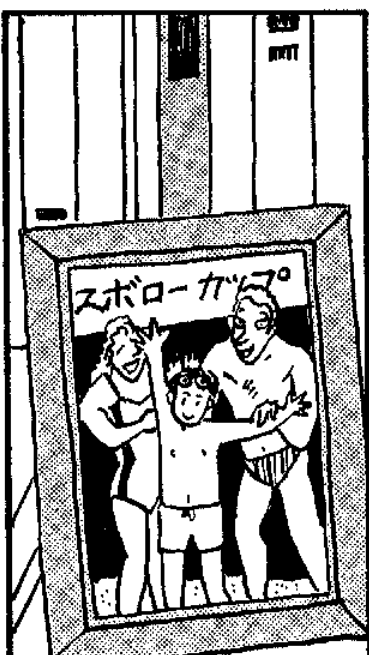
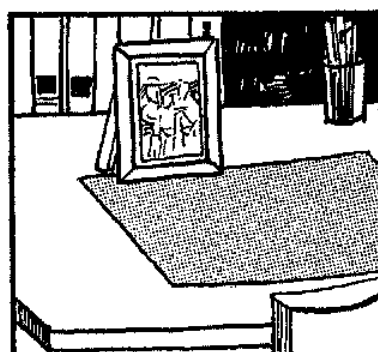
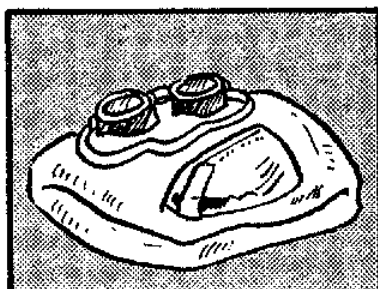
目次 ^{もくじ}	第1話 ^{だい1わ}	第2話 ^{だい2わ}	第3話 ^{だい3わ}	第4話 ^{だい4わ}	第5話 ^{だい5わ}	第6話 ^{だい6わ}
遭難 ^{そうなん} ……………	村人 ^{むらびと} たち……………	二人 ^{ふたり} が走る ^{はし} ……………	悲 ^{かな} しみ……………	言葉 ^{ことば} が通 ^{つう} じた……………	出 ^{しゅつ} 発 ^{ぱつ} ……………	
1	26	41	59	77	87	



200X年
チエスボローカップ 前日^{ぜんじつ}



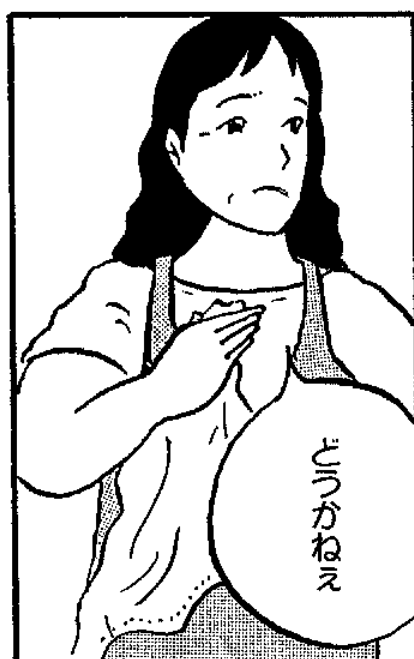
あした、明日、
は晴れる
かなあ？



この
くういの
あめ
雨なら、
へいき
平気だね？

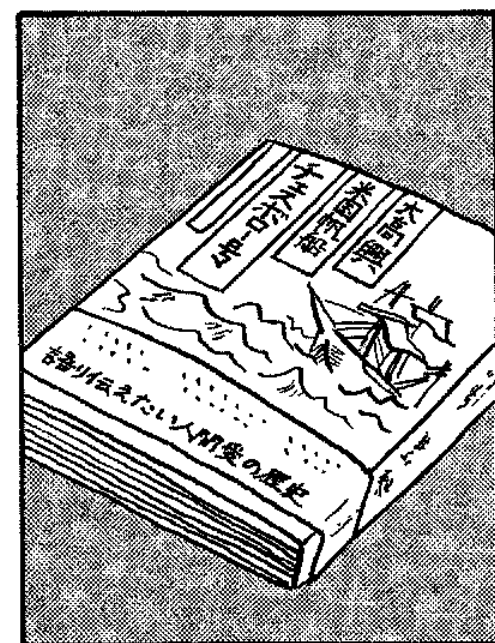
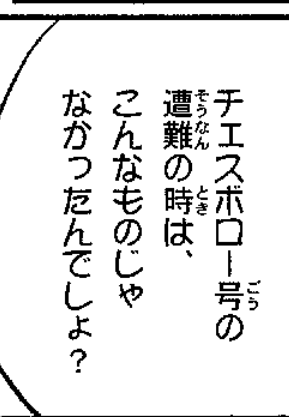


どうかねえ



み
見えても
は晴
れないわよ





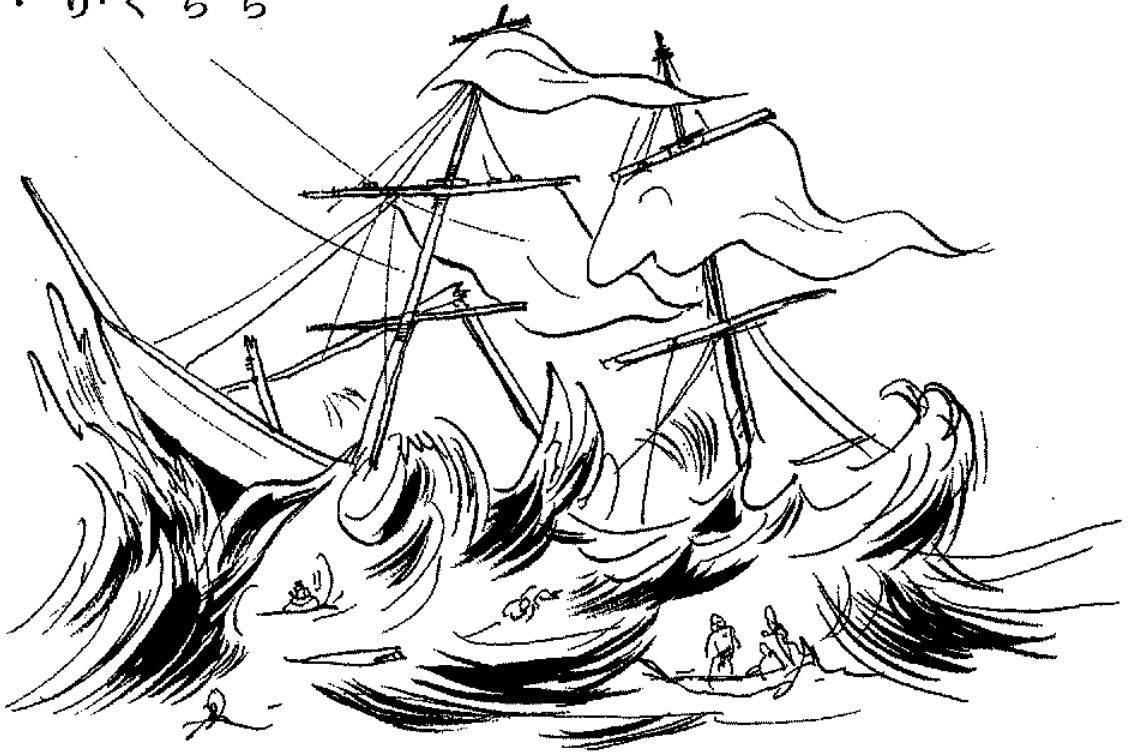
第1話

遭

難

運命の積荷

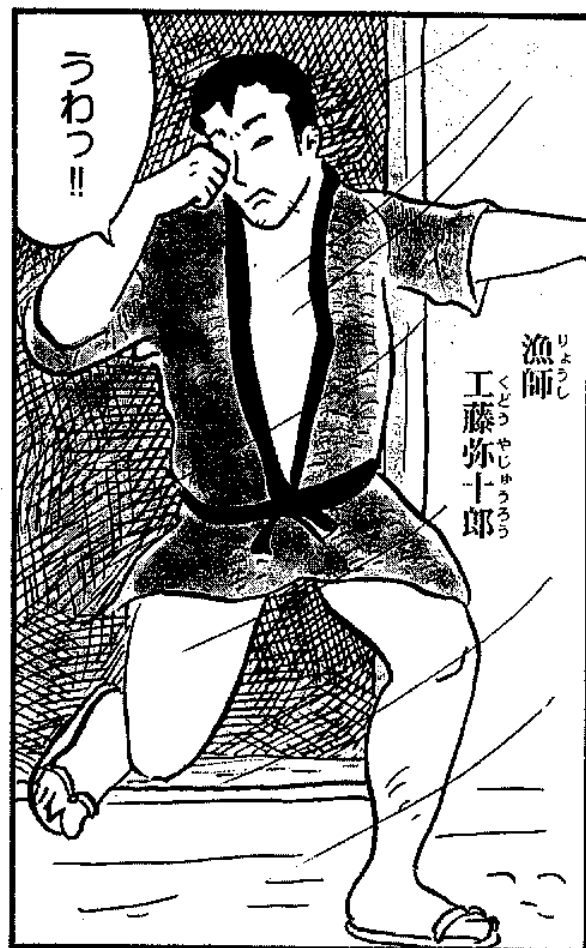
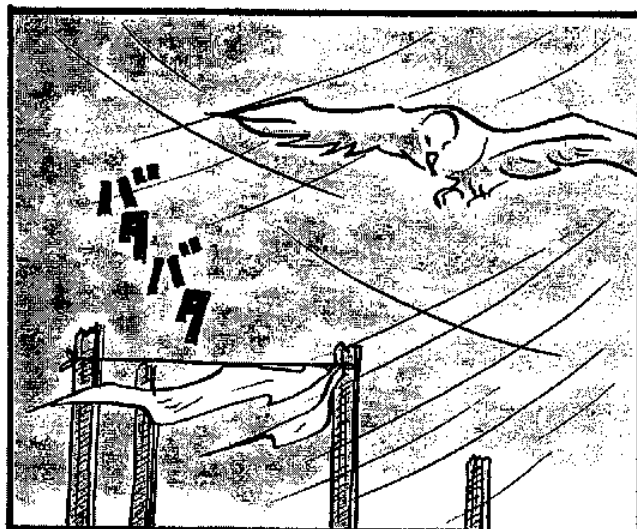
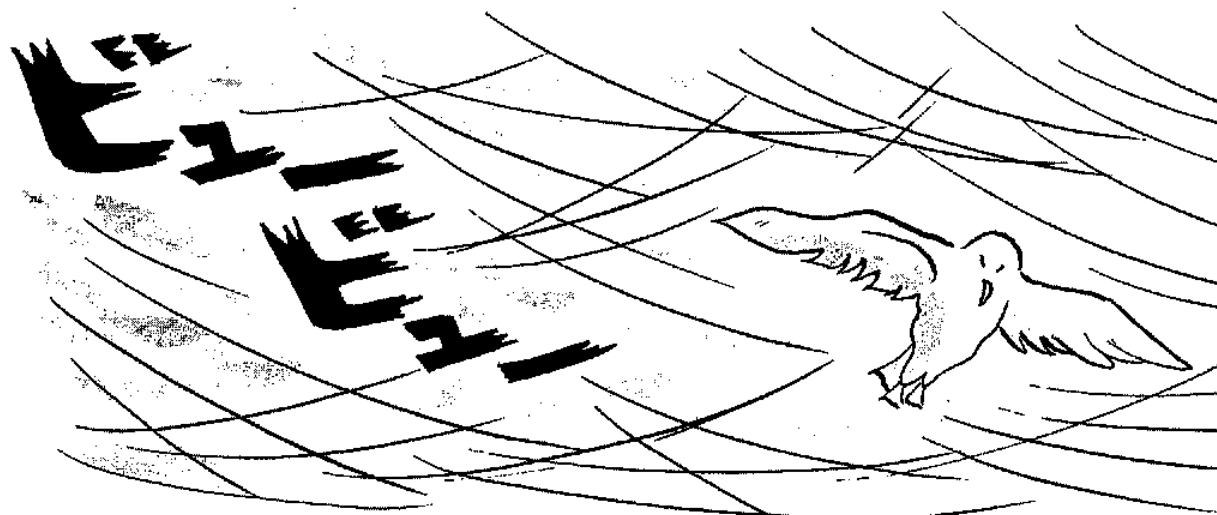
すでにライバル会社の船が上海（中国）から
硫黄を積んで出航していた。先を越されたら
自分たちは損をしてしまう。彼らよりも早く
ニューヨークへ着かなければ、というあせり
が、悪天候の中での出航を、船長ピーター・
エリクソンに決断をさせた。



明治二十二年

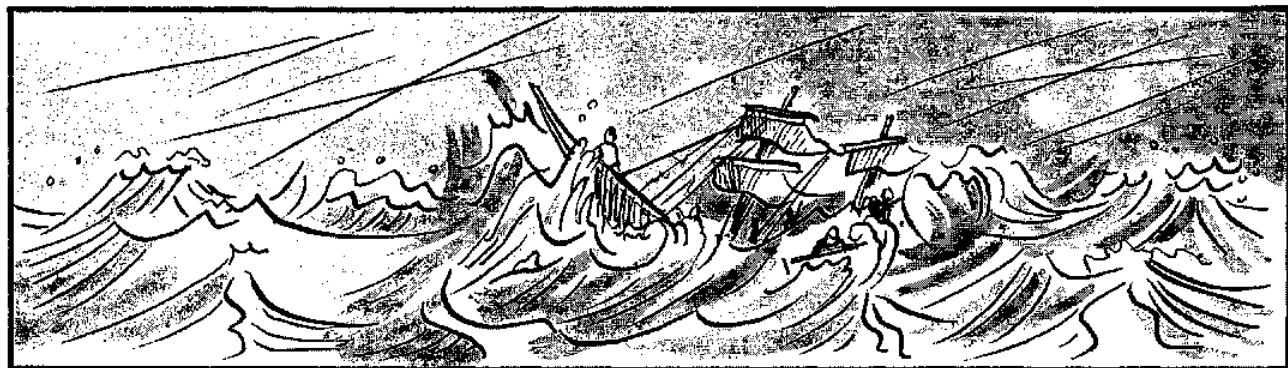
十月三十日 早朝

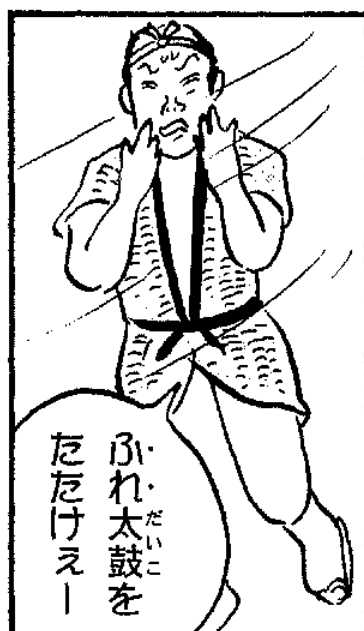
「牛潟地区・中の森」











ふれ太鼓は
緊急時の
村の合図です。

ド
ド
ド

なんだ、
どうした

いやな
予感
がある
ねえ

とにかく、
浜に
行ってみよう

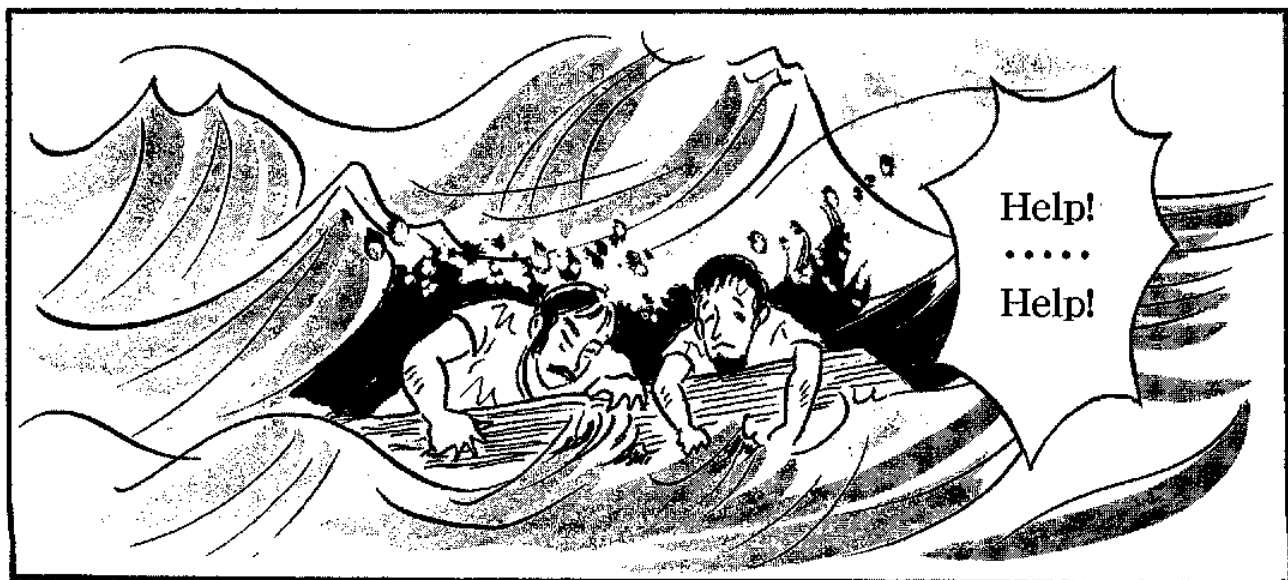
誰の船だ？

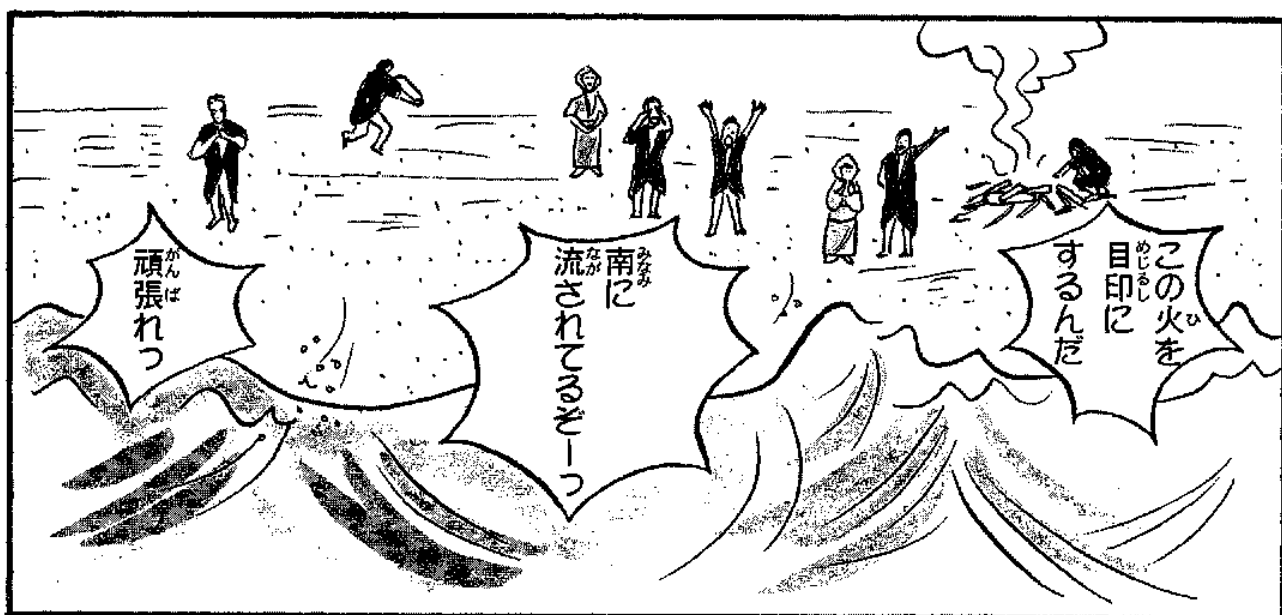
こんな
日に漁に
出たのか？

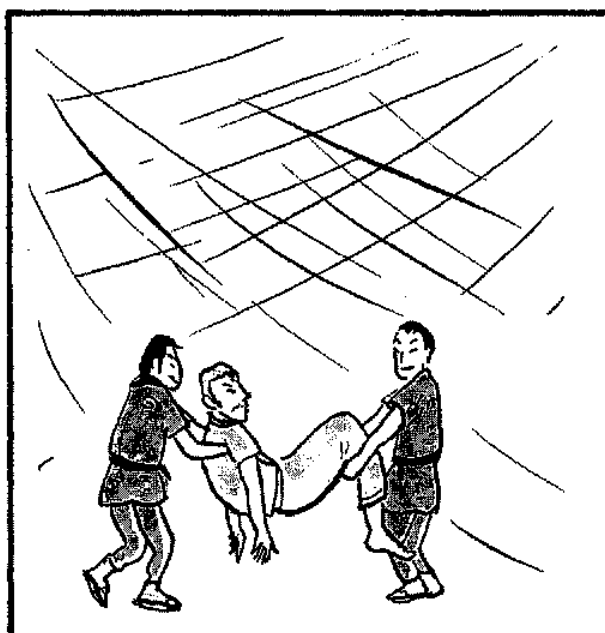
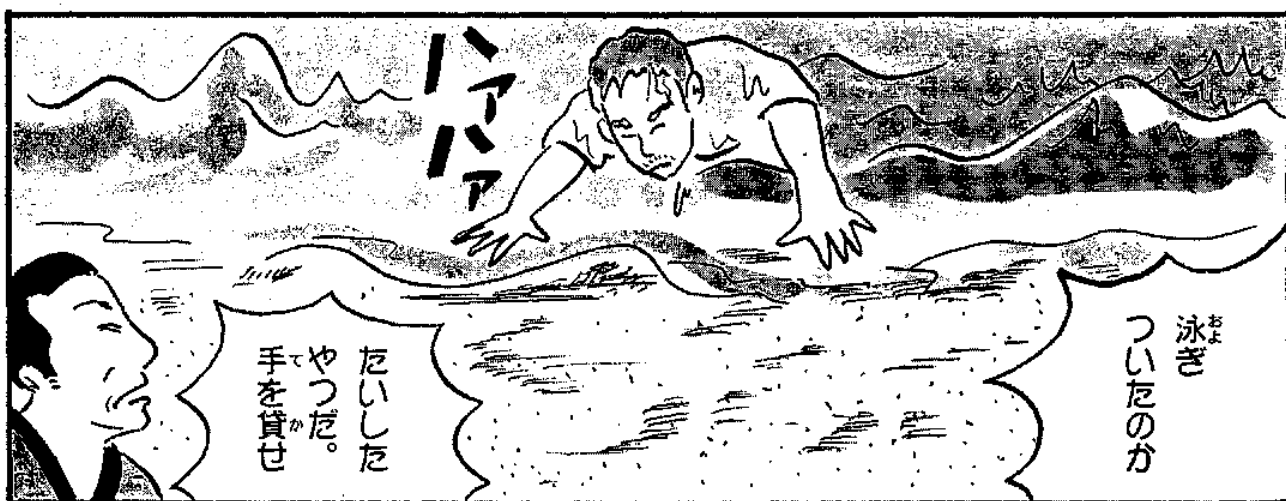
船が難破したらしい

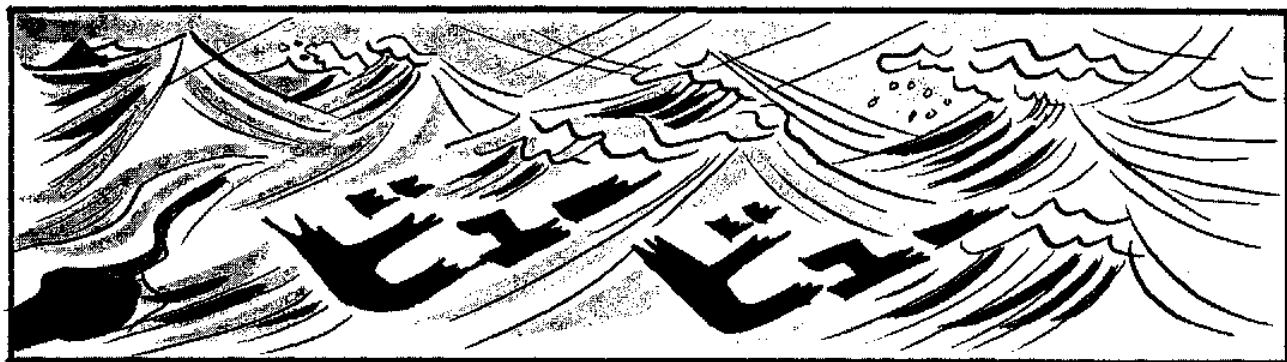
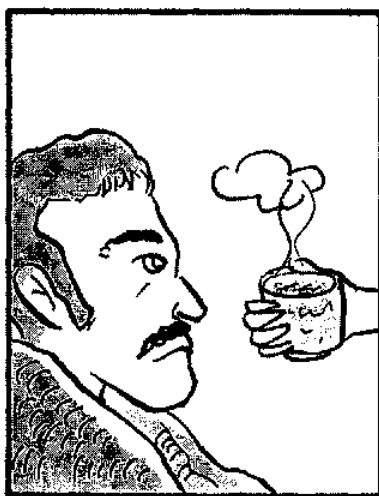
チェスボーロ号^{ごう}は
ついに座礁^{ざしょう}して、
船体^{せんたい}も
壊^{こわ}れはじめました。

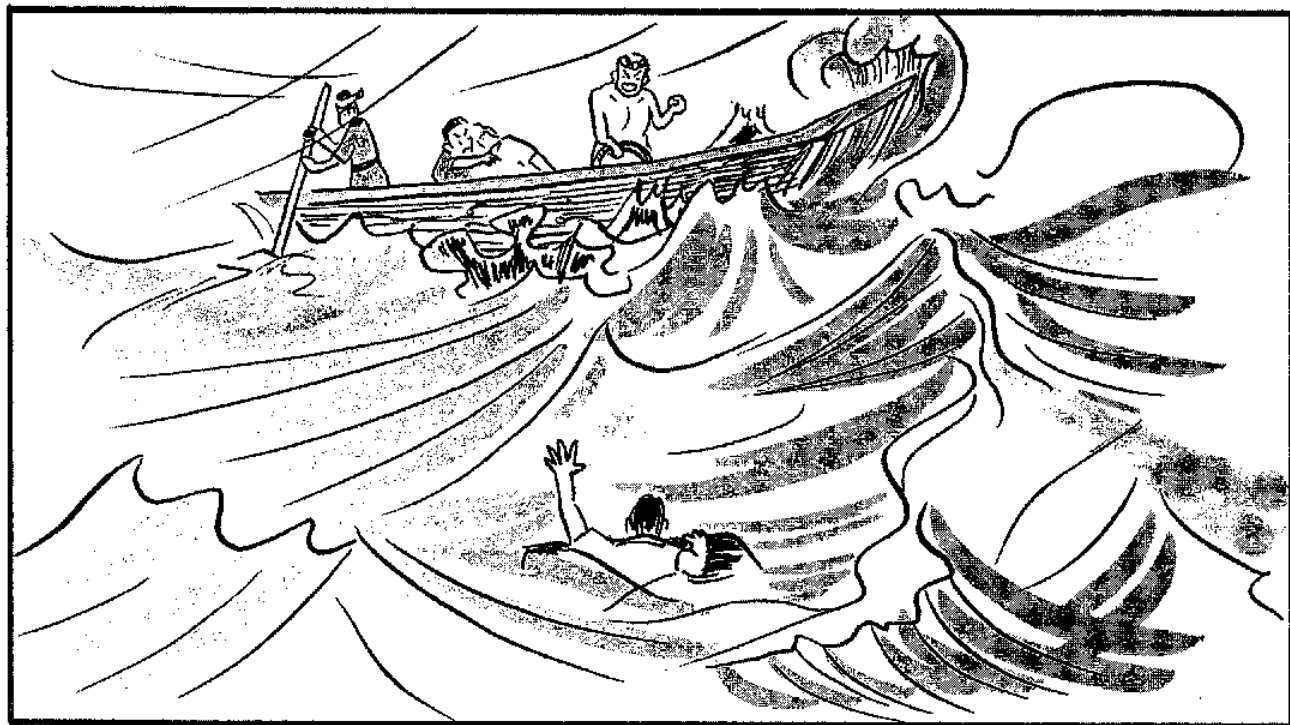
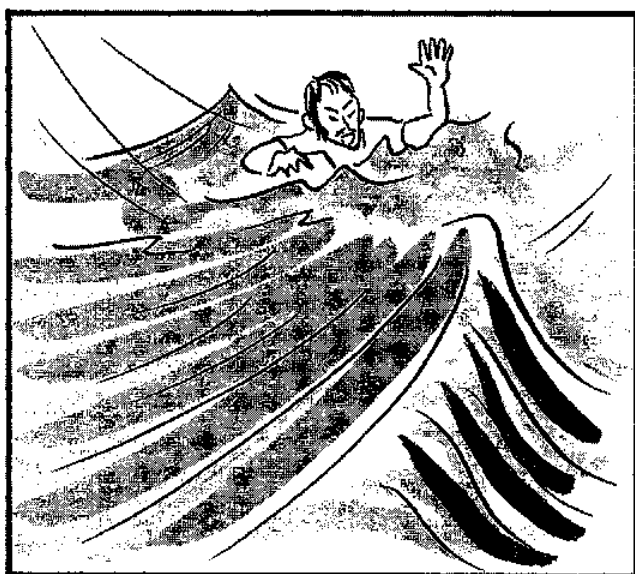




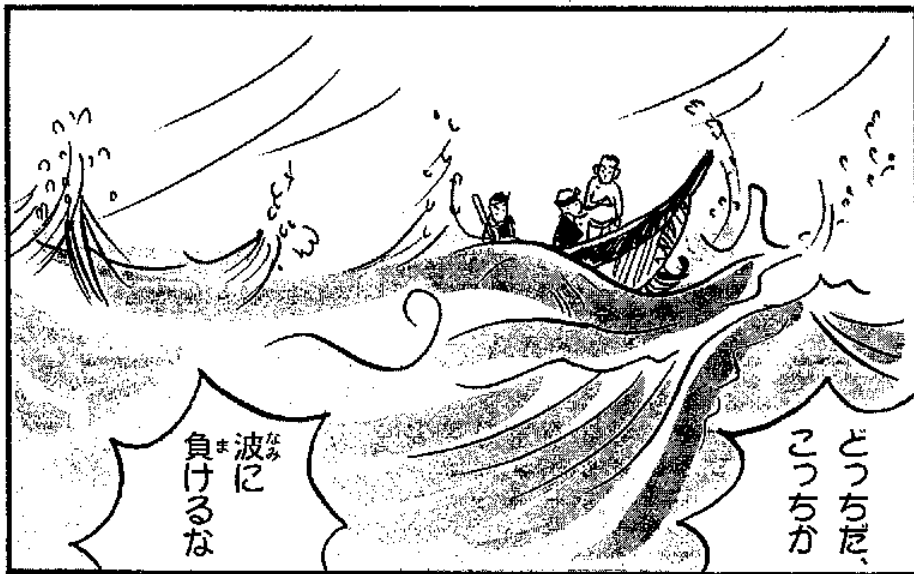


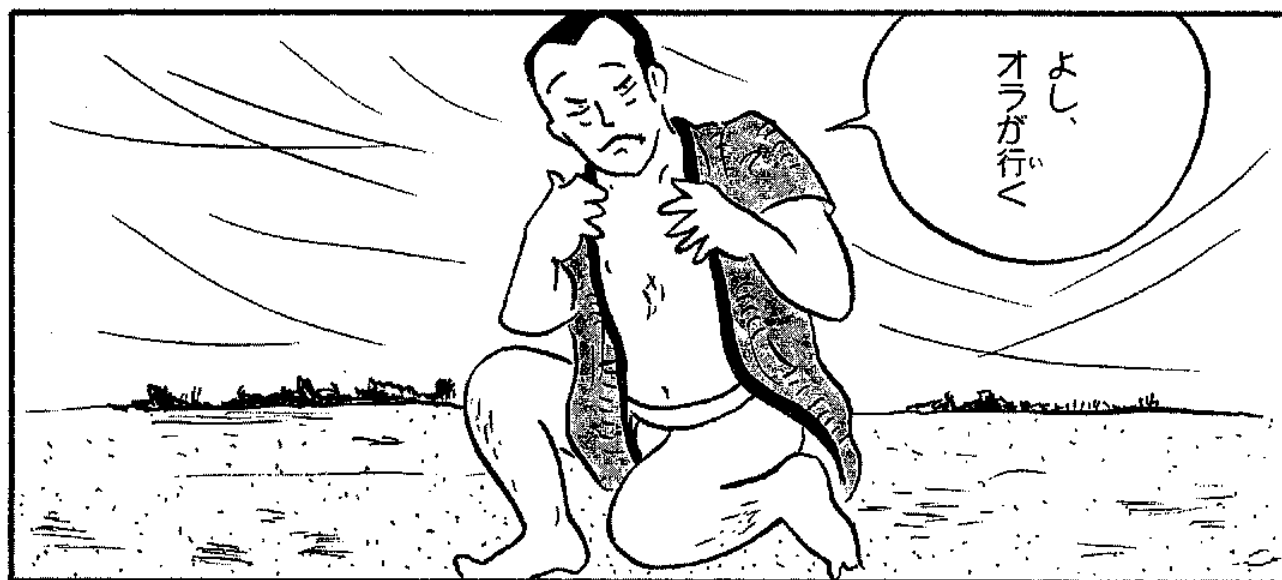
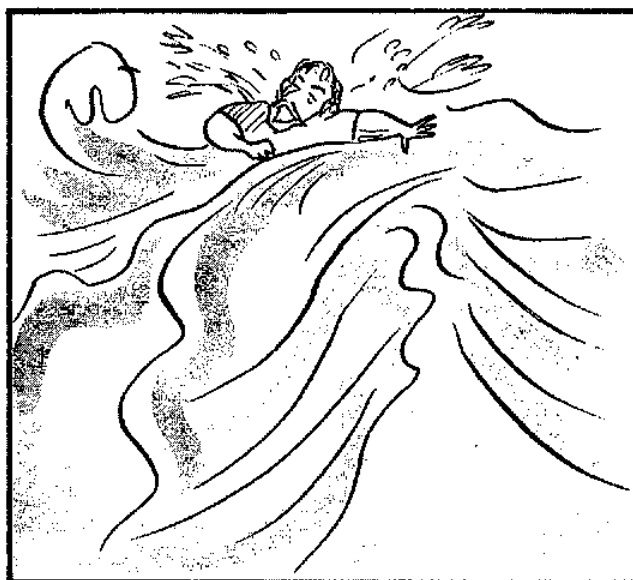




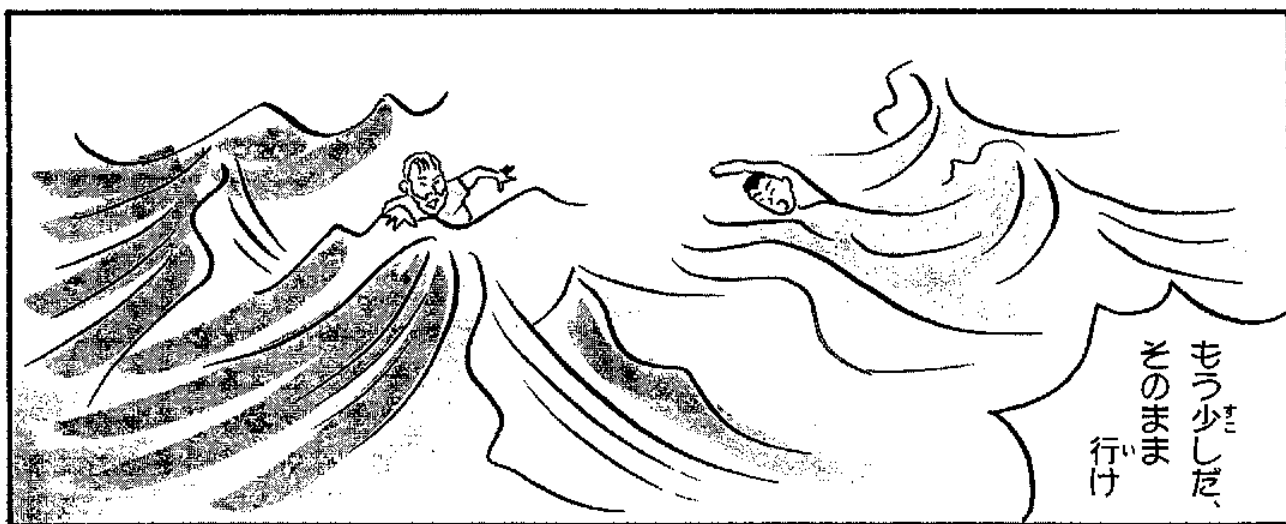


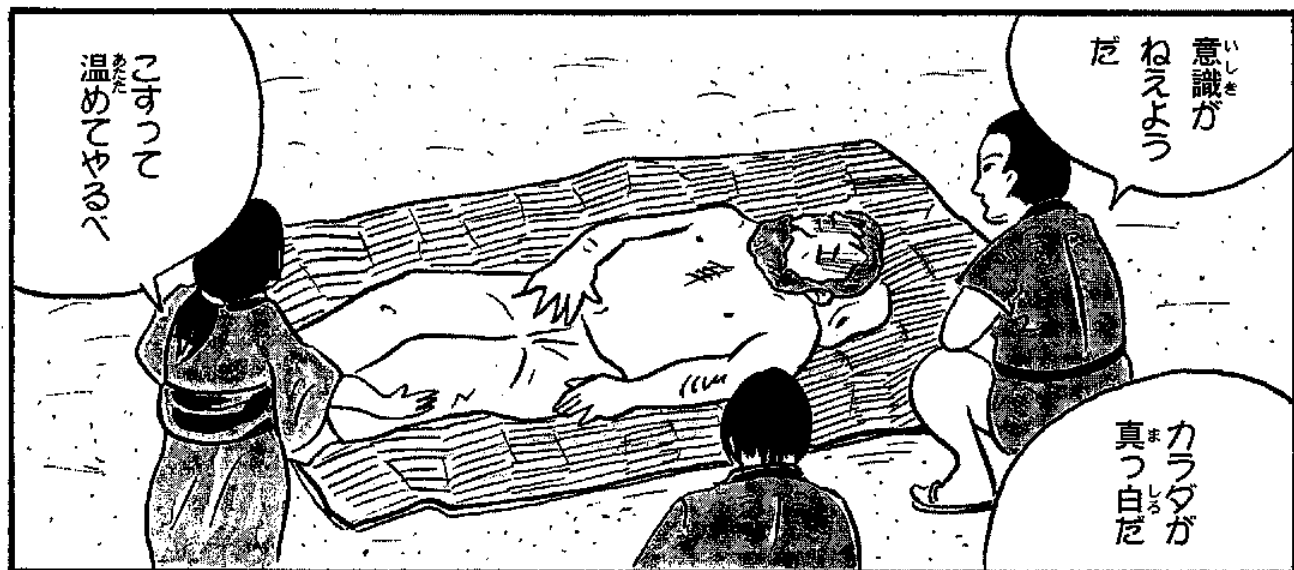


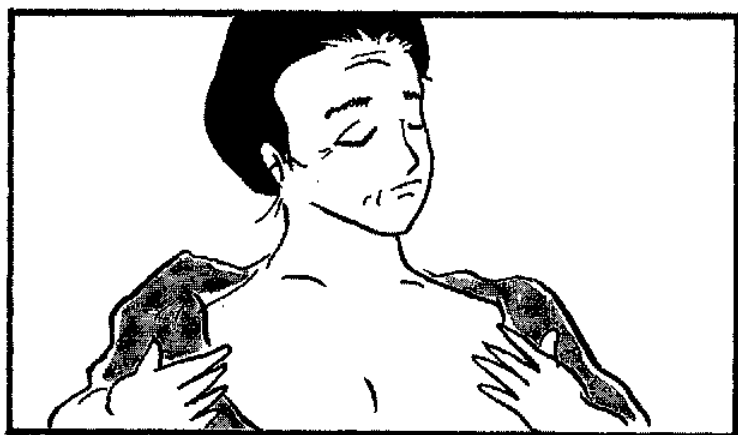
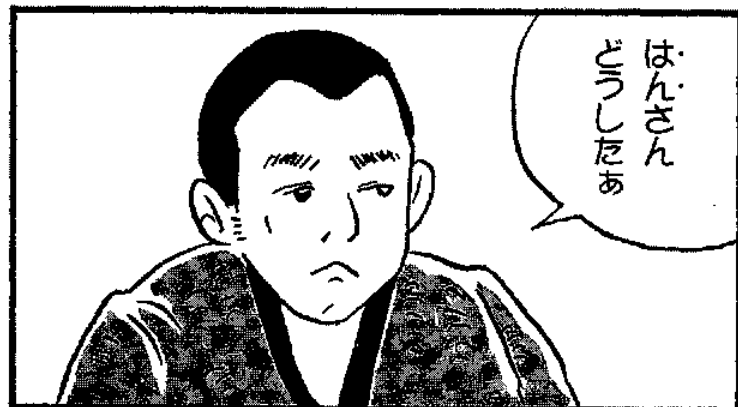
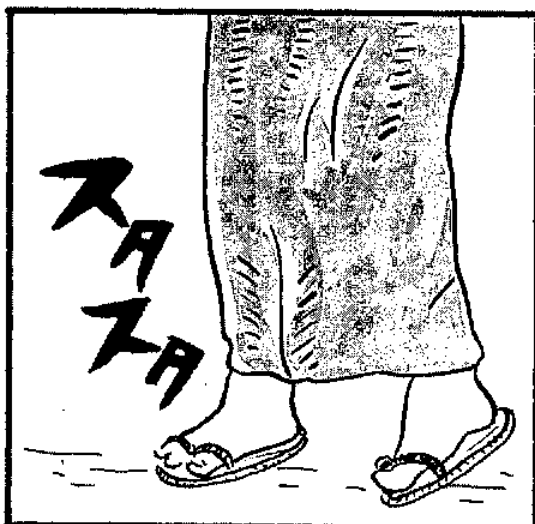










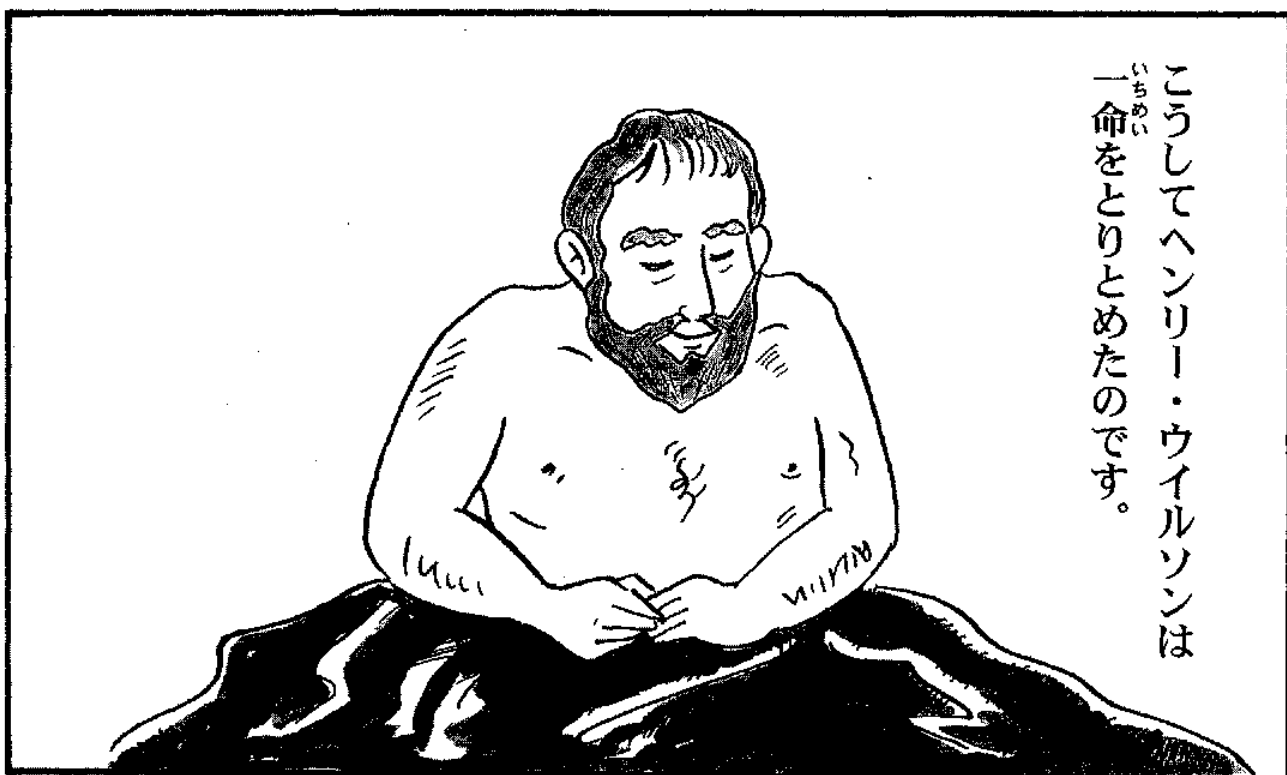
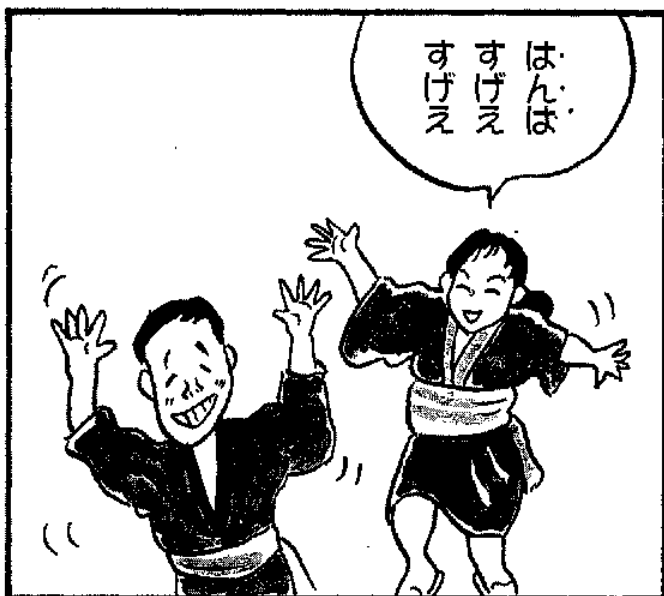
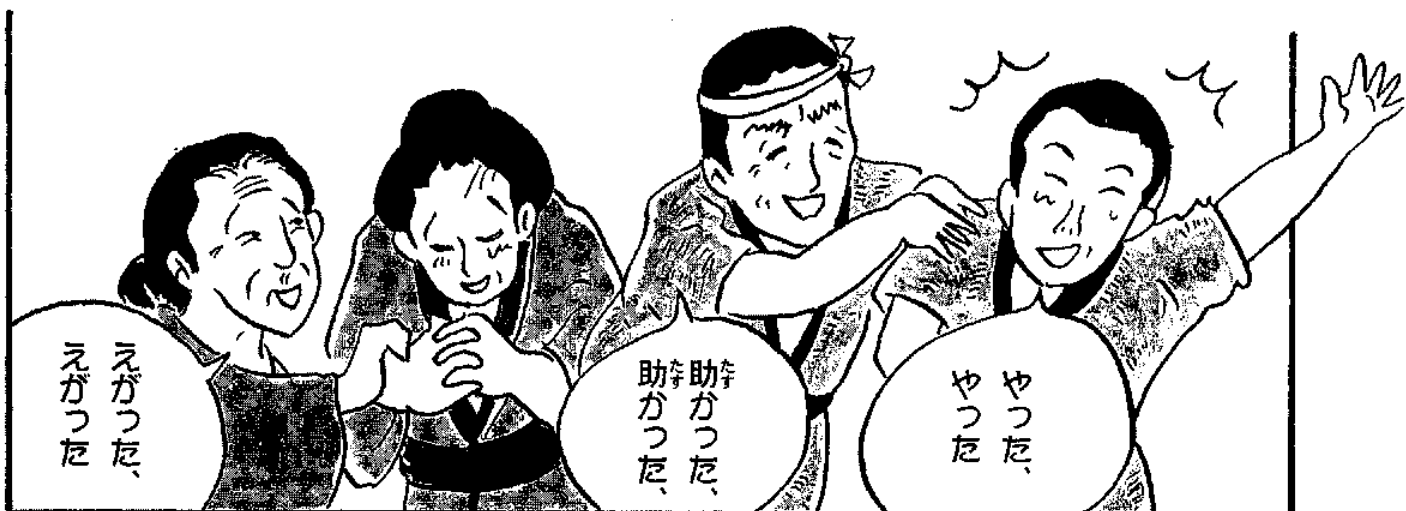


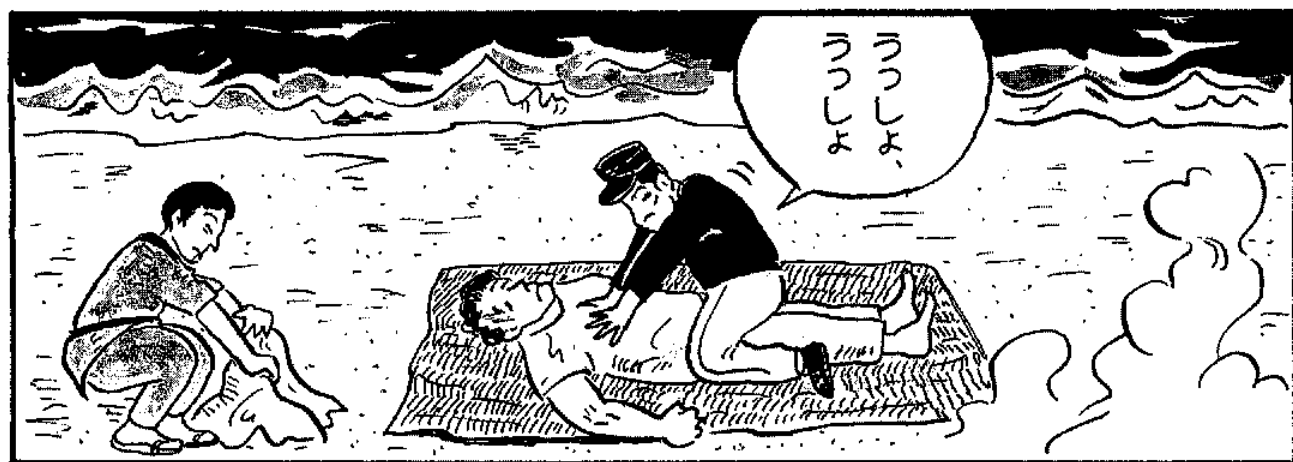
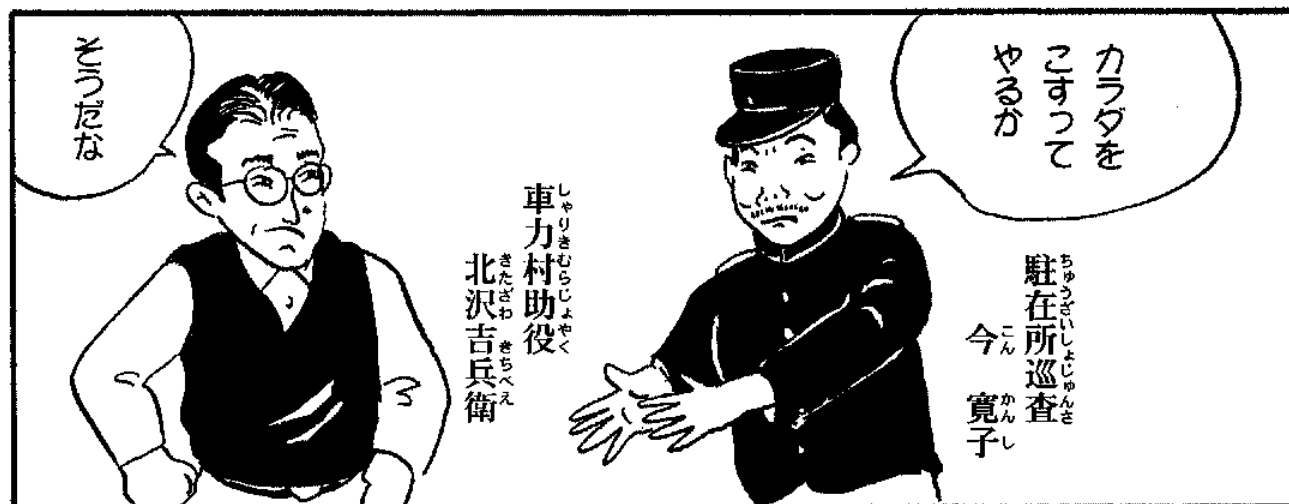
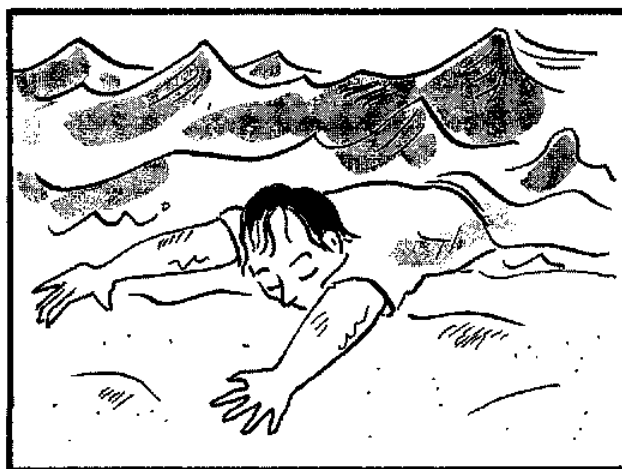
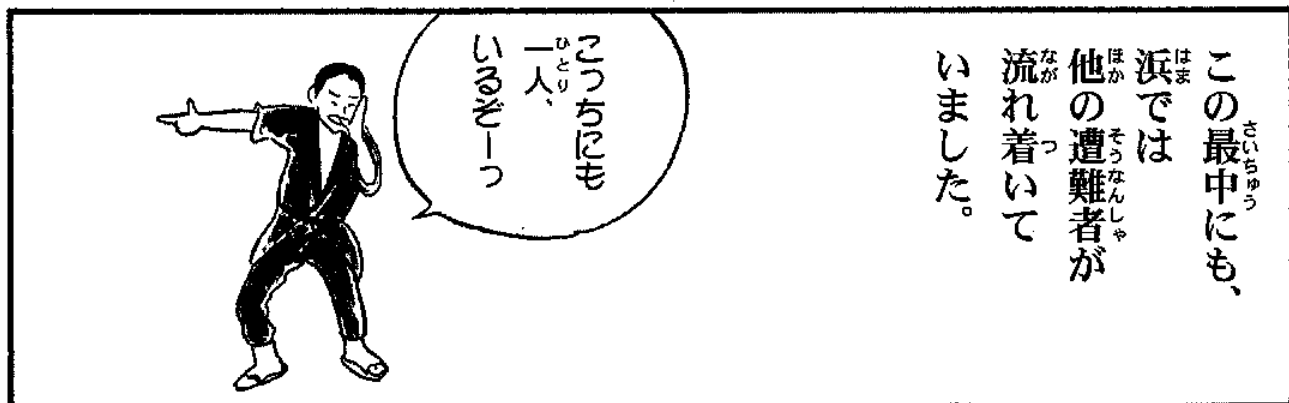
漁夫・工藤吉右衛門の妻、
「はん」は、以前に凍死寸前の
人を助けたことがあり、寒さで
極度に弱っている者は、



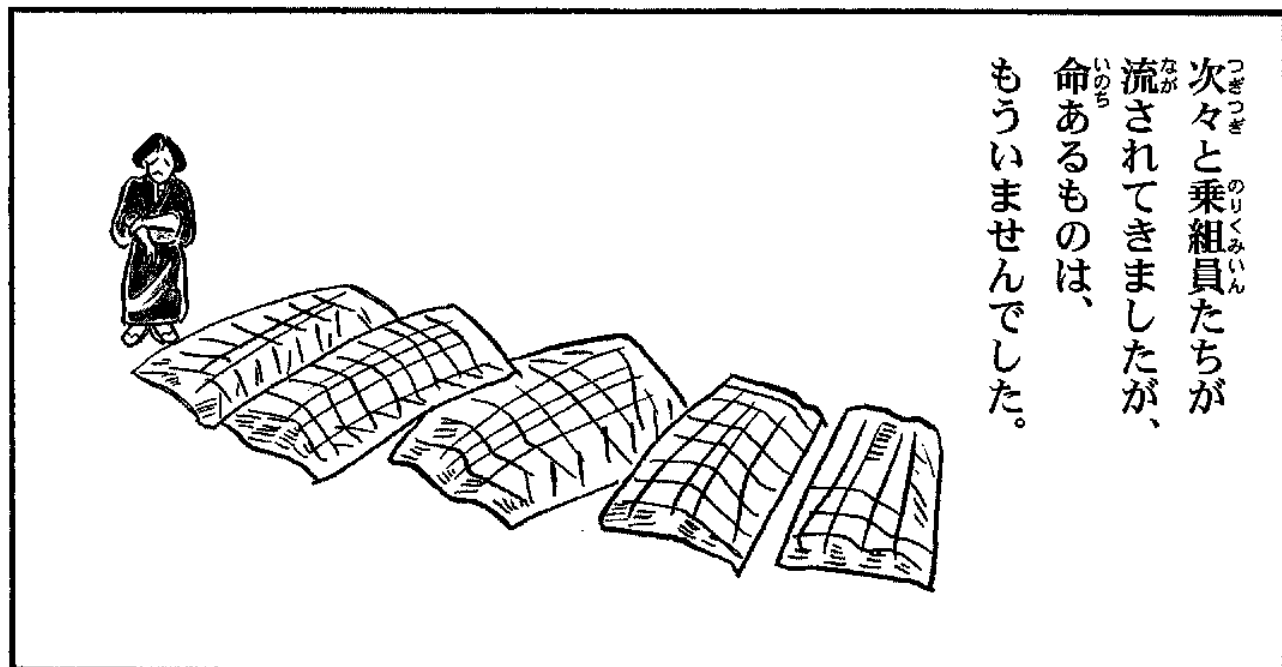
急に暖めるより、
人肌でゆっくり暖めるほうが
いいことを知っていたのです。
たとえ初めて見る外国人でも、
助けたいという気持ち
がそうさせたのでしょう。











第2話

村人たち

冷つめたくなつた体からだを暖あためるために、
火ひを燃もやし続つづける人ひと、
そのための枯かれ枝えだを集あつめる人ひと、
みそ汁しるを煮にる人ひと、……。
みんな、それぞれが分ぶん担たんして、
動うごきまわっていました。



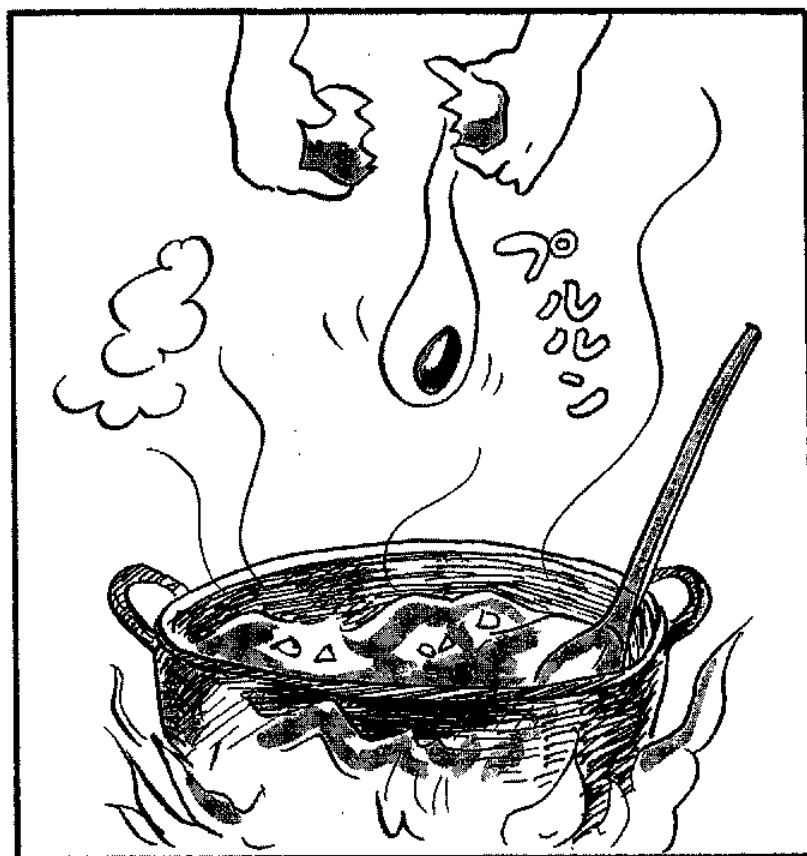
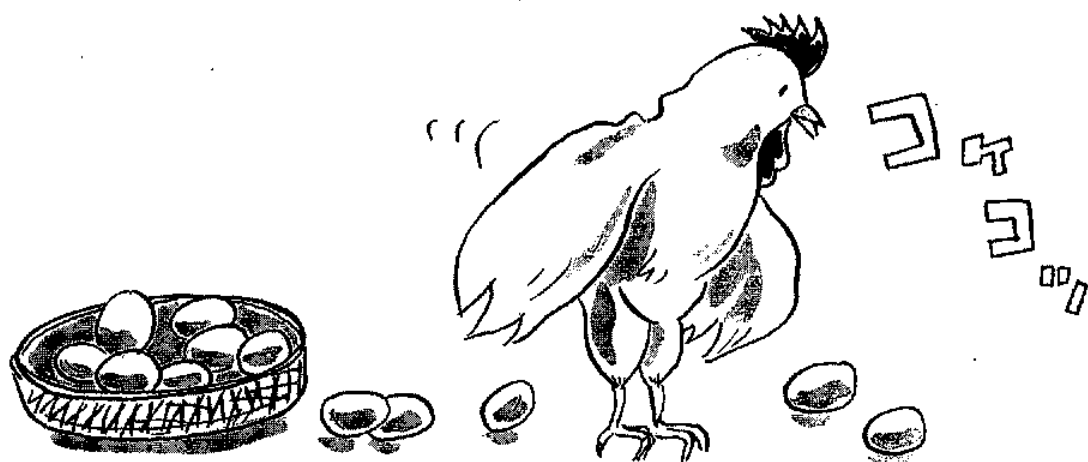


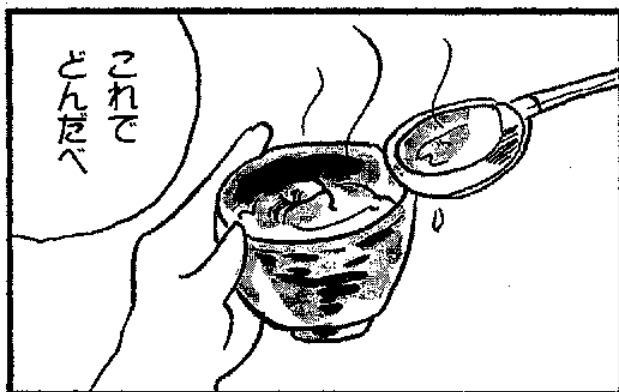
明治二十二年めいじ ねんごろ
津軽半島の北つがるはんとう きたにある車力村しやりきむらは
夏なつでも冷つめたい風かぜが吹ふき、
三年さんねんに一回いっかいは凶作きようさく、不作ふさくに
見舞みまわれる貧まずしい村むらでした。
小作人こさくにんである多おほくの村人むらびとは
地主じぬしから田たを借かり
年貢ねんぐを納おさめなければ
いけませんでした。

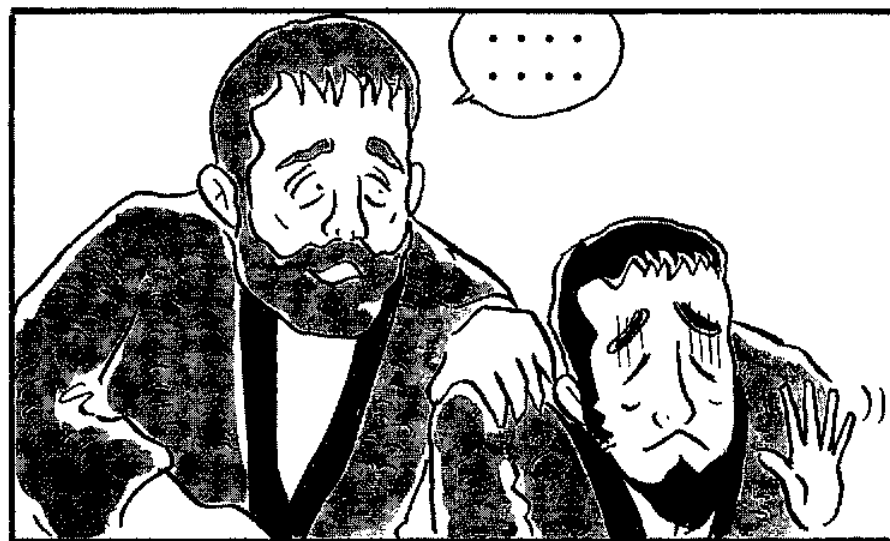
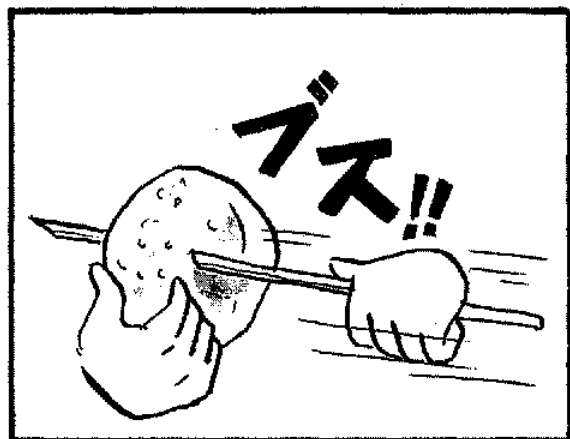
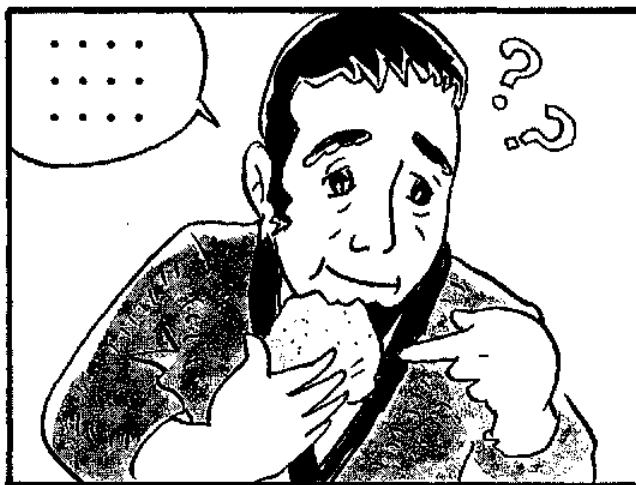
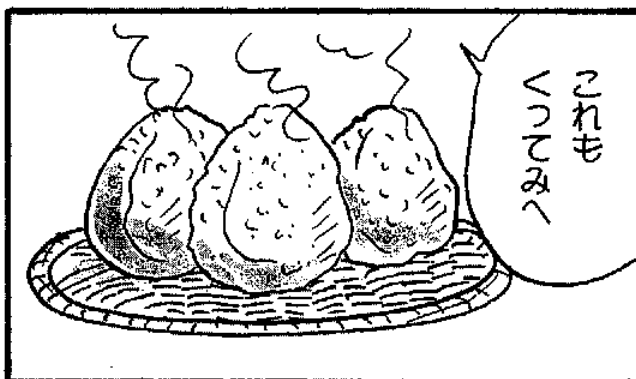
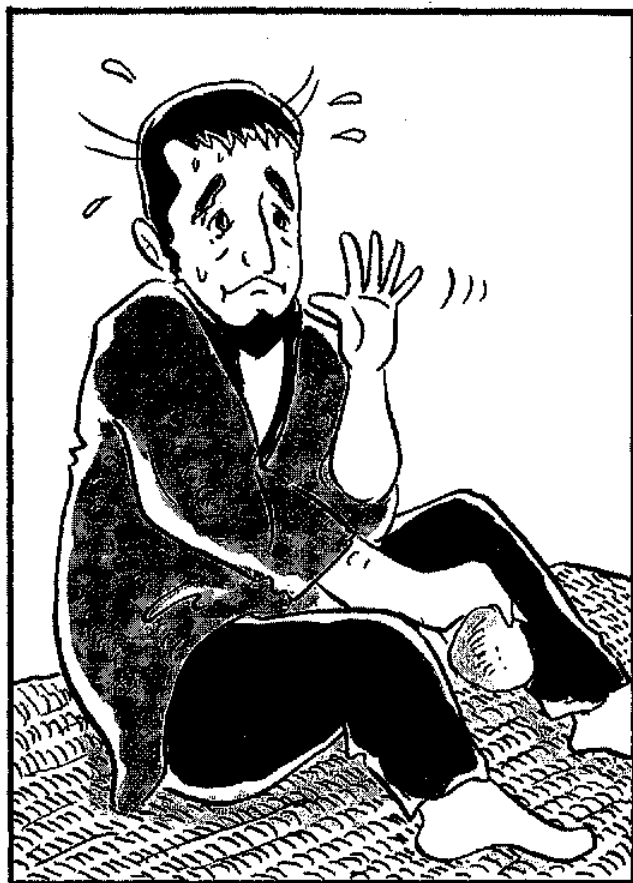


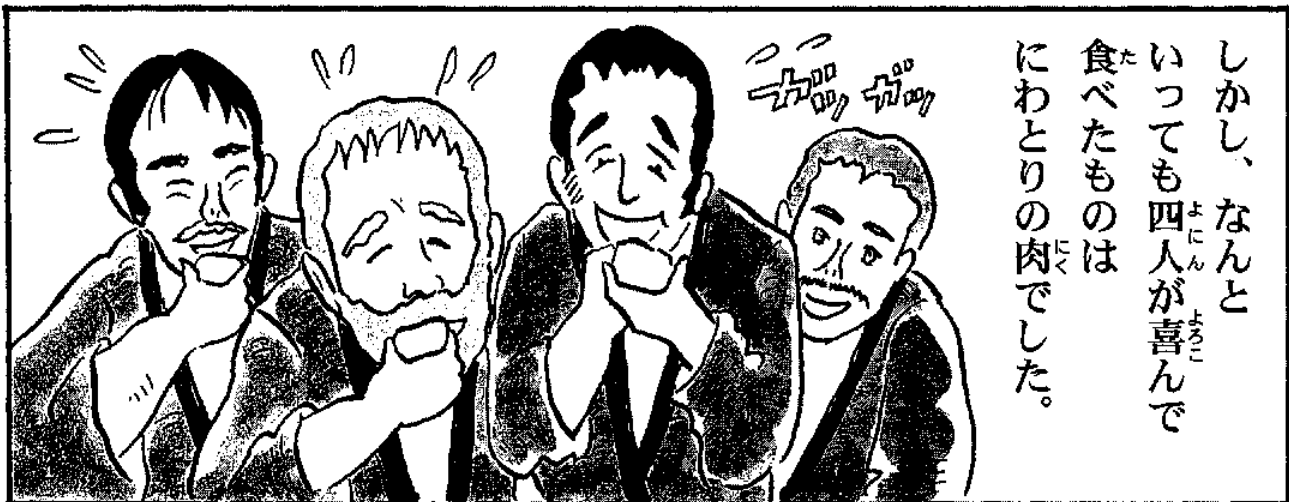
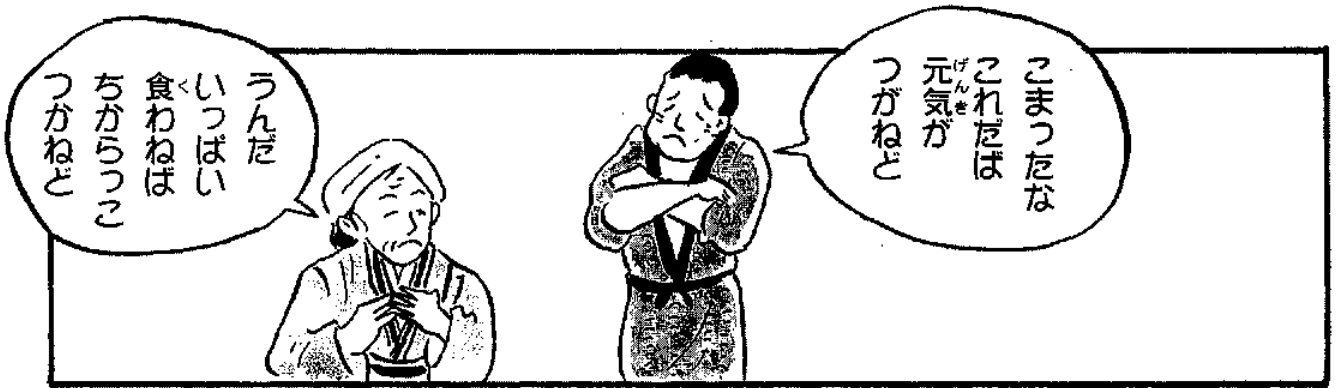
玉子^{たまご}はとても貴重^{きちよう}なもので
食^たべるものではなく
売^うるものと考え^{かんが}ていました。
玉子^{たまご}を産^うむ、にわとりは
もつと大切^{たいせつ}なものです。
それでも車力村^{しやりきむら}の人々^{ひとびと}は
おしみもなく
命^{いのち}を失^{うしな}いかけた遭難者^{そうなんしゃ}に
提^{てい}供^{きよう}しました。

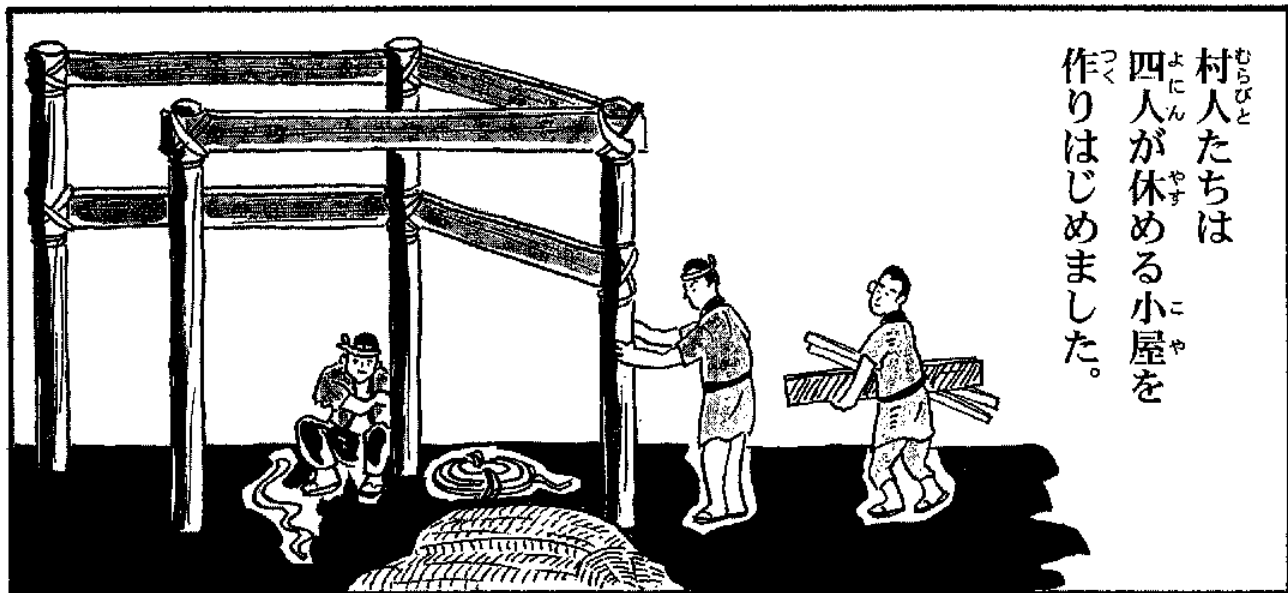








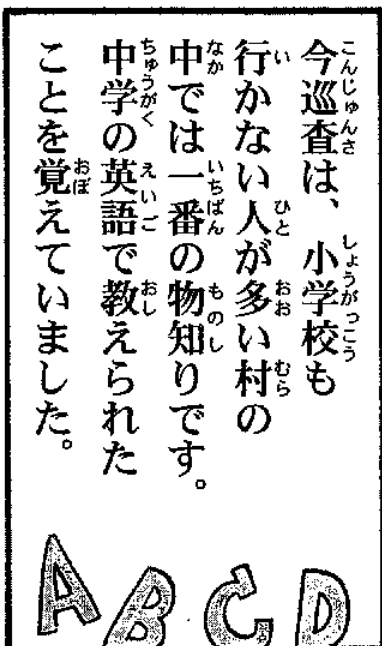




村人たちは
四人が休める小屋を
作りはじめました。



そんな
見たことも
ないもの、
作れねえ



今巡査は、小学校も
行かない人が多い村の
中では一番の物知りです。
中学の英語で教えられた
ことを覚えていました。

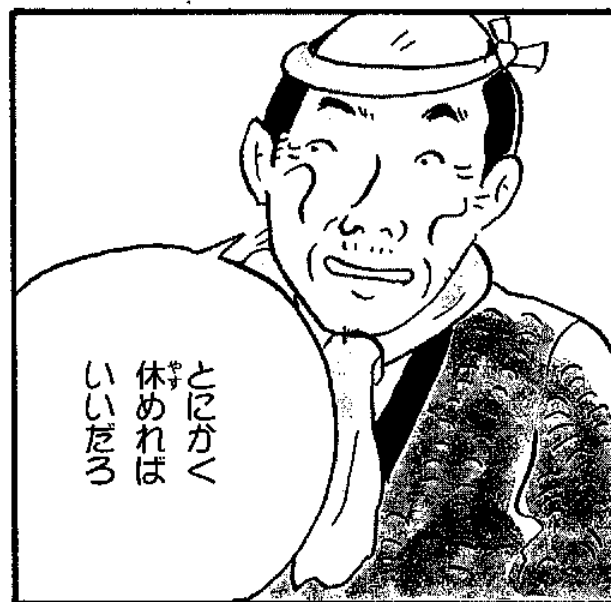
A B C D



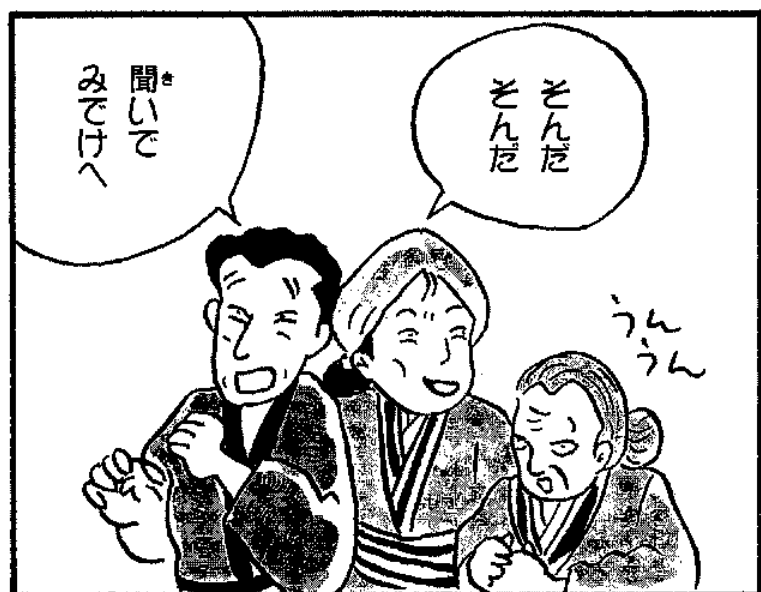
外国では、
ベッドとか
いうものに
寝るらしいぞ

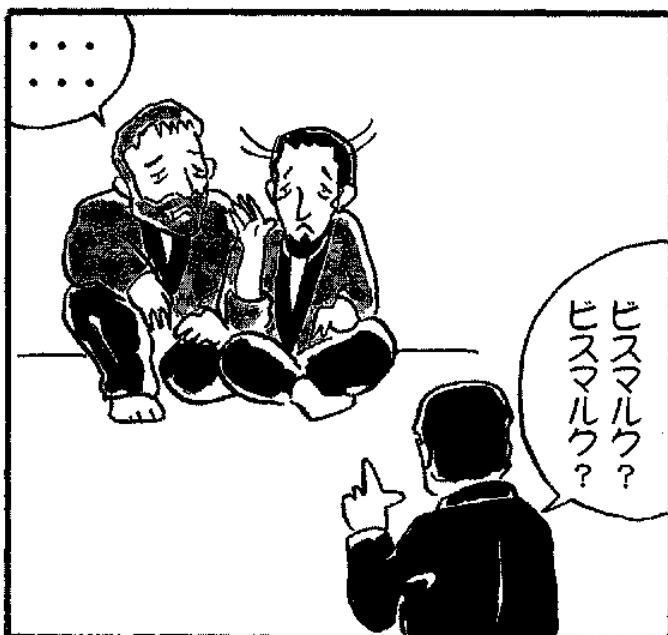


この
桃太郎の
鬼みたいな
人たちが、
どこの
国から
来たん
だべ

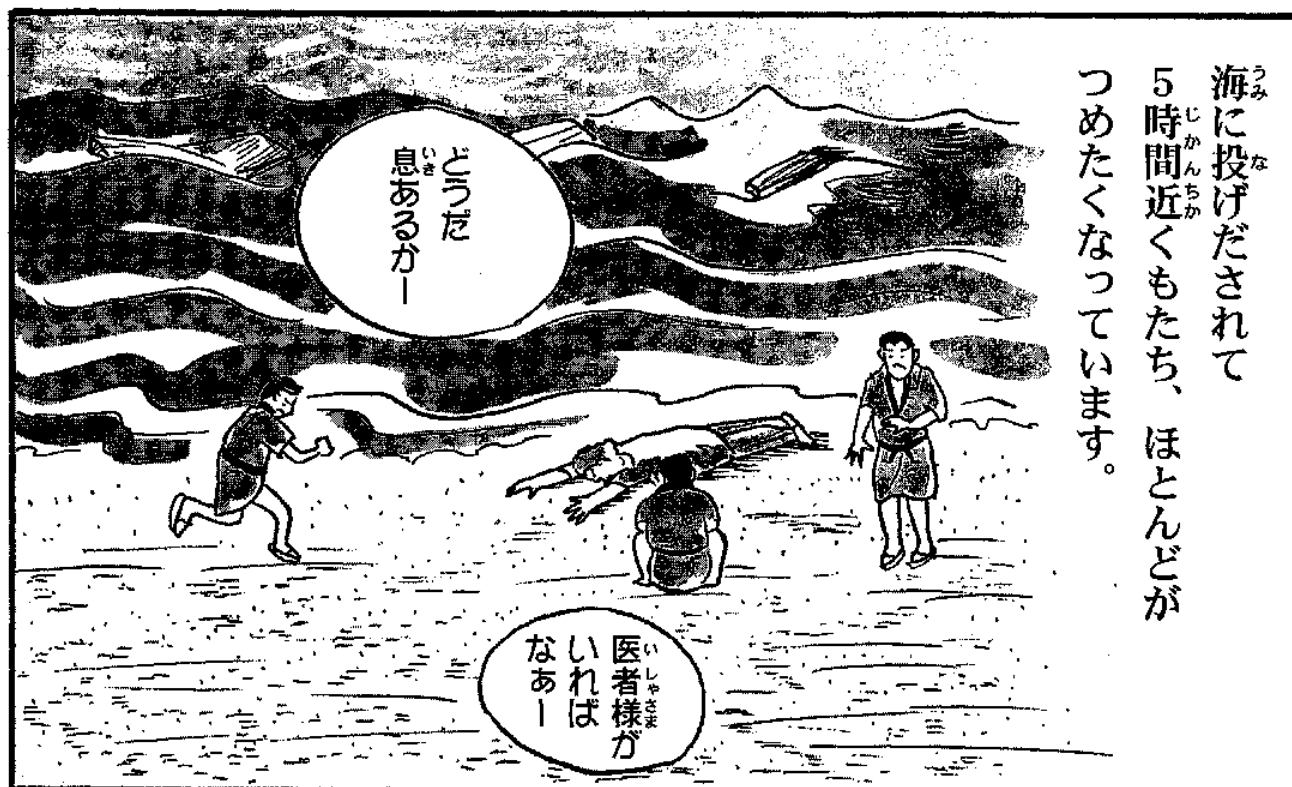
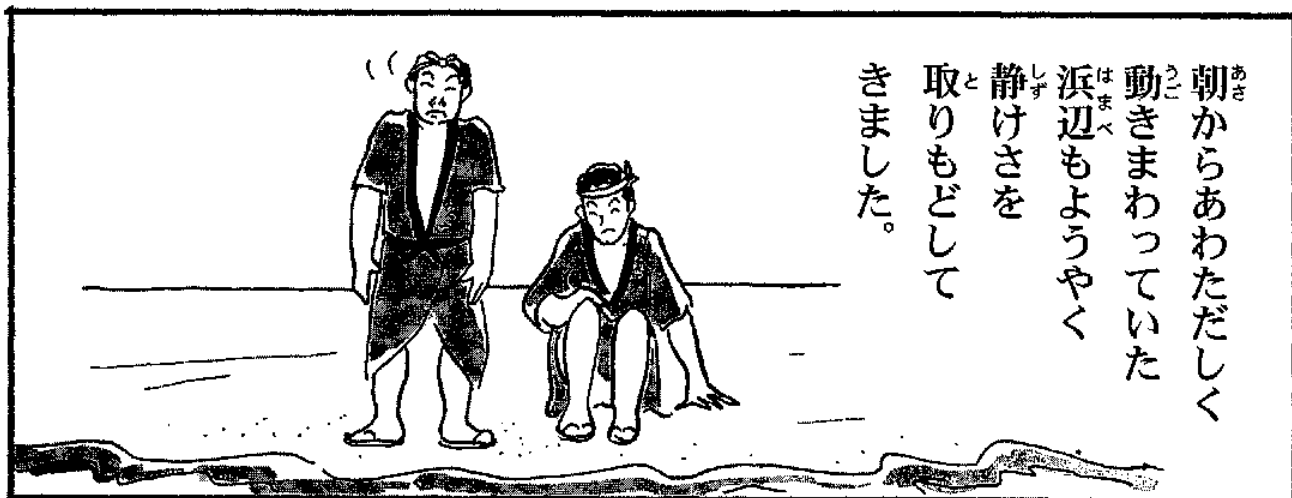


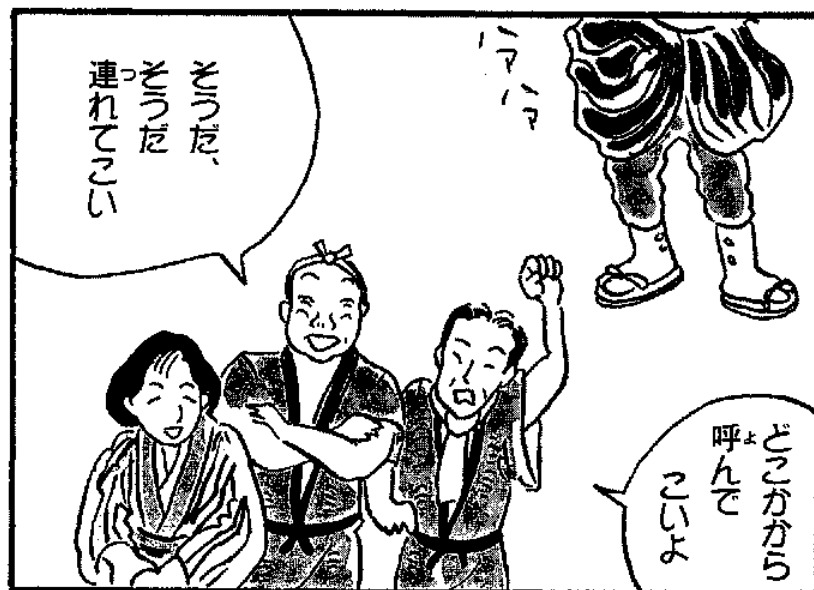
とにかく
休めれば
いいだろ

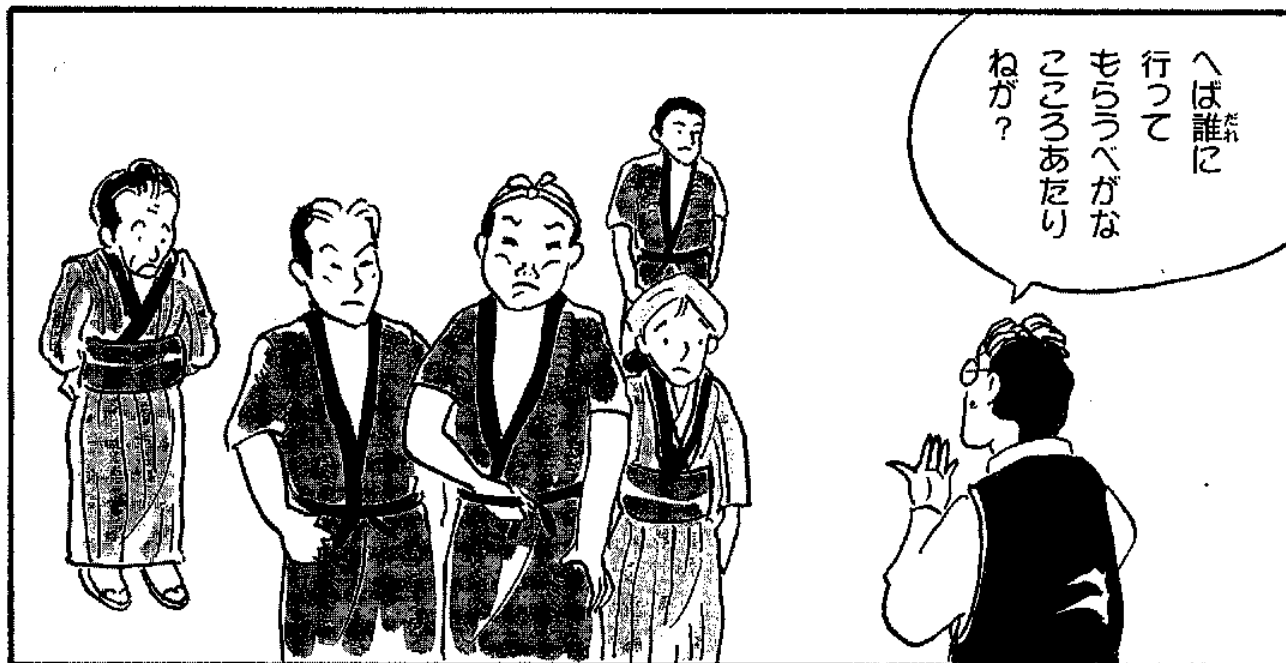








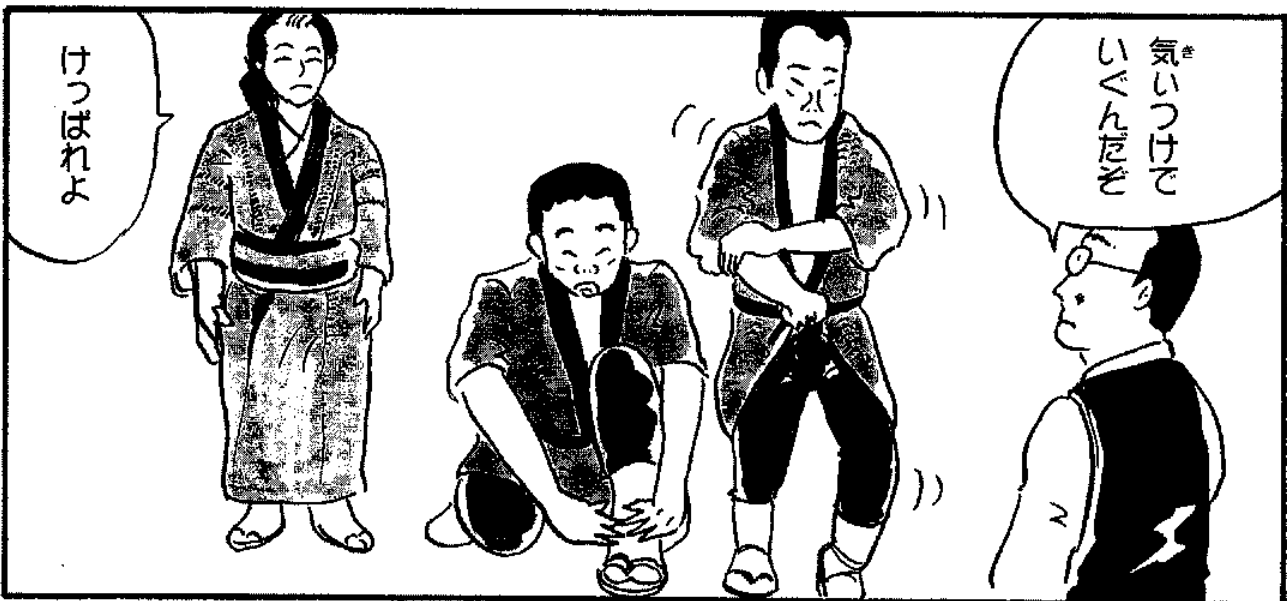
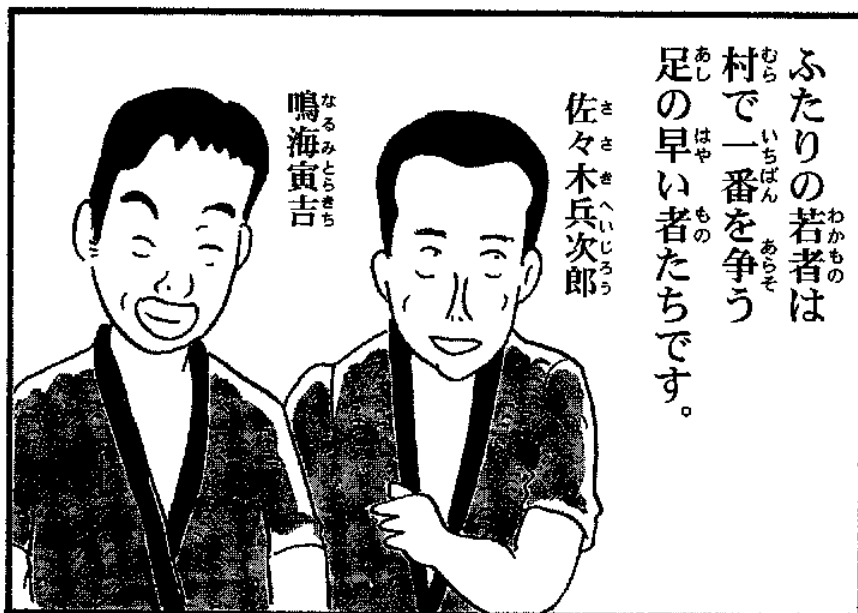


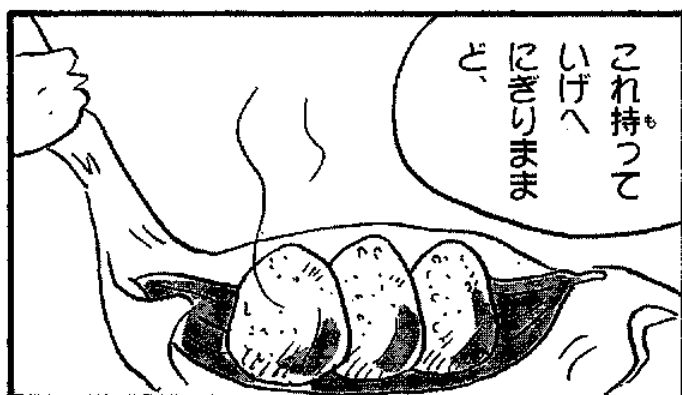
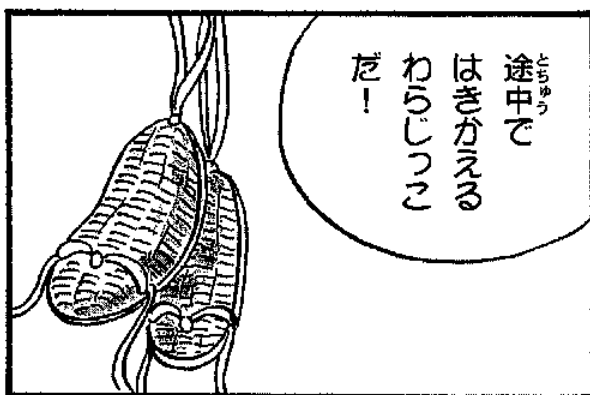


第3話

—^{ふたり}二人が^{はし}走る—







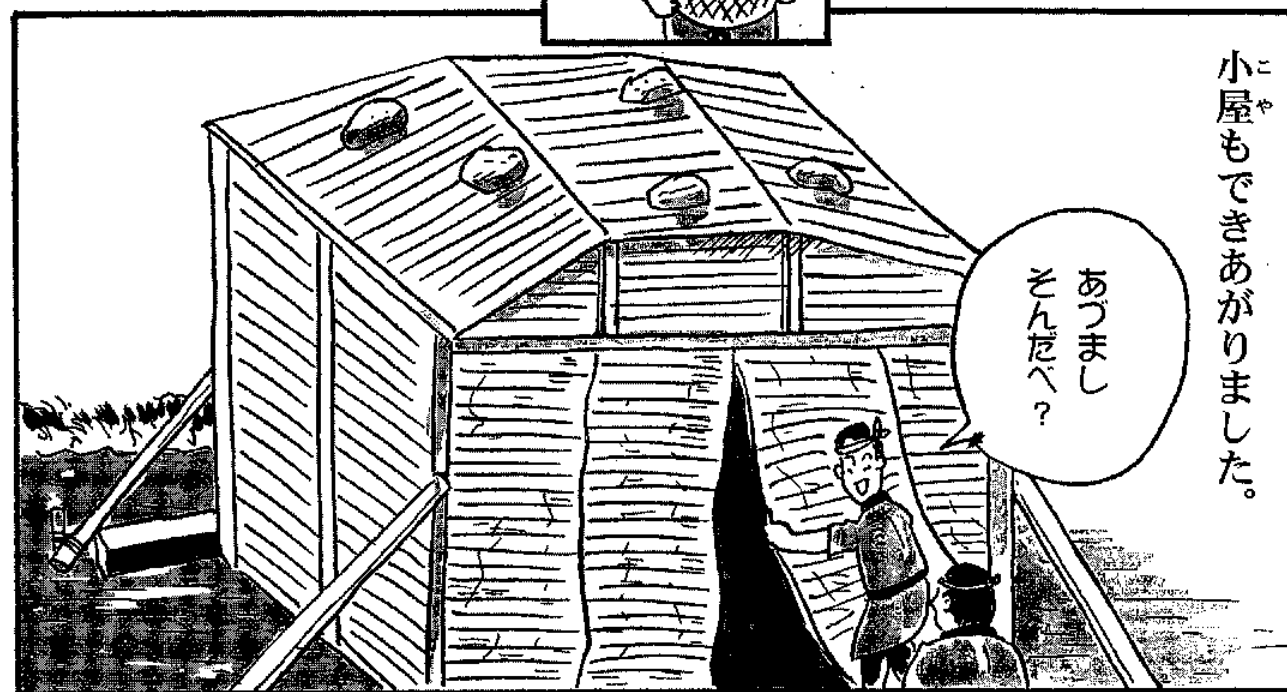
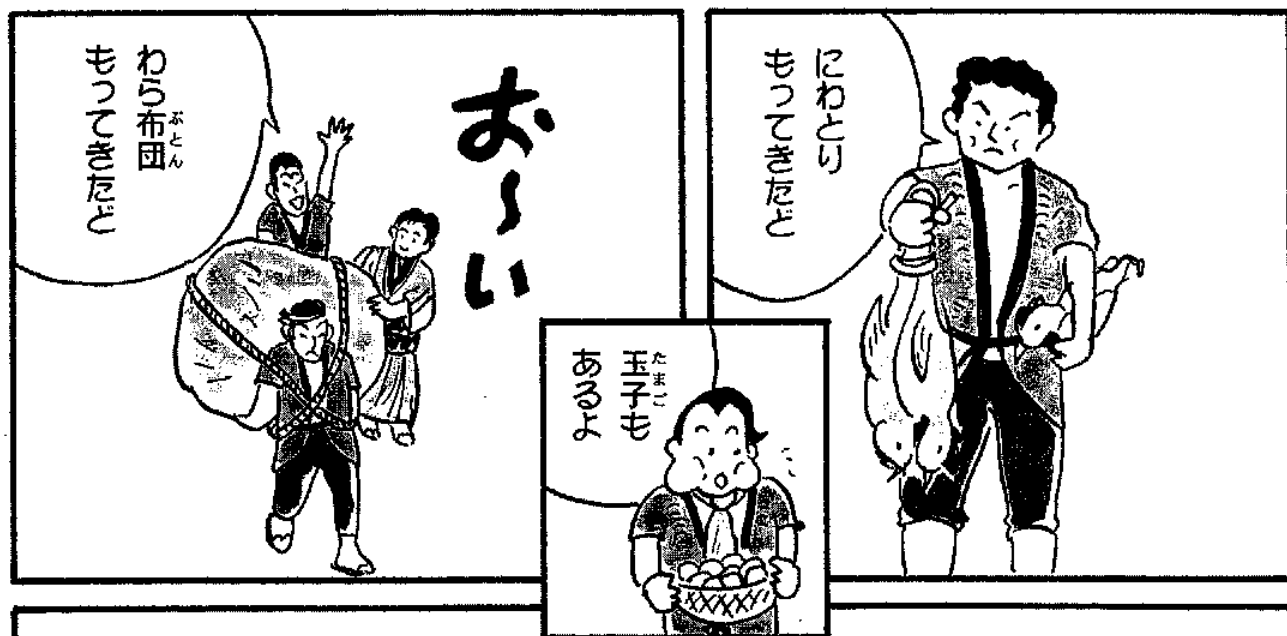
こうして、夜道よみちを走はしる
覚悟かくごで二人は走り始めました。



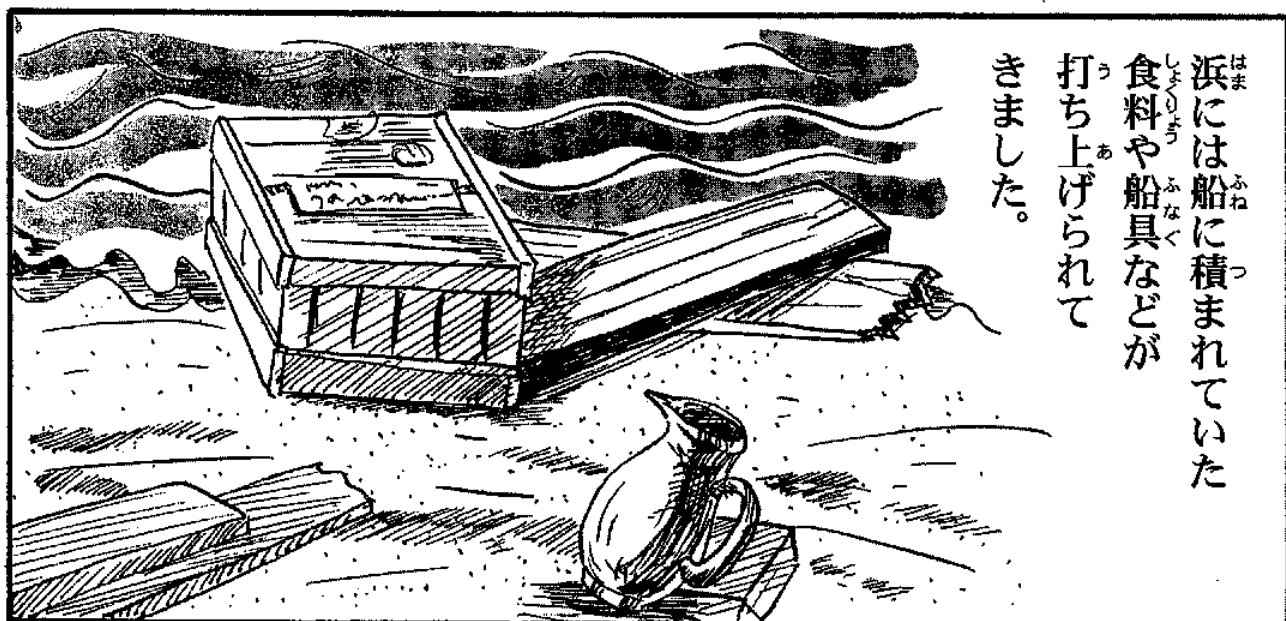
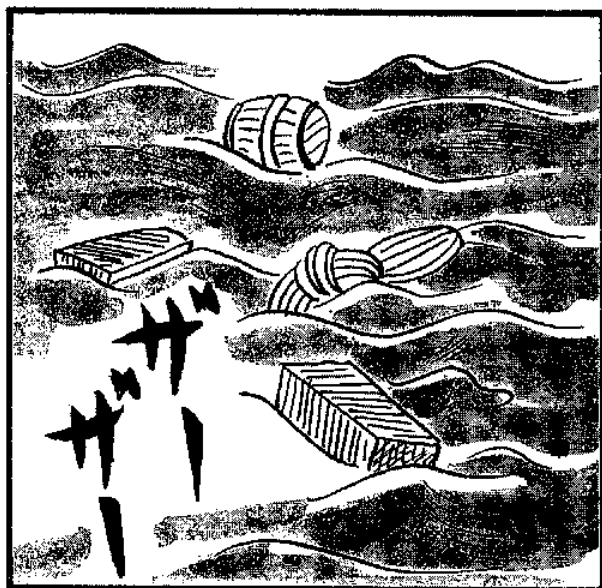
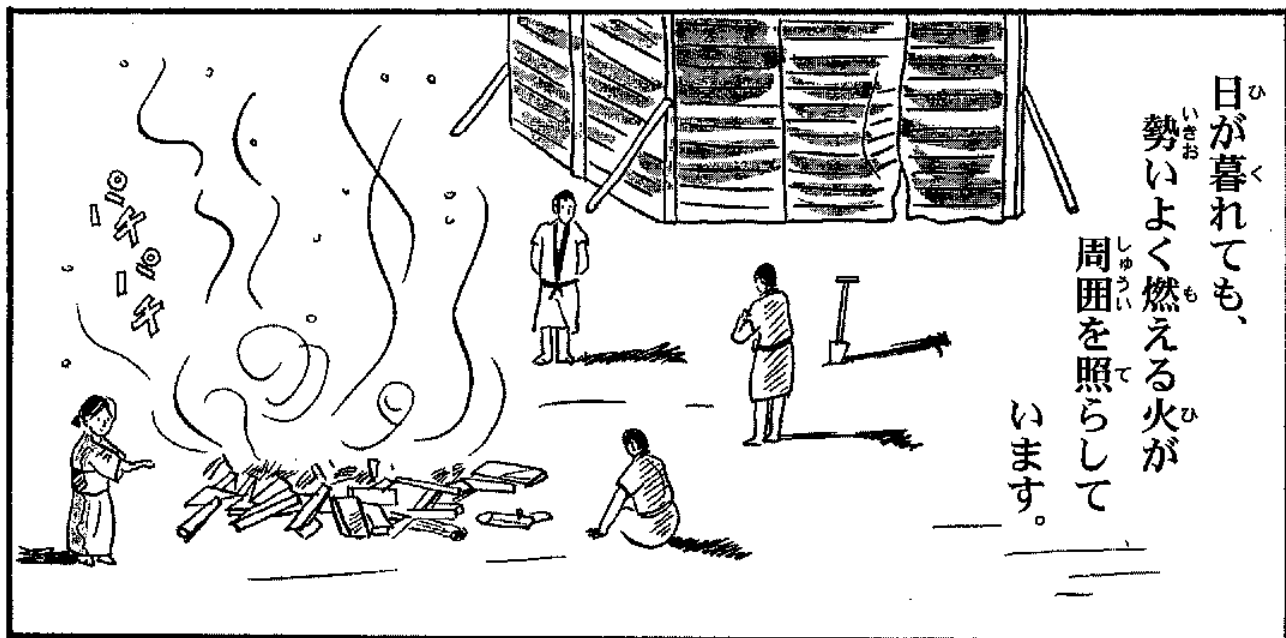




はまべ
浜辺には、この頃
とみやちとよとみしやりきうしがた
富范、豊富、車力、牛瀉など
しやりきむらひと
車力村の人たちだけでなく
となむらたておかむらひらたき
隣り村の館岡村の平滝や
どうぎさかそんらくひとびと
筒木坂の村落の人々も
きゆうじよかつどう
救助活動に
加わっていました。



こや
小屋もできあがりました。



海が真っ黄色だ



海を黄色く染めたのは、
函館港で積んだ
硫黄でした。



なんだ？
あの丸い
筒みたいの



村人が初めて見る
缶詰めでした。

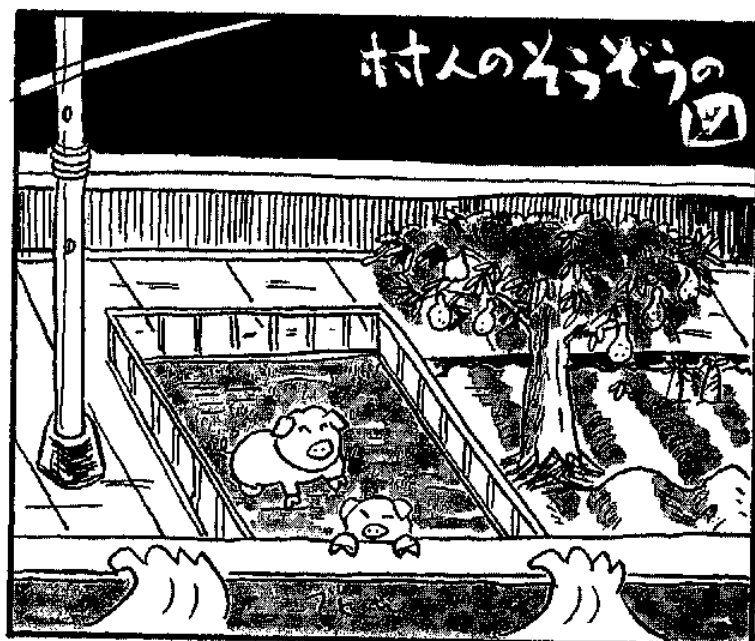
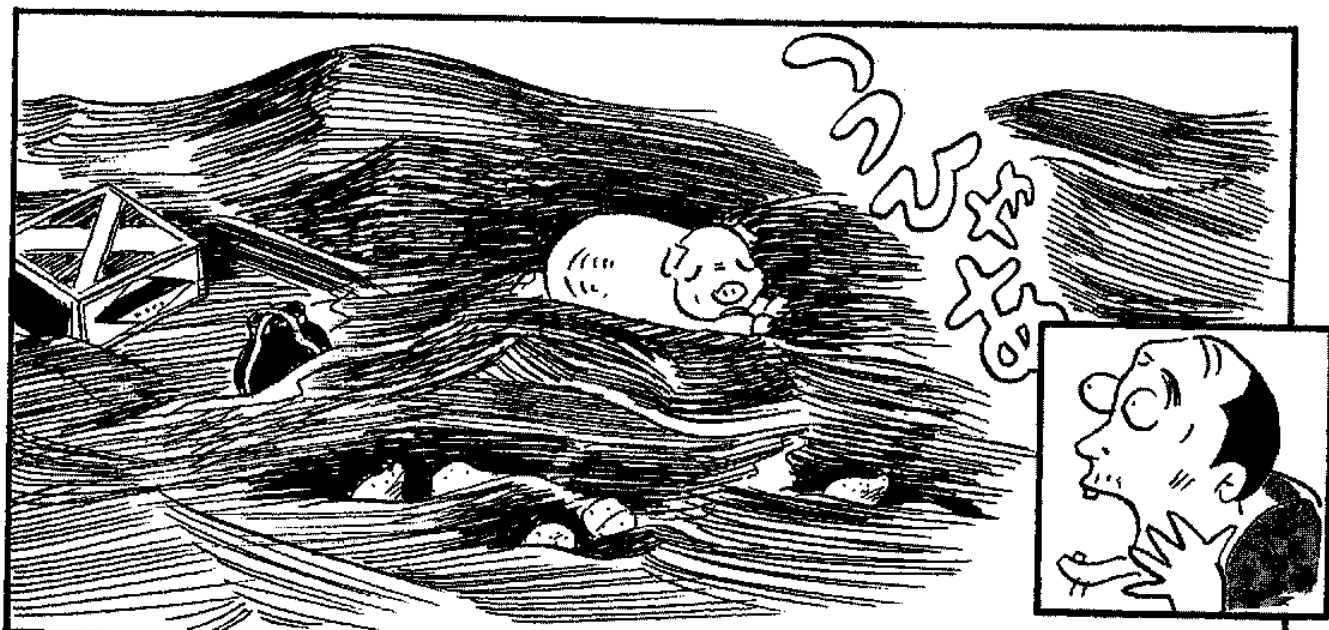


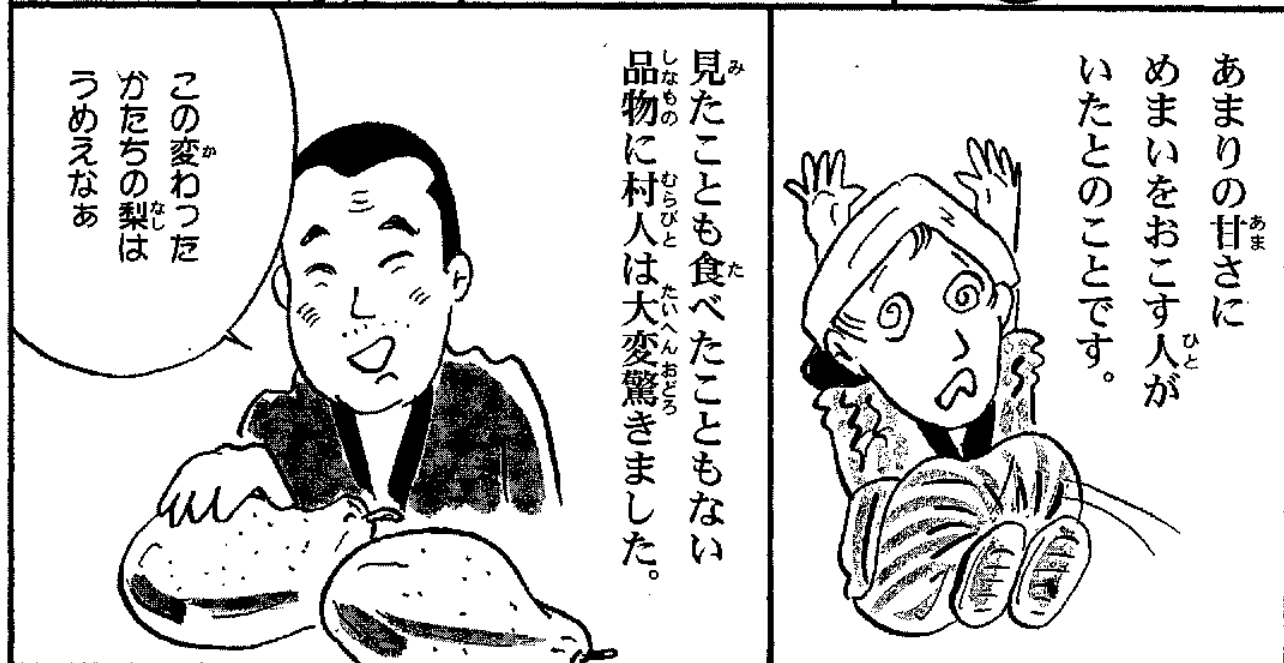
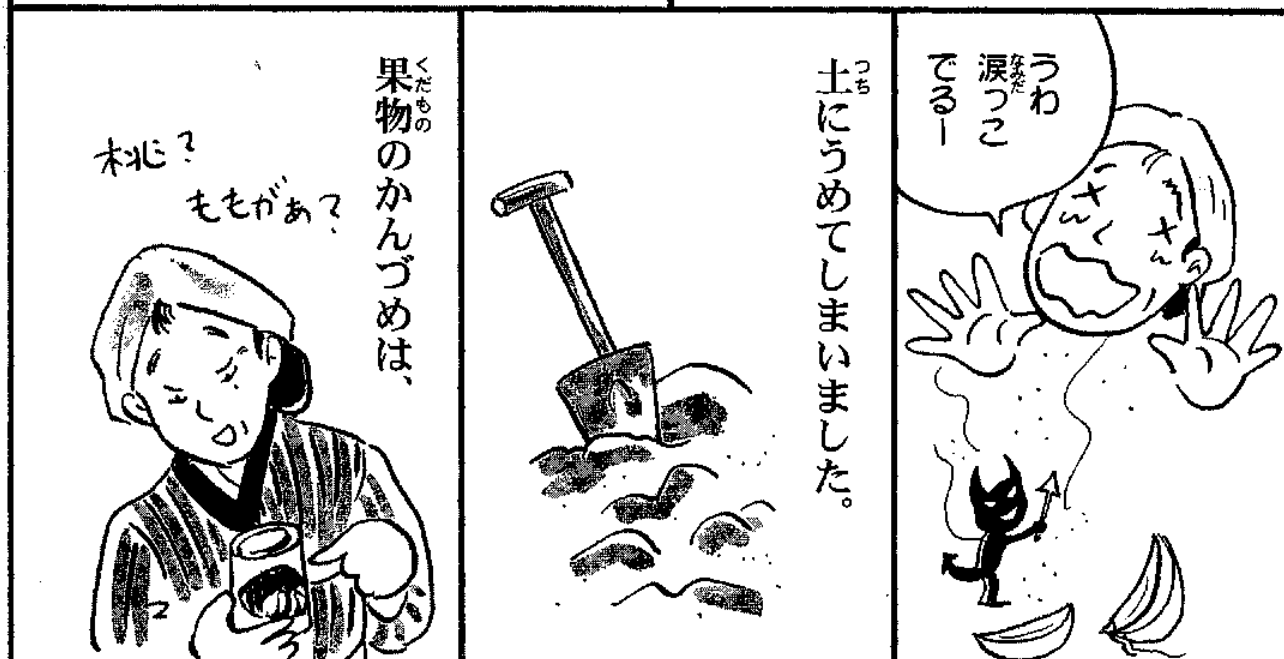
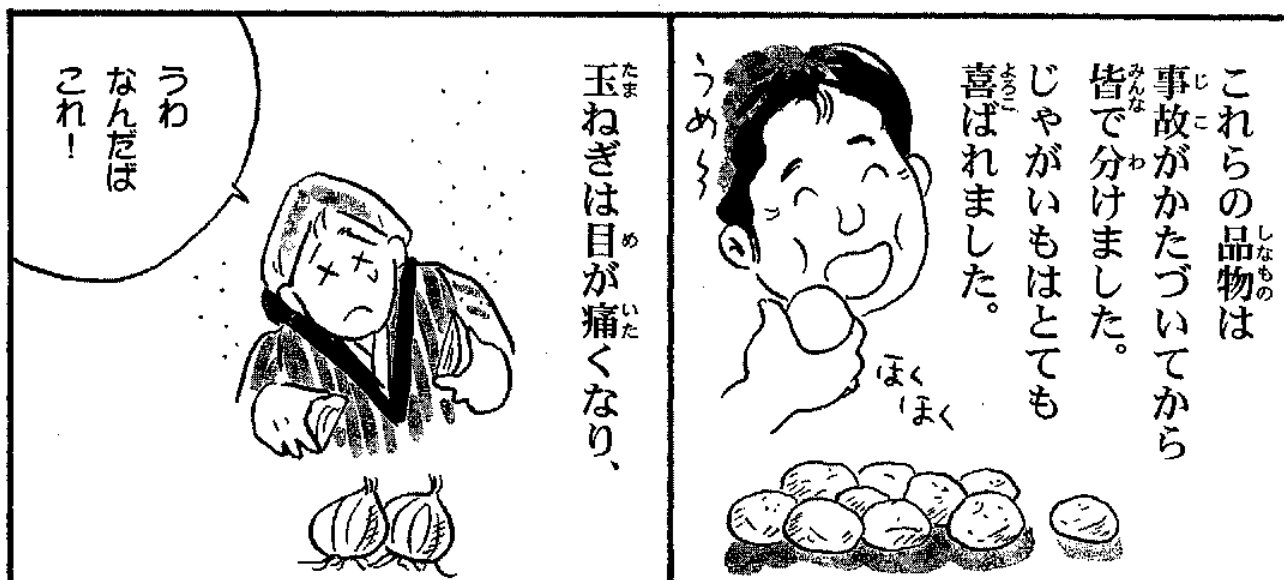
きれい
だけど、
食える
のか？

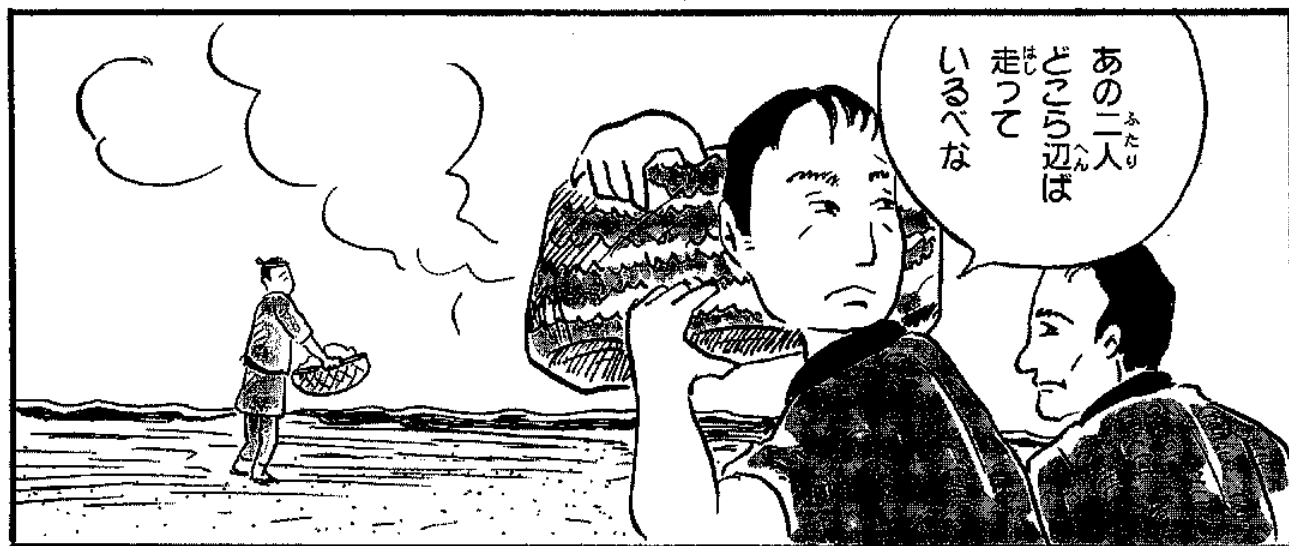


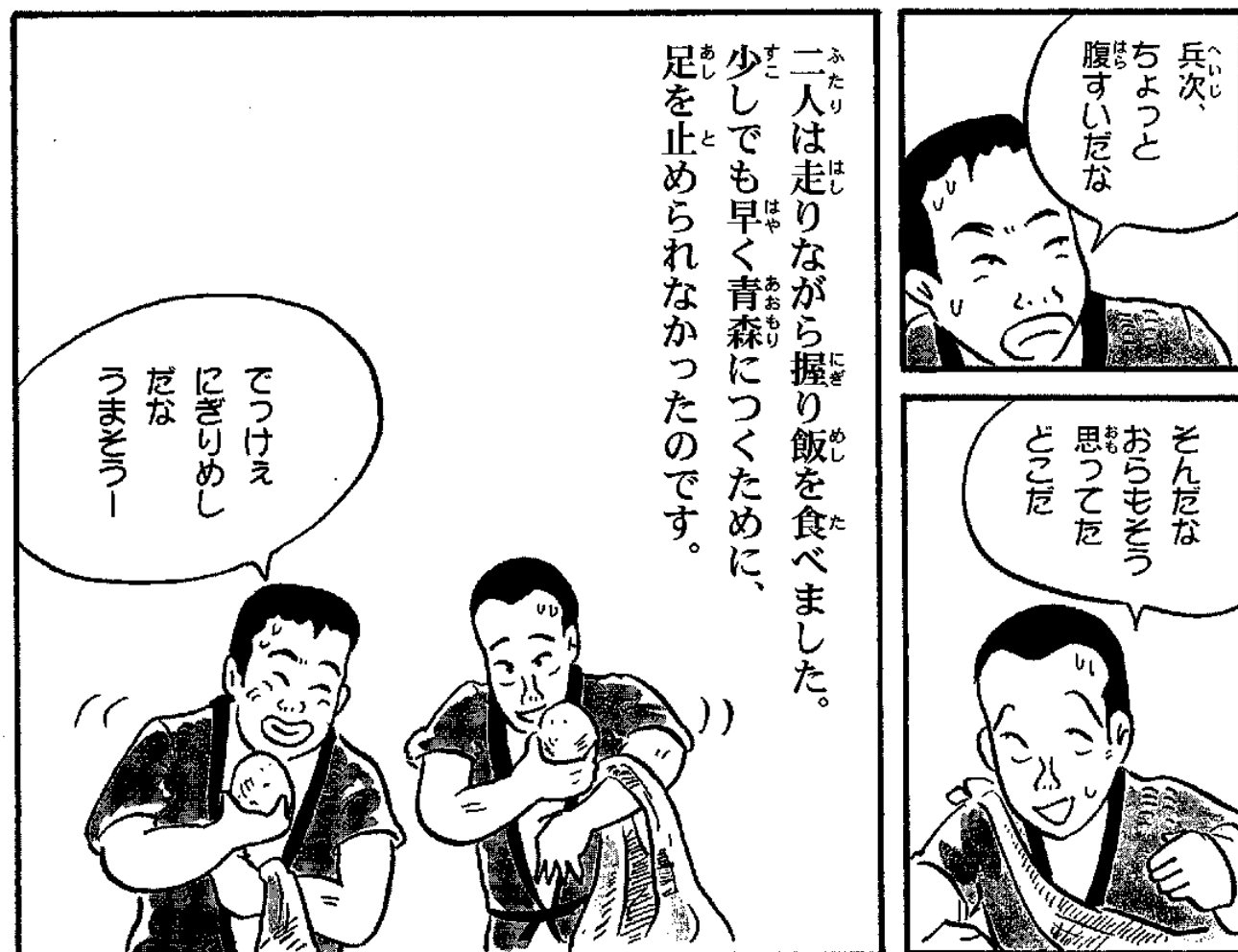
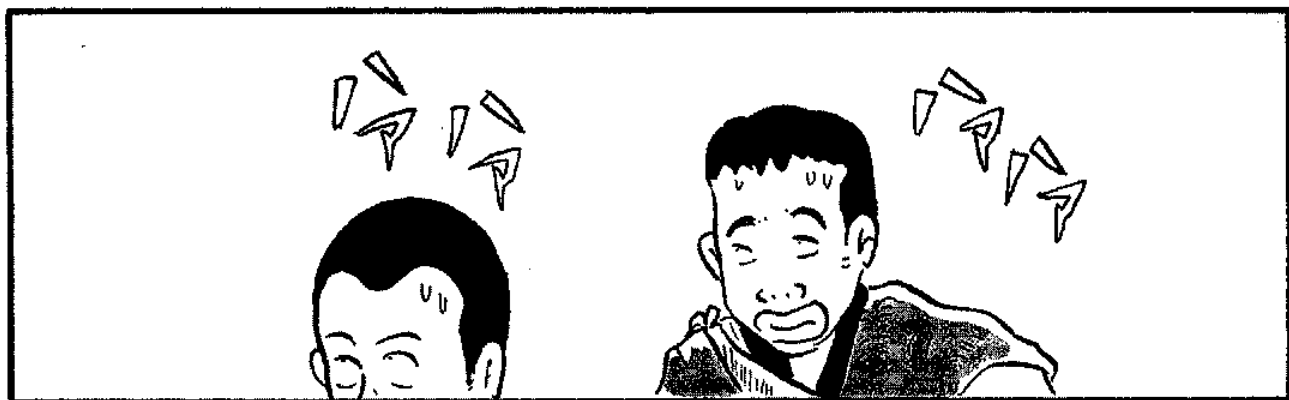
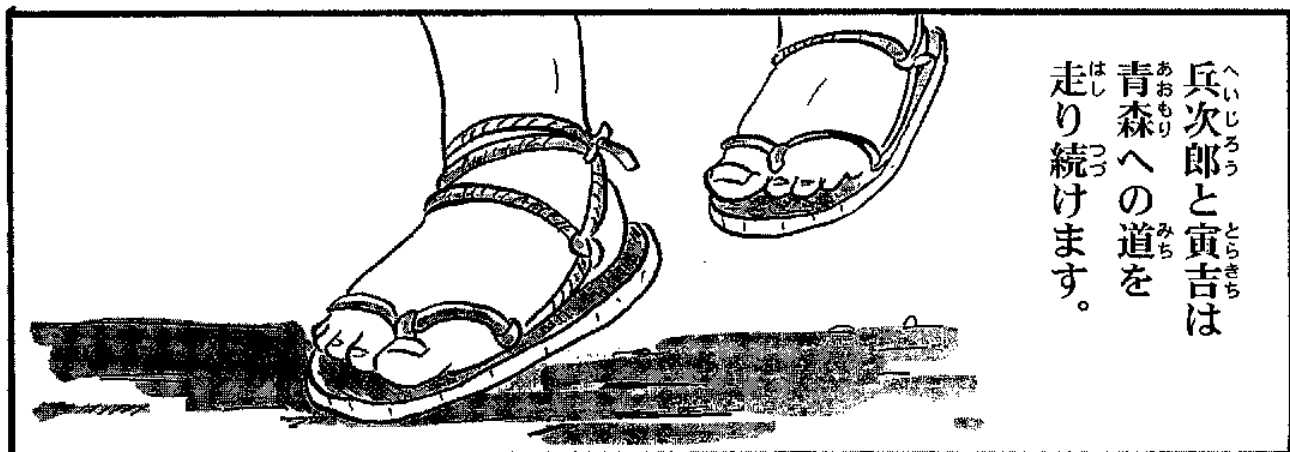
これは
桃の絵だ

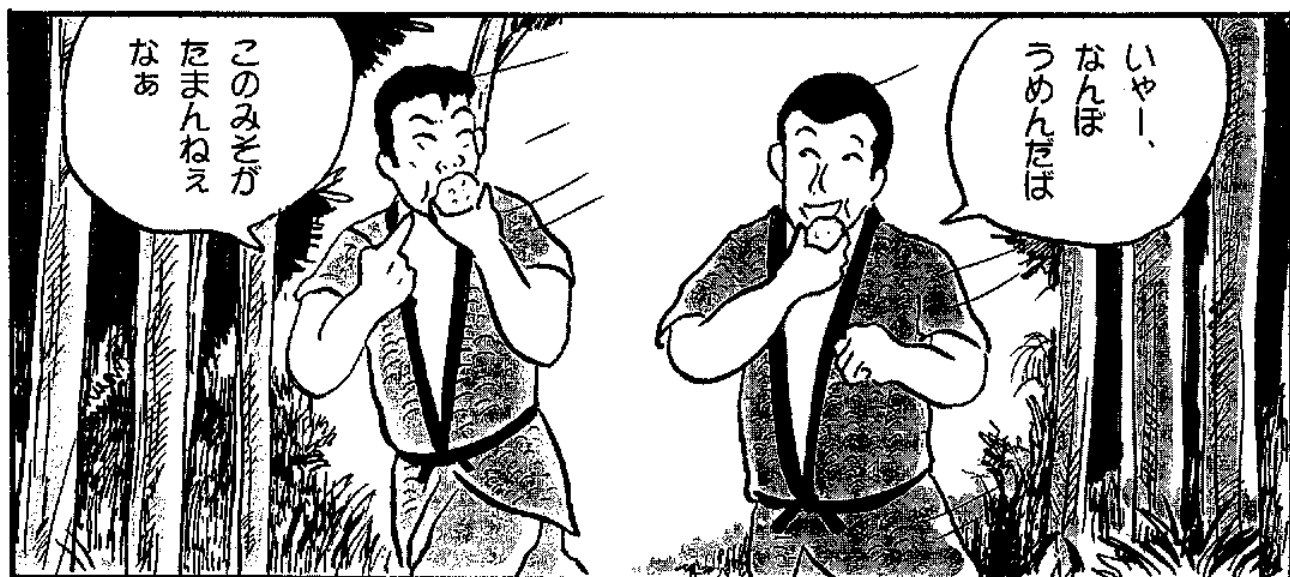






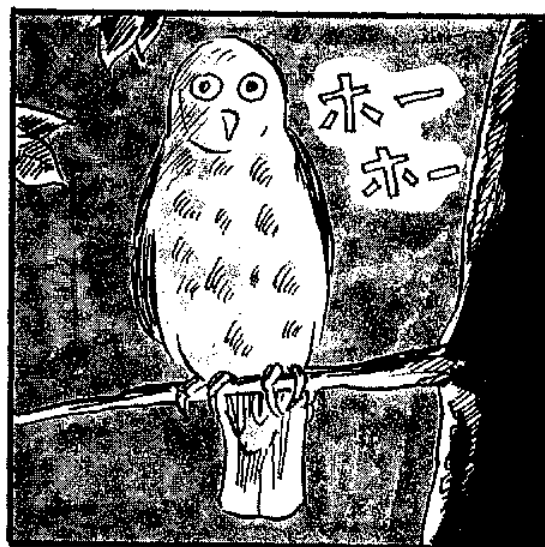








わらじをはきかえ
き
氣を引きしめました。



ホー
ホー



おう！
けっぱる
ぞー

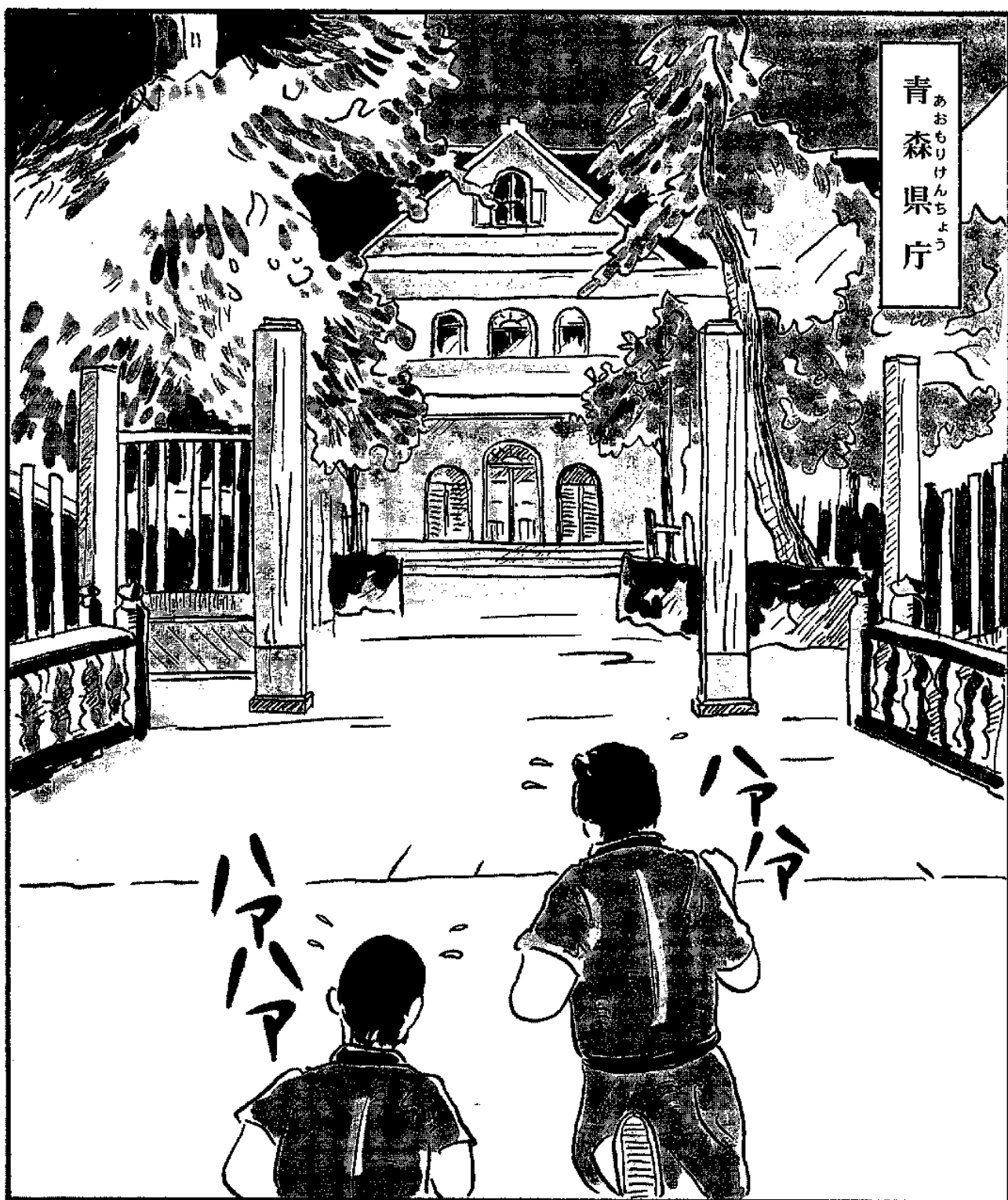


よし！
いぐべ



はじめ競いあっていた二人は、
ながきより
長い距離を走る間、いつのまにか
励ましあうようになっていったのです。





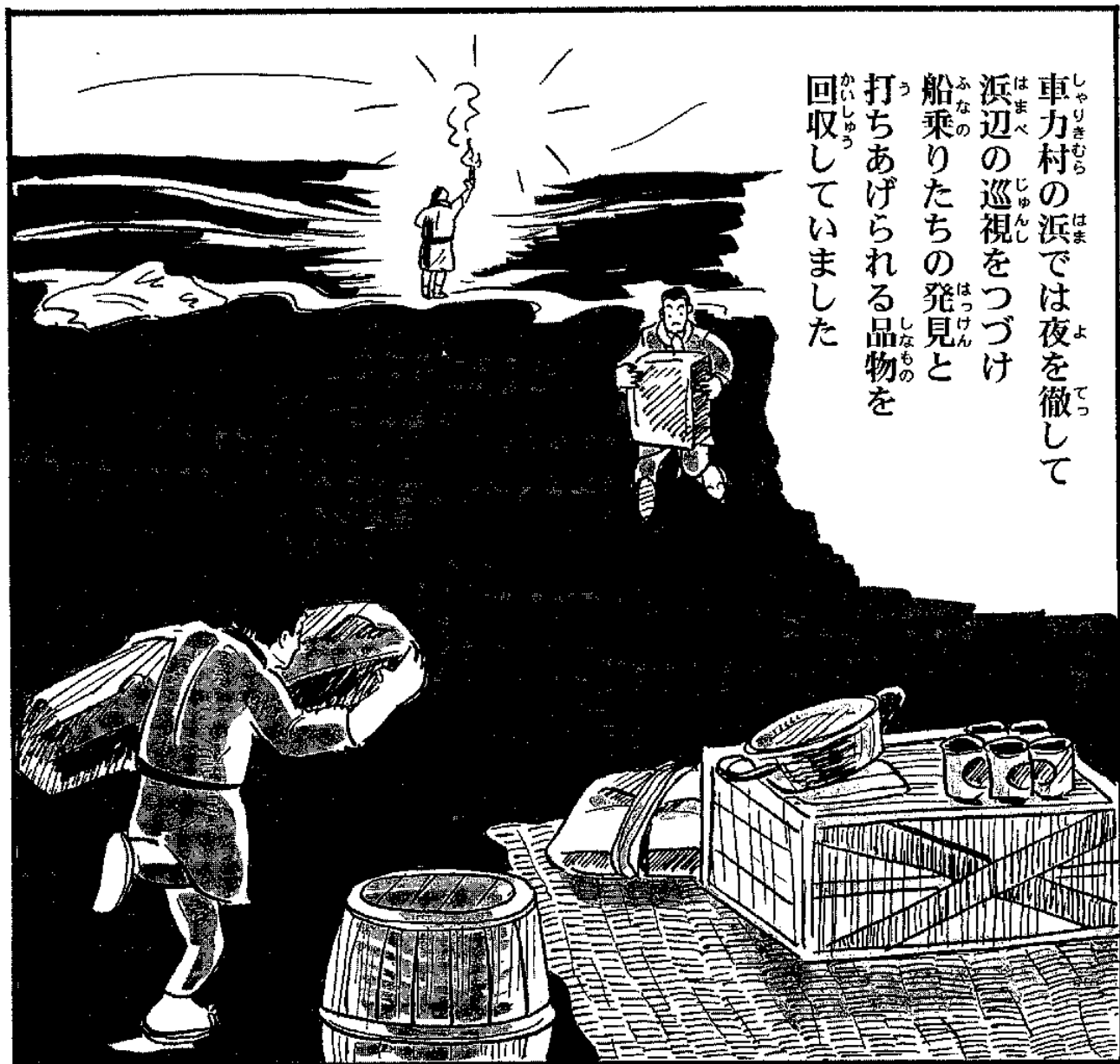




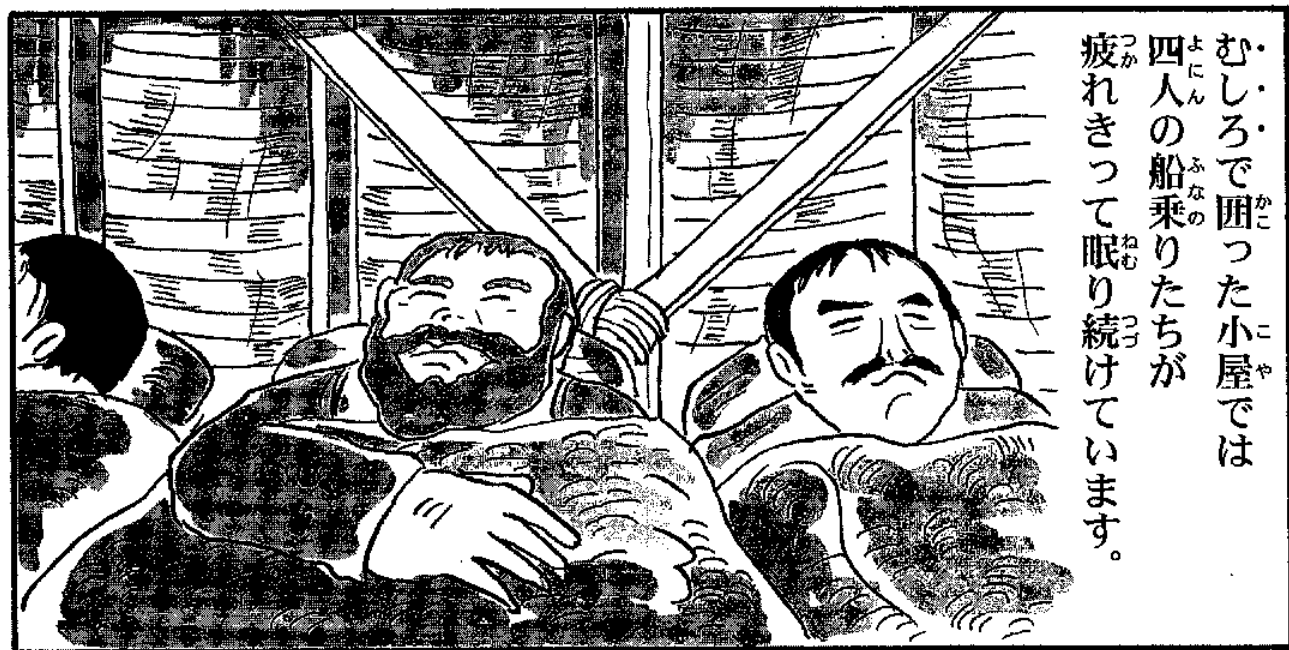
第4話

— 悲^{かな}
しみ —



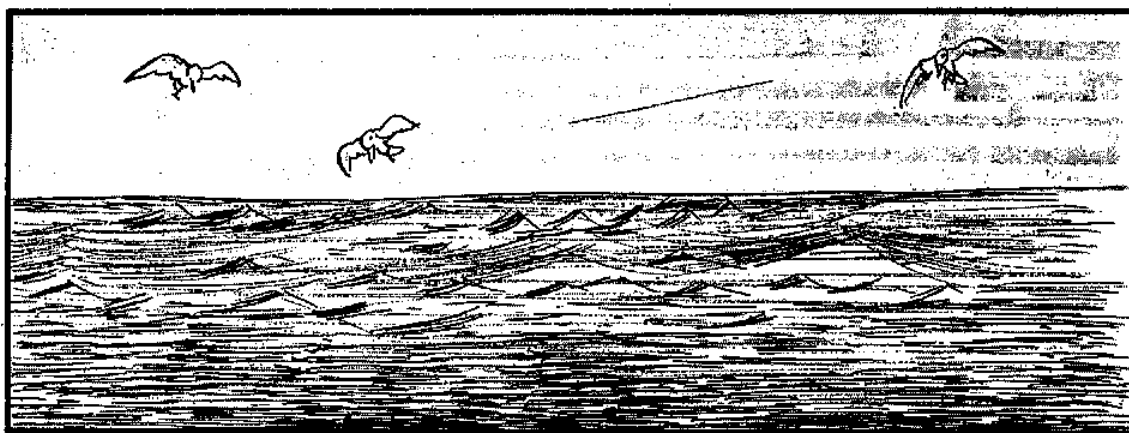


車力村の浜では夜を徹して
浜辺の巡視をつづけ
船乗りたちの発見と
打ちあげられる品物を
回収していました

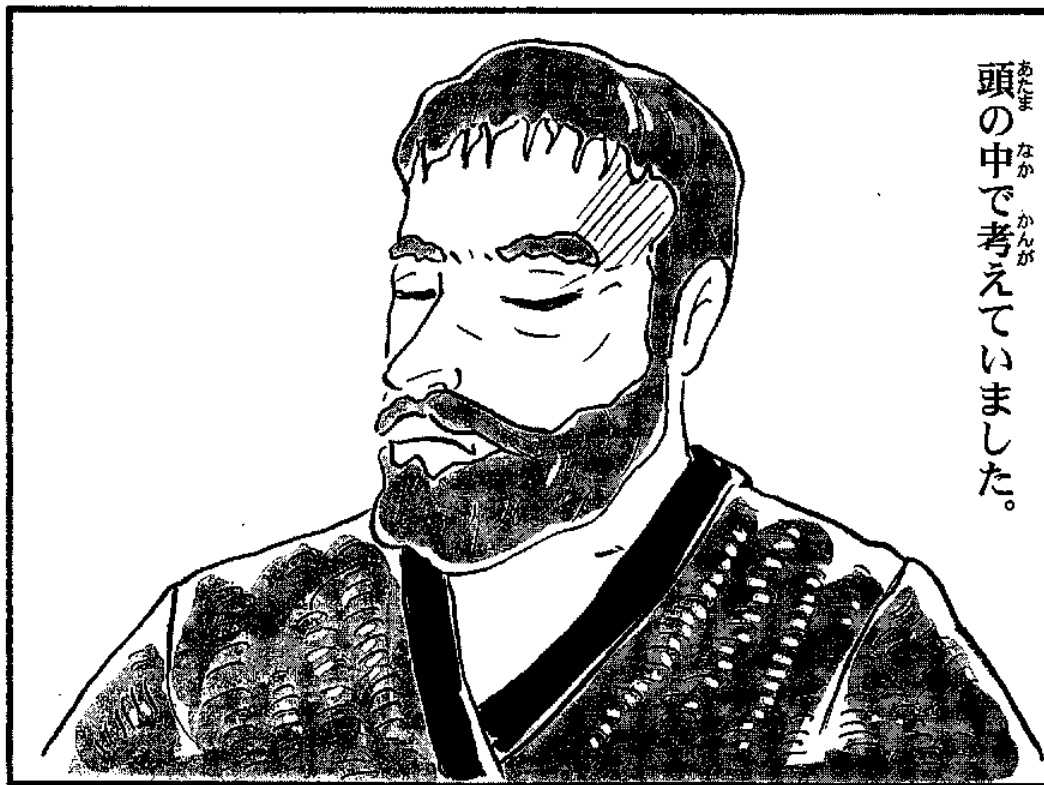


むしろで囲った小屋では
四人の船乗りたちが
疲れきって眠り続けています。

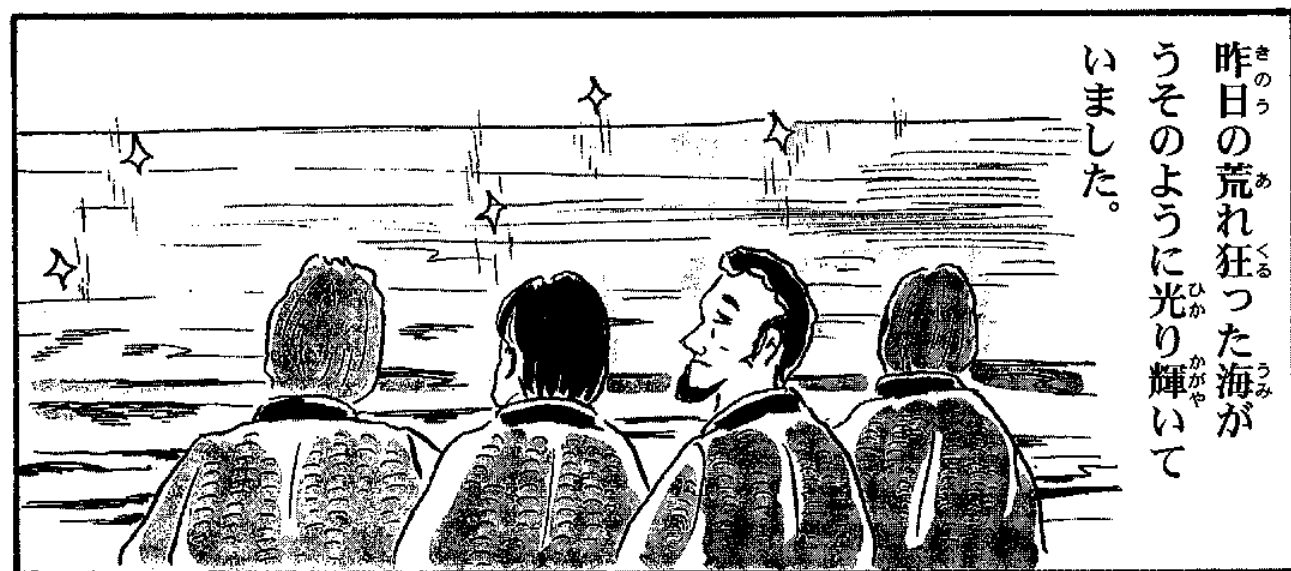
十月三十一日の
夜が明きました。

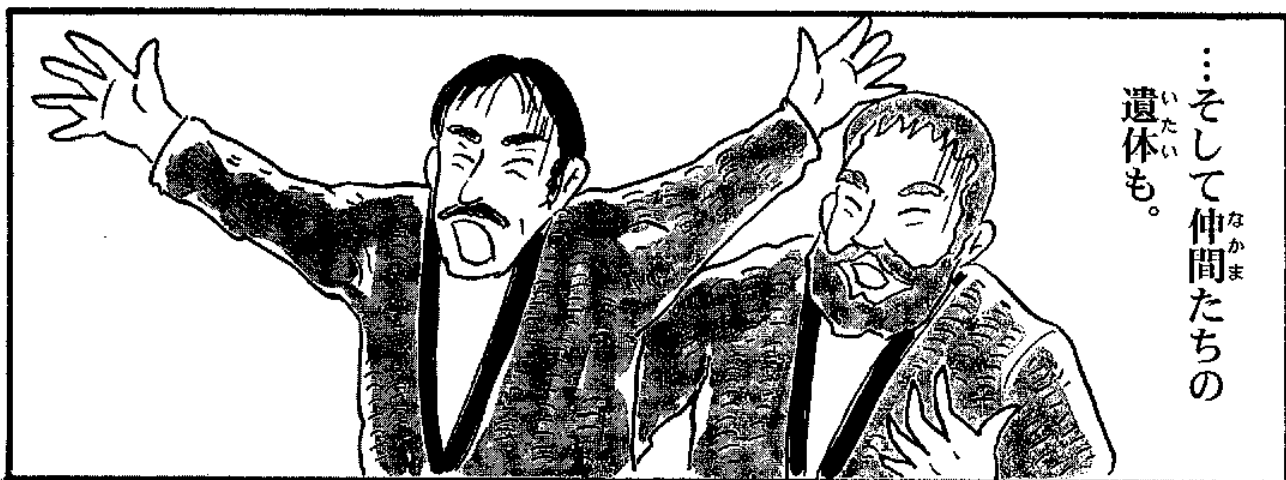


四人は昨日のことを思いおこし
事故のこと、流れついたこと、
助けられたことなど
頭の中で考えていました。

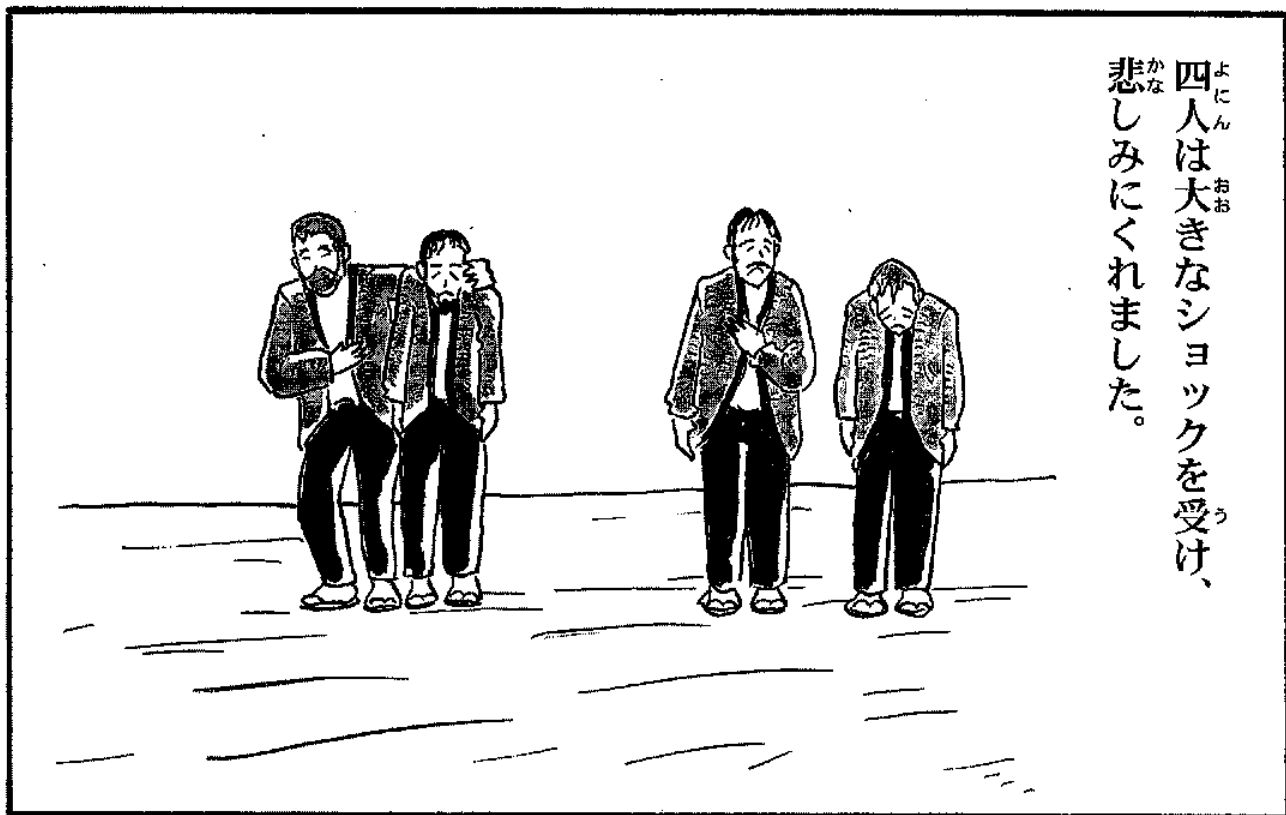
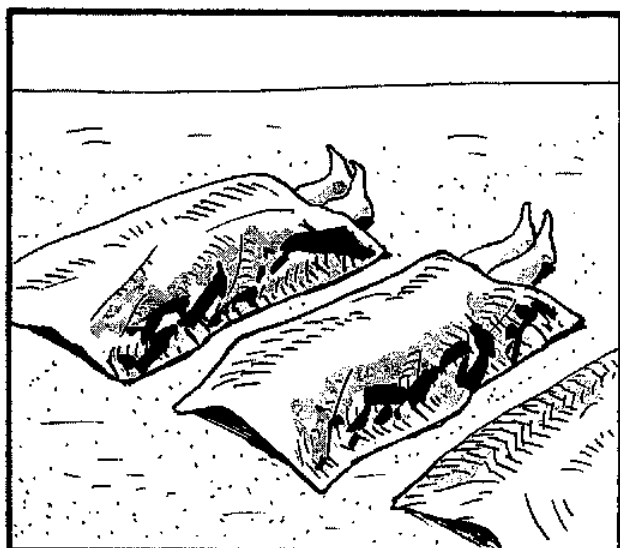
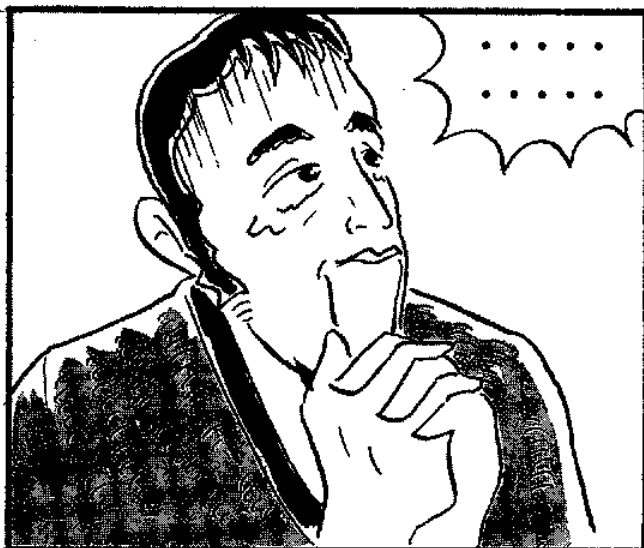








…そして仲間たちの
遺体も。
なにか
いたい



四人は大きなショックを受け、
悲しみにくれました。
よにん
おお
かな

かな
悲しいもの
見へて
まっただな



うんだな
中で
お茶つこ
飲むべ

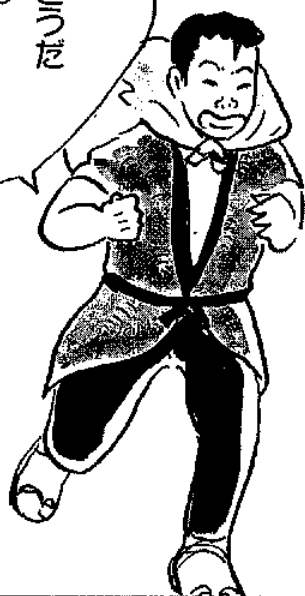
いま
ごはん
つくって
いるはんで



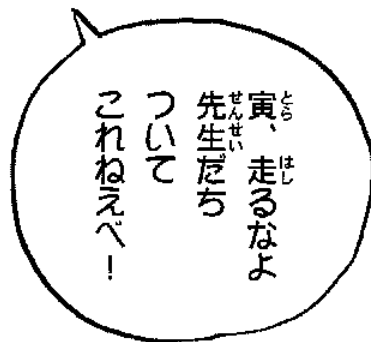
その頃、県庁に走った
寅吉と兵次郎は
警察本部の吉村護美警部補、
青森県師範学校の英語の
教師である中西保人先生を
案内して、七里長浜をめざし
歩きつづけていました。



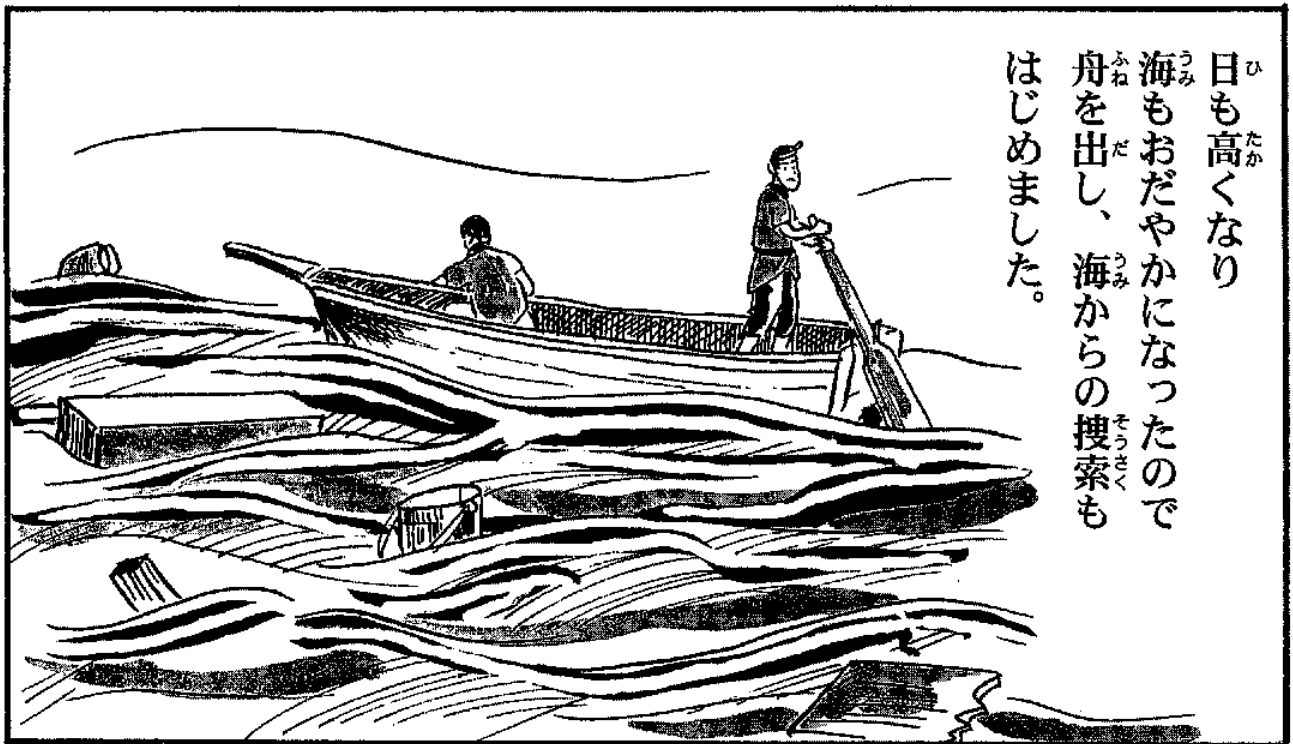
あつぎつた
どうも
走るくせ
ついてまっただな



寅吉、走るなよ
先生たち
ついて
これねえへ！







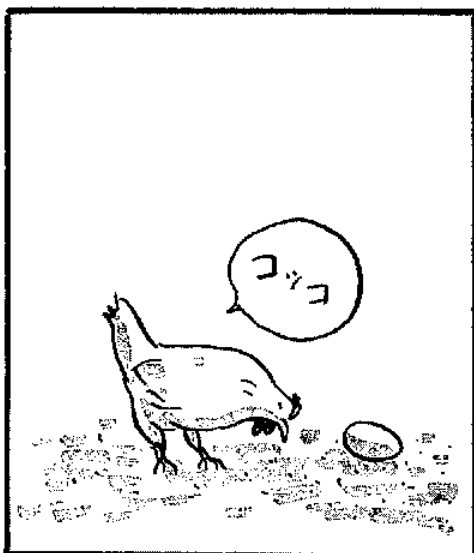
日も高くなり
海もおだやかになったので
舟を出し、海からの搜索も
はじめました。



よく
まあ
食うもんだ



ウィルソン、リーガン
ベセバ、ベックは
すっかり元気になり
食欲おうせいです。

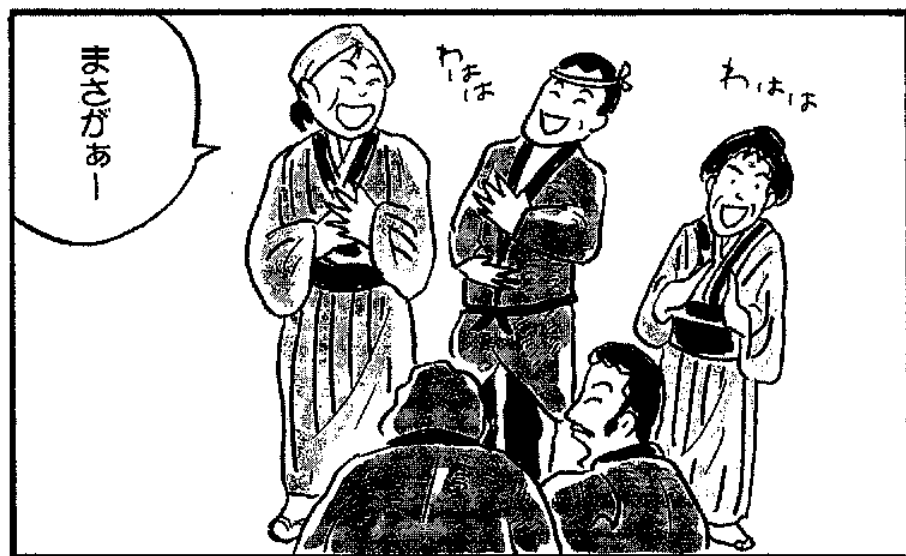


コッコ

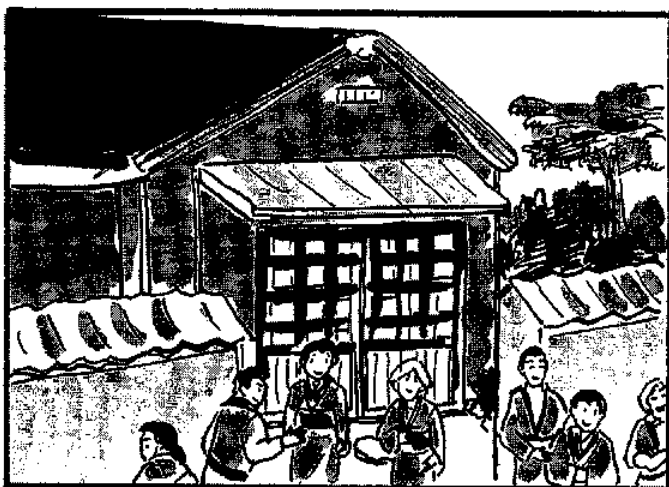
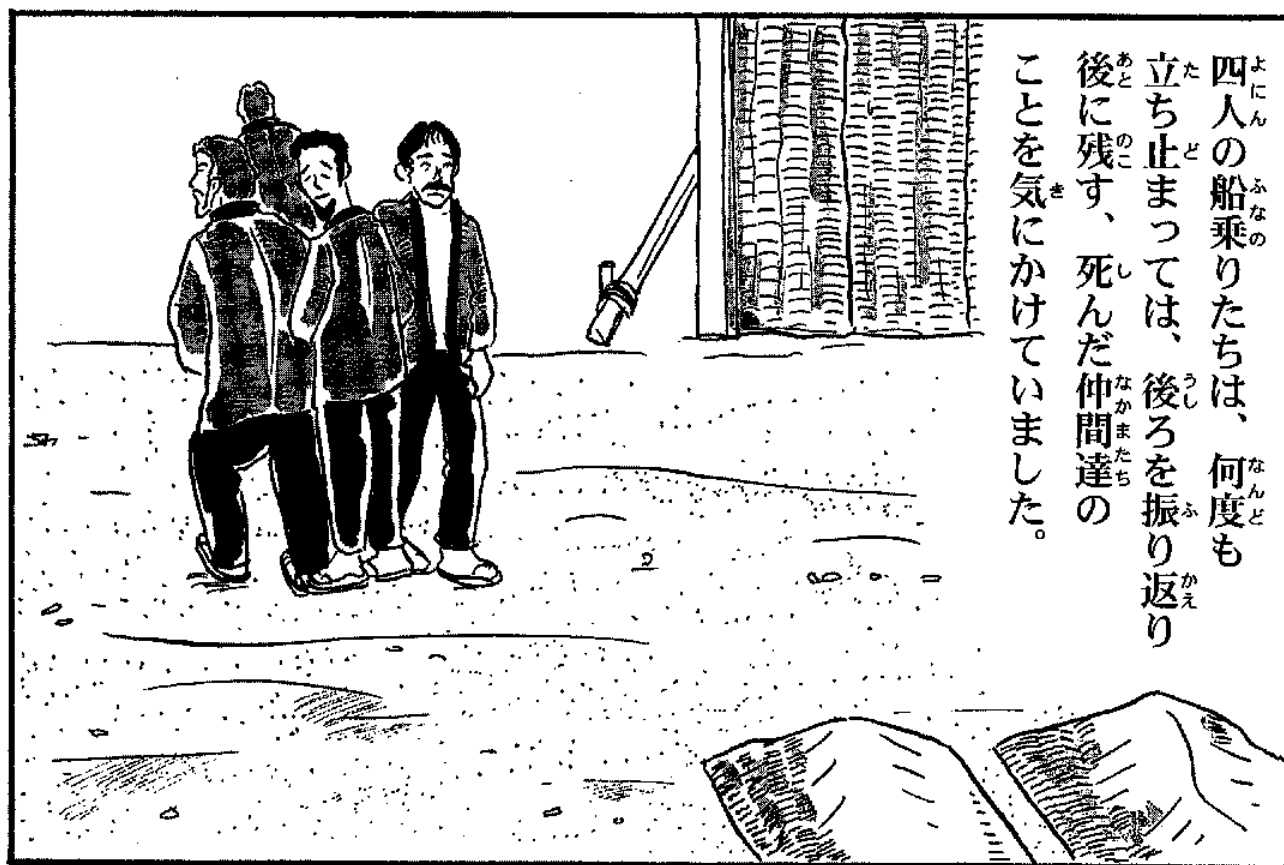


それでも
ねえよ
ずんぶ
肉ば
くつてだぞ

したって
ろくに
食って
ねんだもの







ウイルソンたちが
 工藤五三郎の家の前になると、
 どつとどよめきがおこり、
 大きな拍手がおこりました。



村人にとって、四人の
 船乗りは死とたたかい、
 見事に勝ちぬいた
 勇気のある人たちでした。

大変
 だつたな
 よく来た
 よく来た

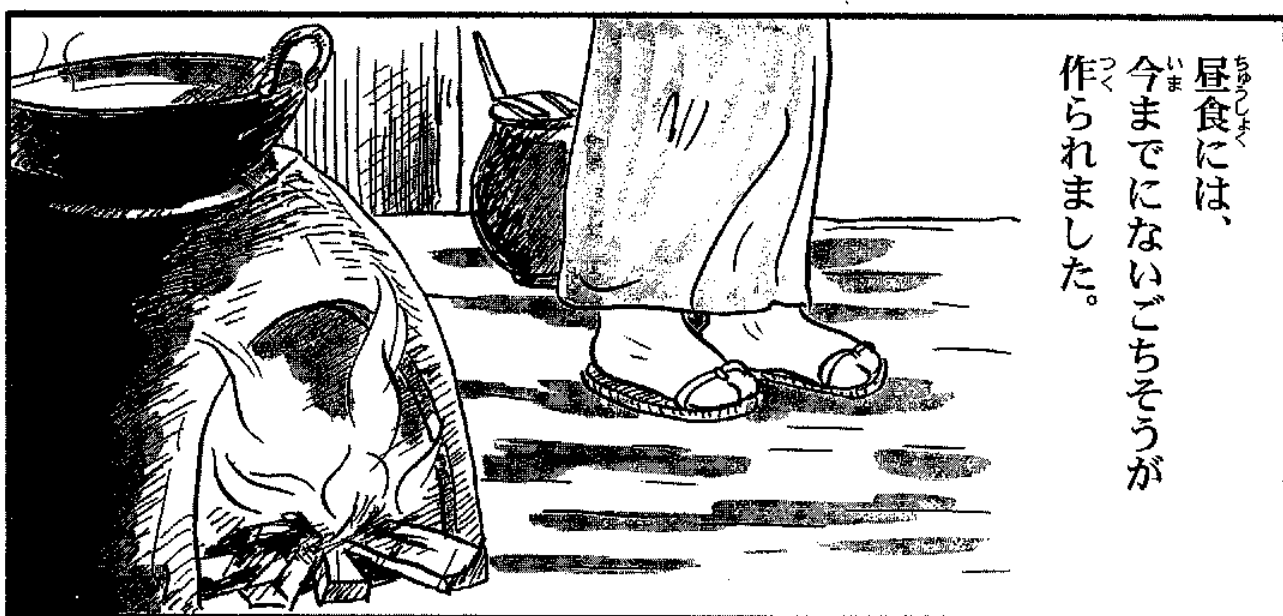
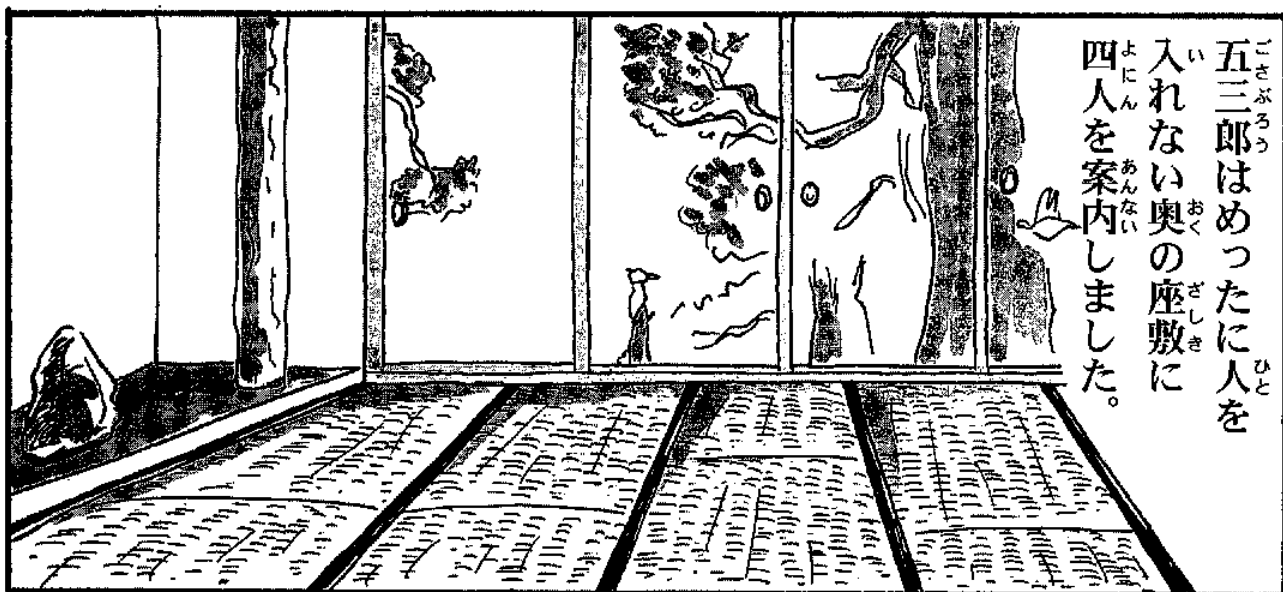


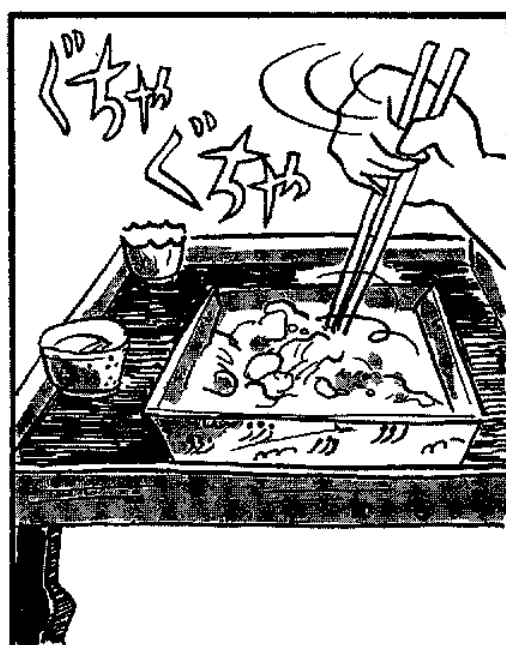
貧しい村の人たちの生活は
 一日一日が生きるための戦い
 です。死に打ち勝った四人は、
 限らない力を村の人たちに
 与えてくれました。

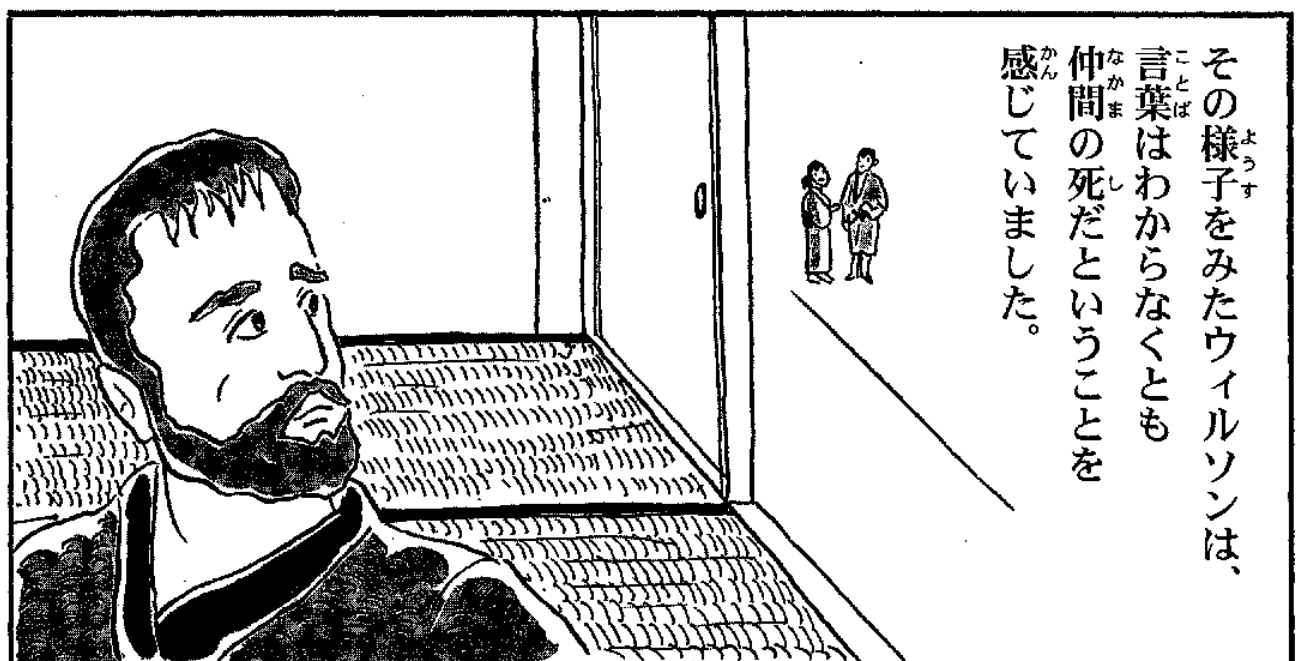
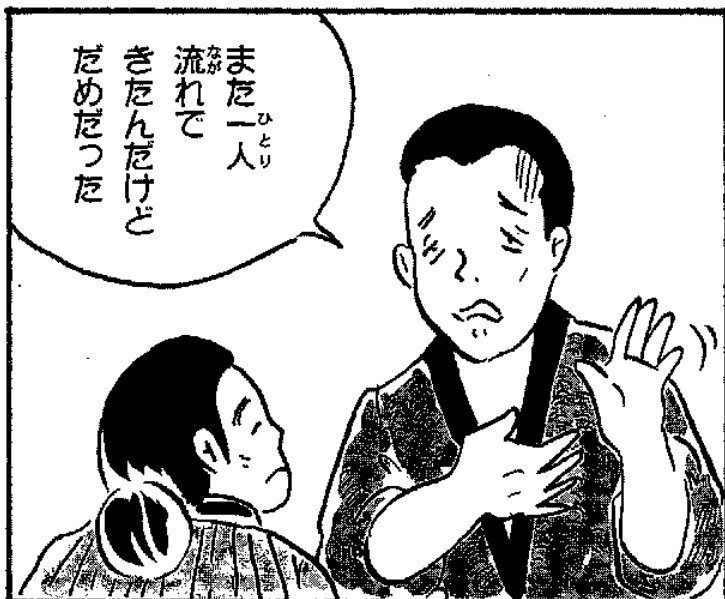


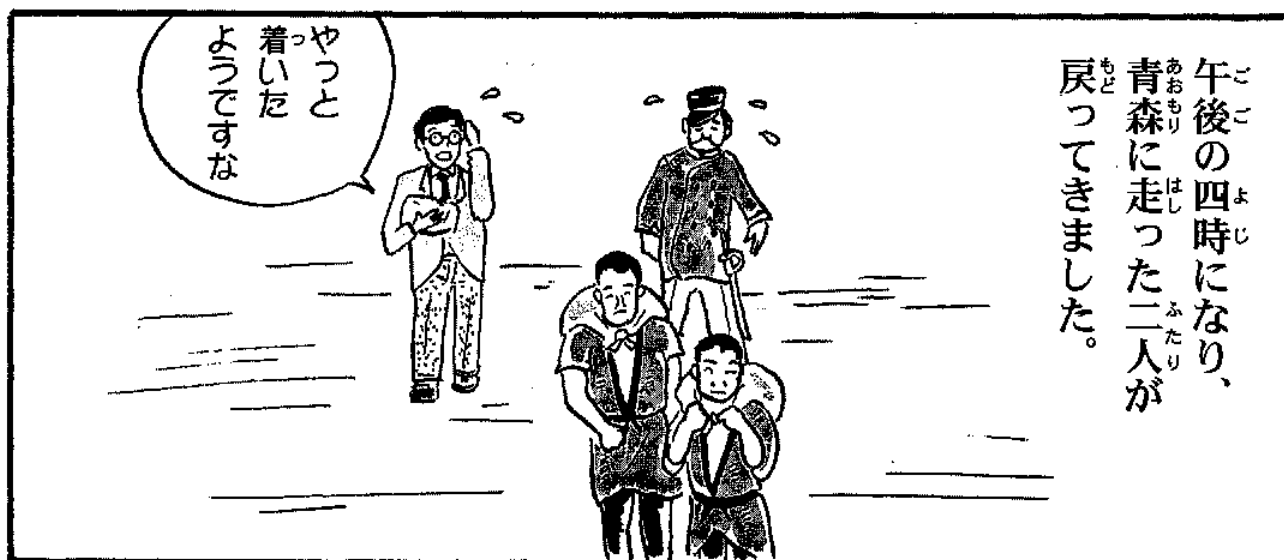
さあ
 こつちさ
 入って







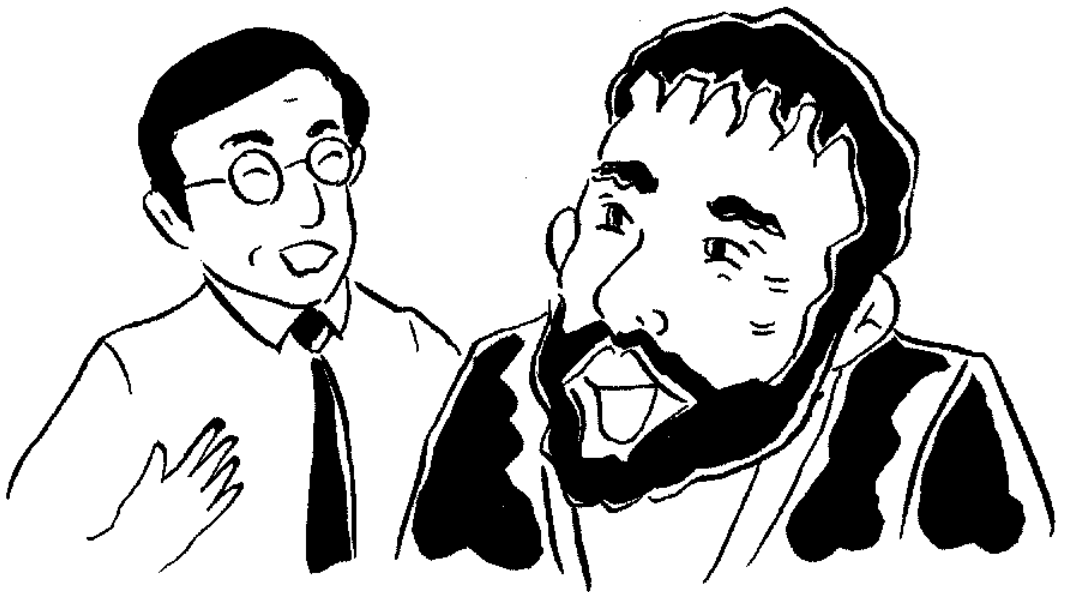


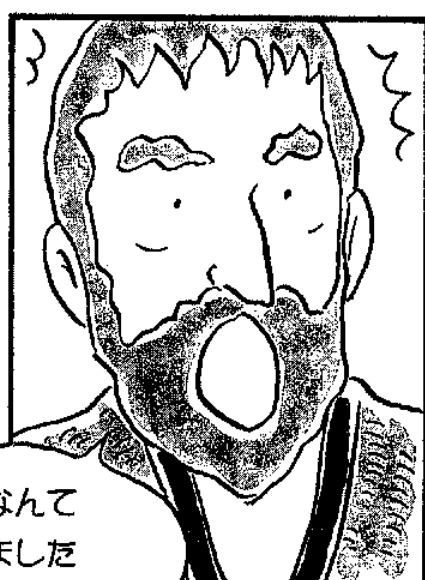
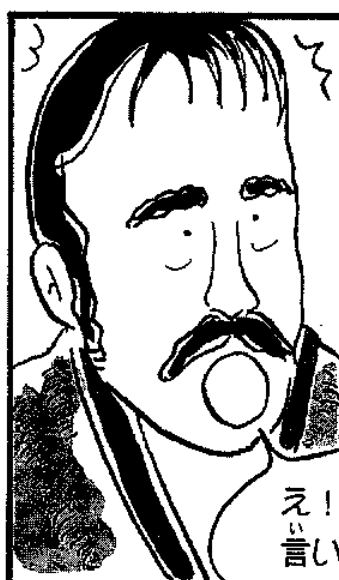


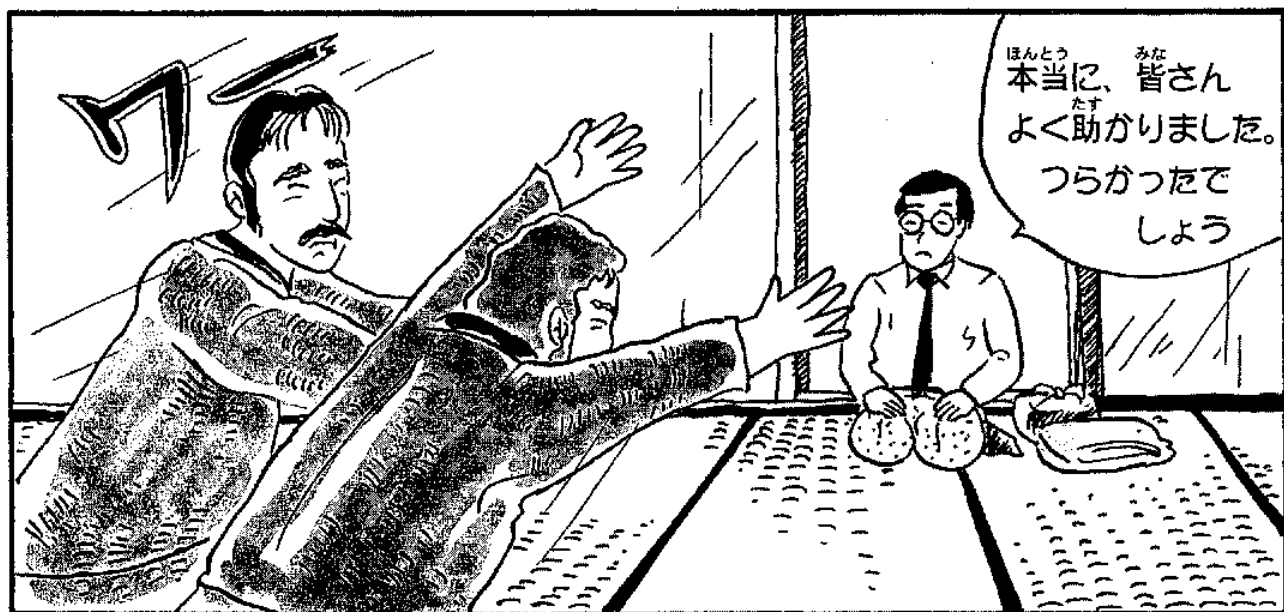


第5話

— 言葉が通じた —
ことば

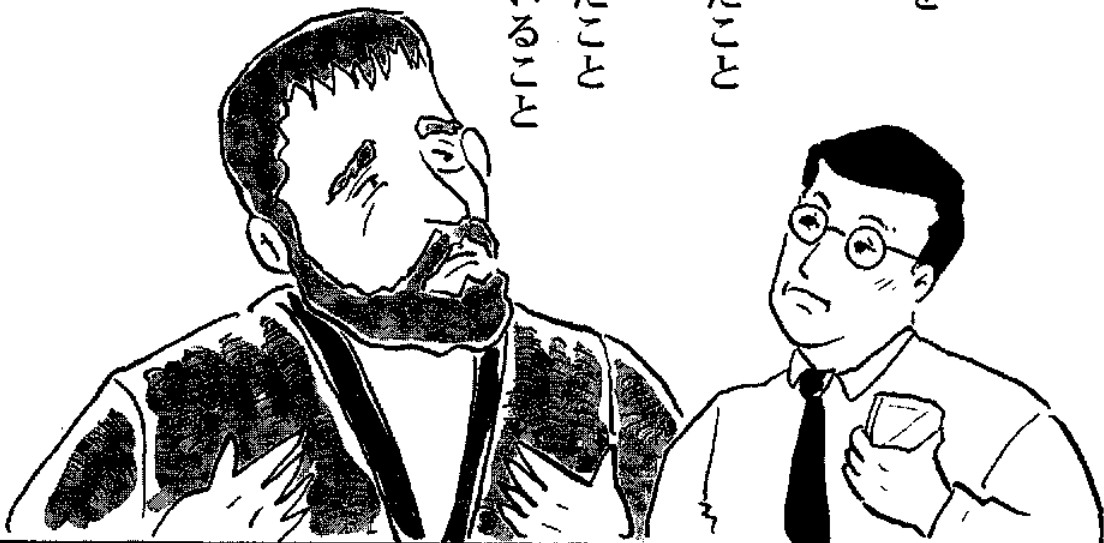


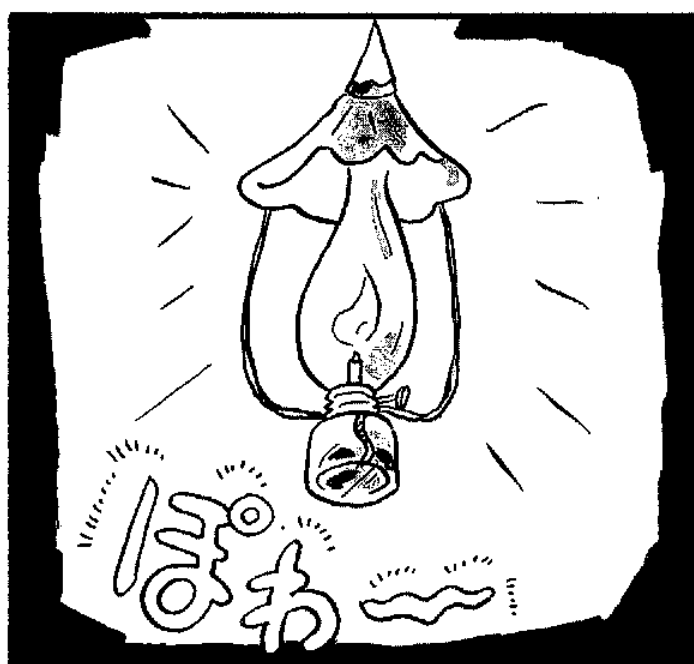


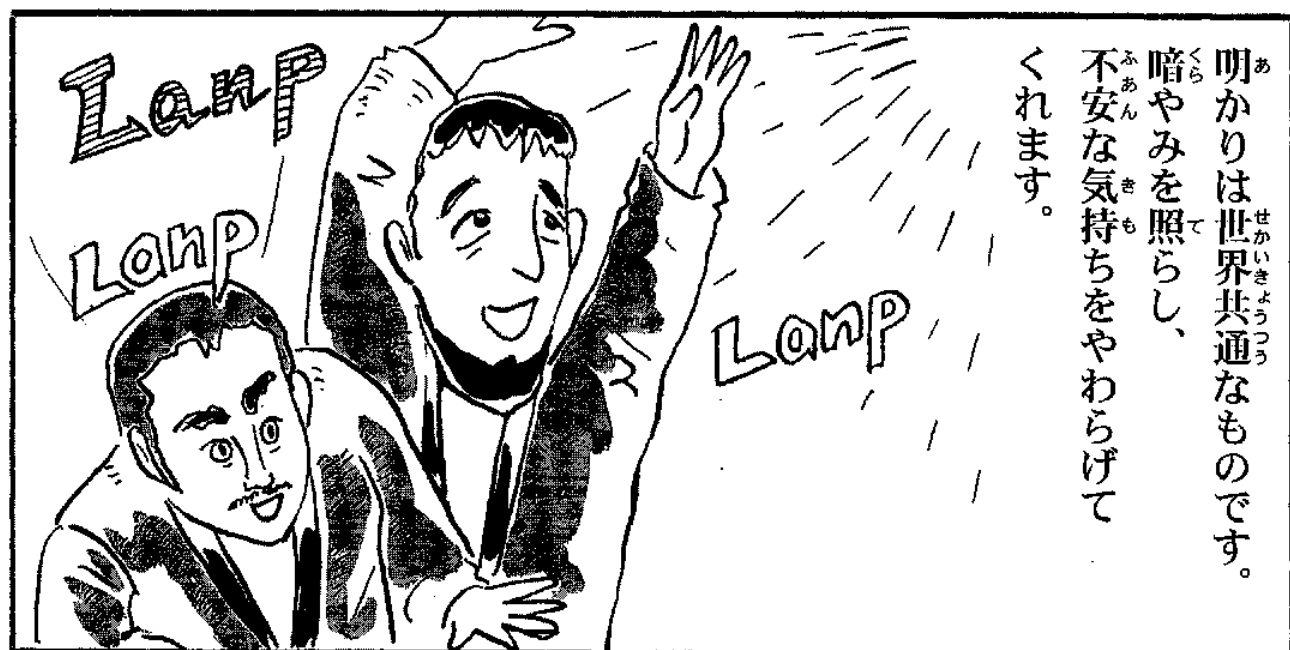
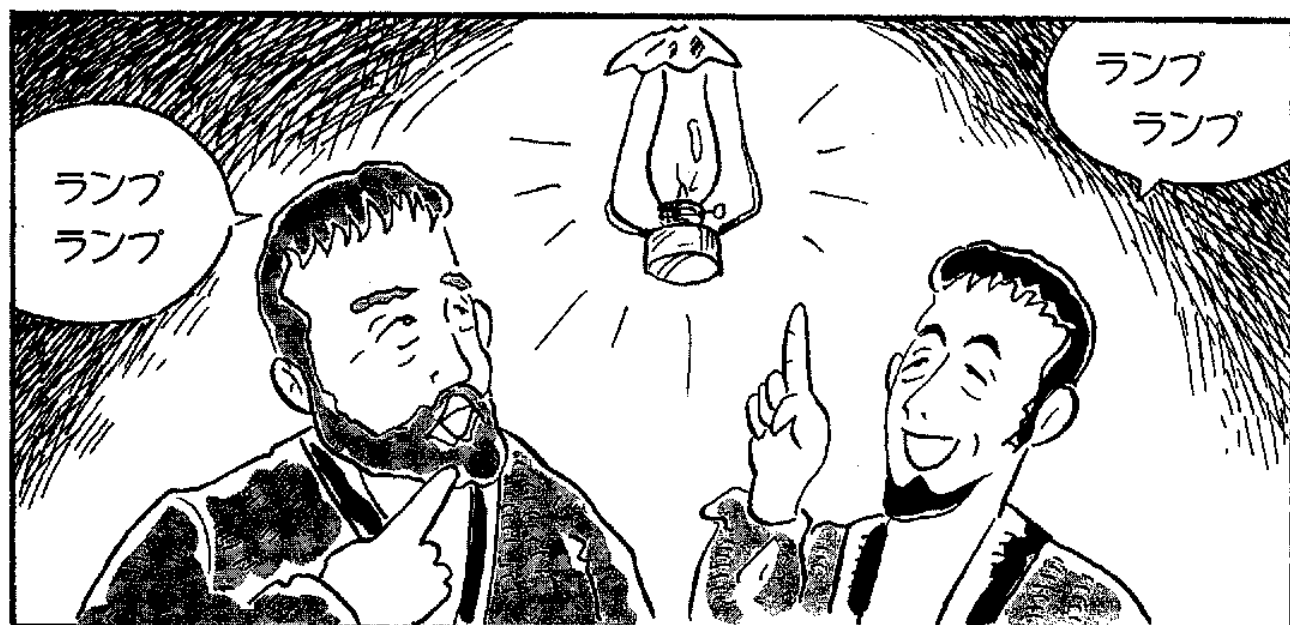


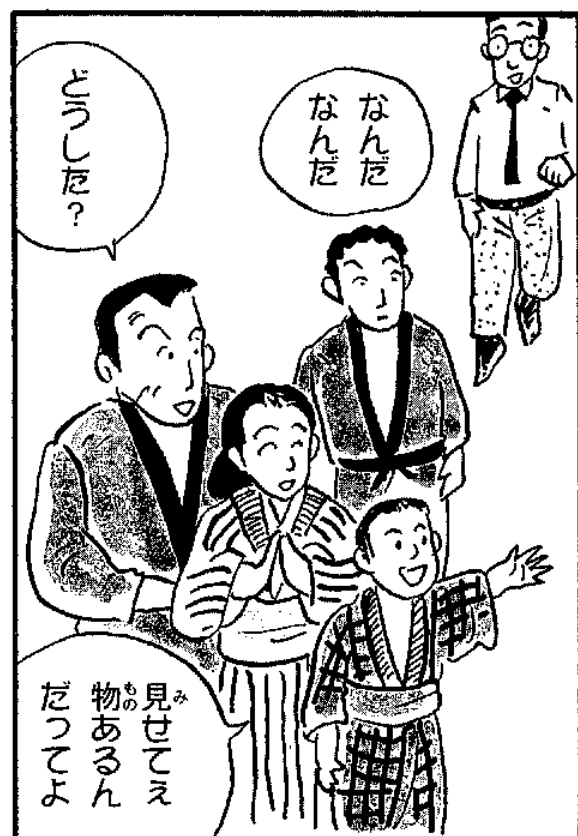


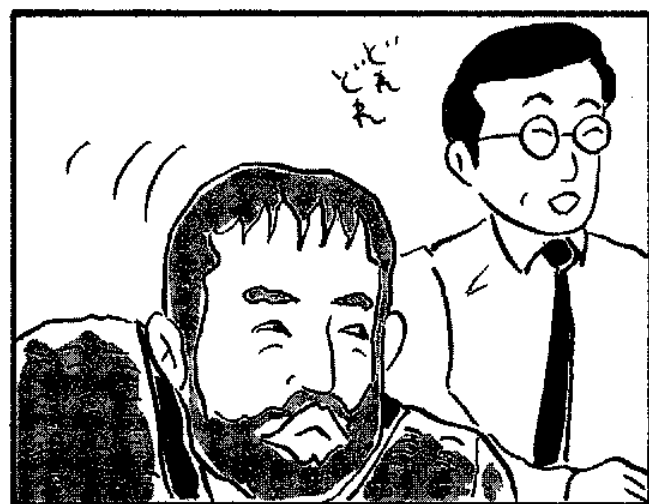
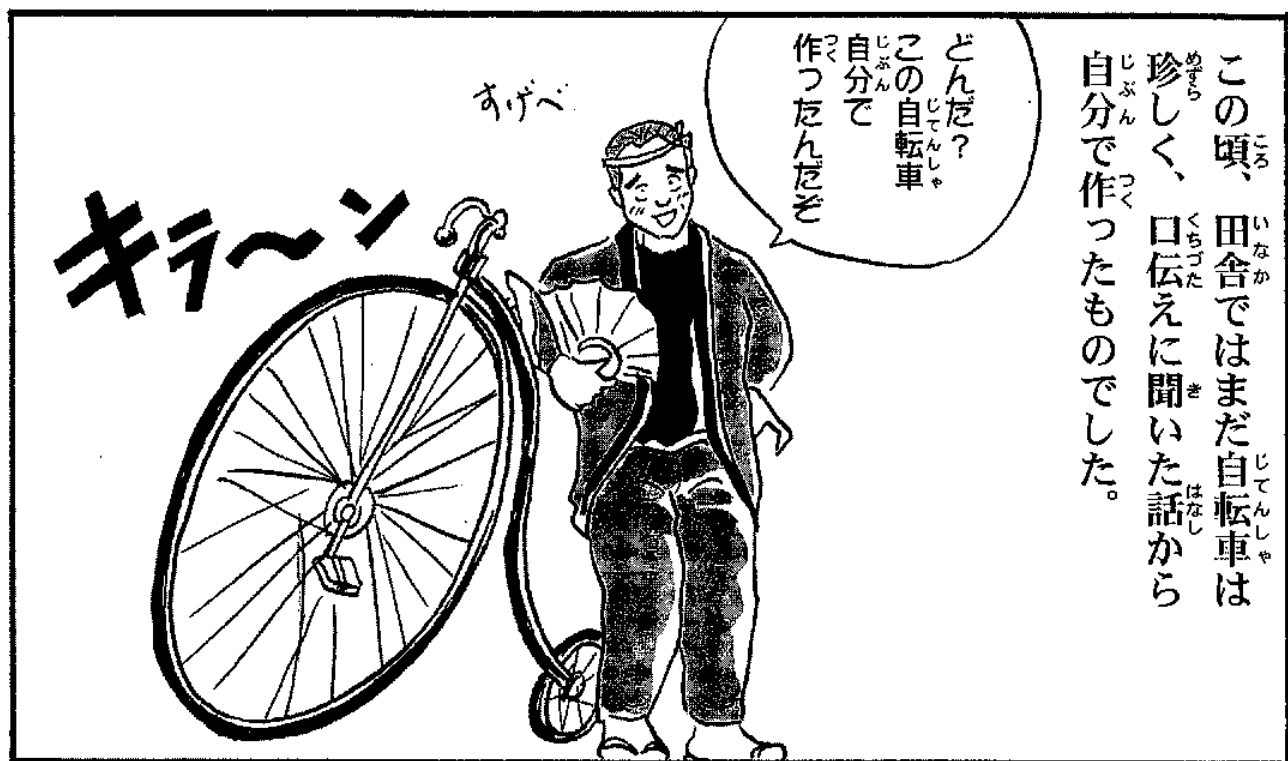
よにん 四人は
 いま 今までの出来事を
 か 代わる代わるに
 はなし 話をしました。
 き アメリカから来たこと
 そうなん 遭難したこと
 むらびと 村人に助けられたこと
 かんしゃ とても感謝していること
 そして、
 じぶん 自分の住む家に
 かえ 帰りたいこと
 はなし いろいろ話を
 しました。

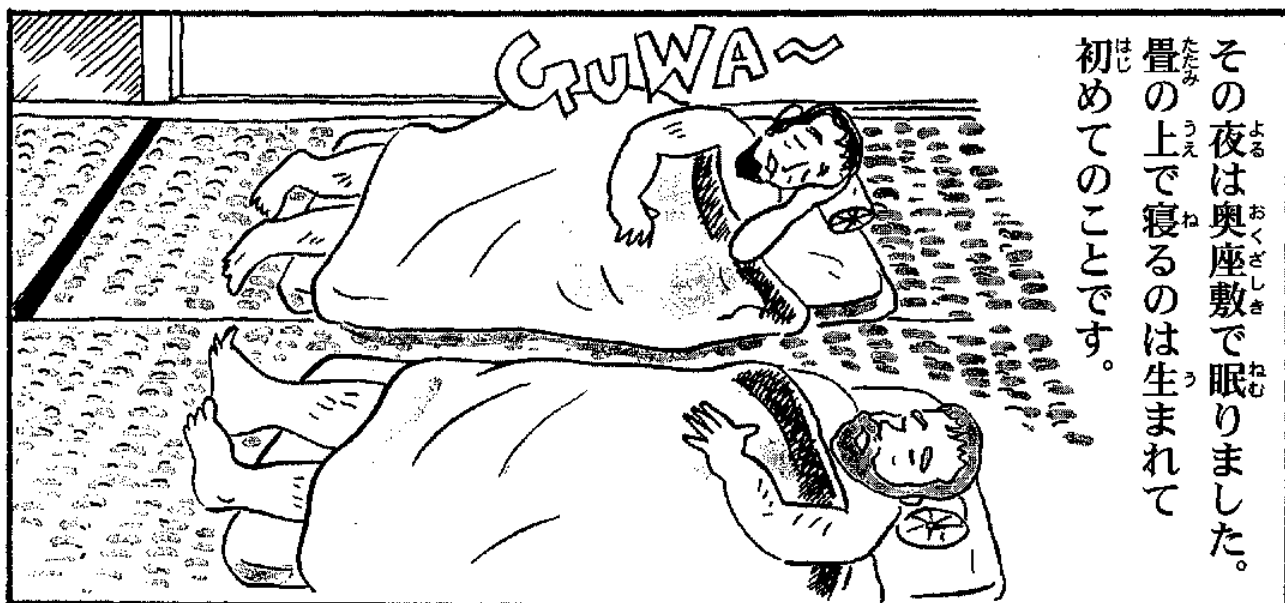














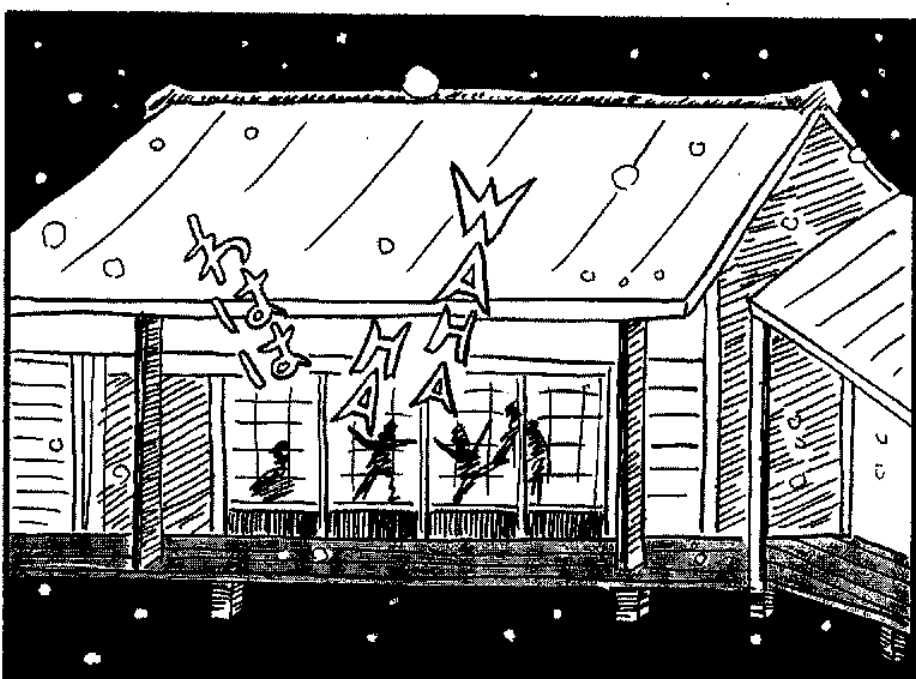
ウィルソンとベックは
とても話好きで
なかになしせんせい
中西先生と盛んに
話をしました。



それでも楽しく話を
していました。



ときおり先生の英語が
よたよたしてわからない
こともありましたが…



これだば
あしたは
大丈夫だべ

第6話

—
出しゅっ

発はつ
—



十一月二日、
四人が青森に出発する日です。
初めて縫った洋服も
仕上がりしました。



こんなもんで
いいのかなあ

外は雪だし、
寒さしのぎ
にはなるべ



なにしろ本物の洋服など
見たこともないのですから。

これ、
かぶれば
いいよ



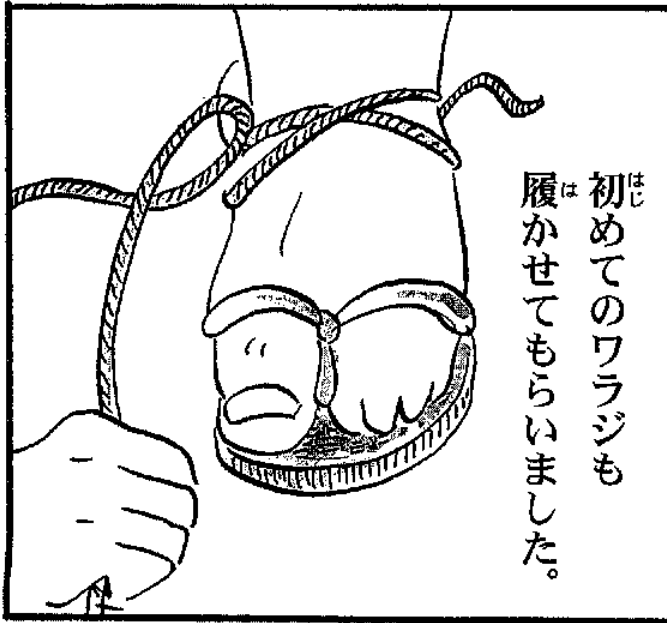
お高祖頭巾に似た
ほつかぶりも縫いました。

ナンダベッ。



それは洋服と
いうより、
だぶだぶの
ももひきに
はおり
羽織のような
上着でした。





初めてのワラジも
履かせてもらいました。



村人の優しさがつまった服です。
四人は有り難く身支度を
しました。



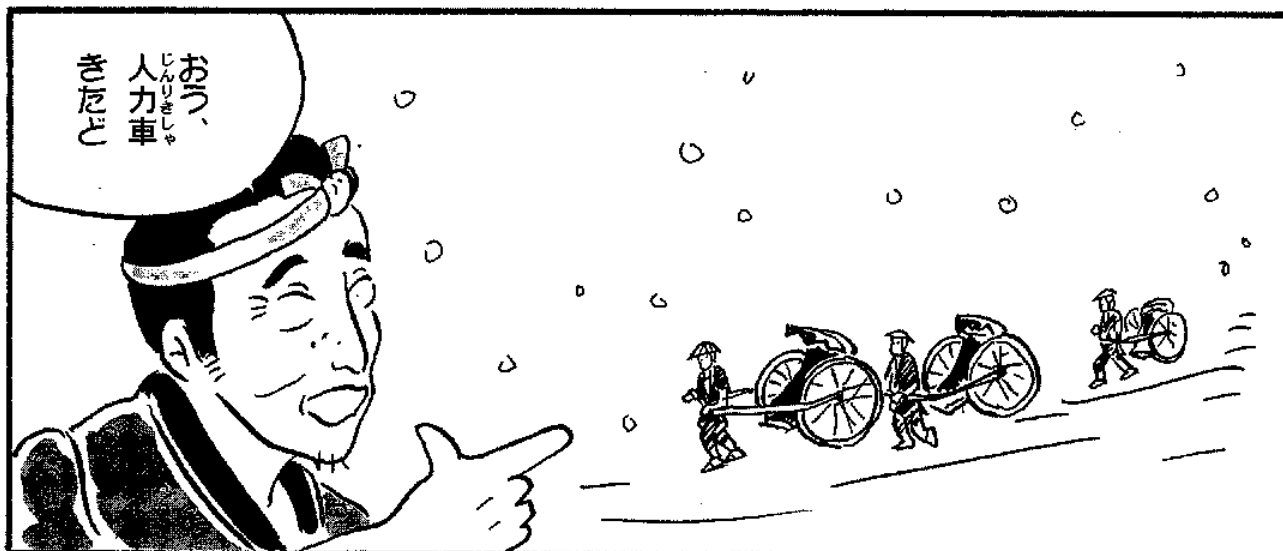
四人は、生きて帰国できる
歓びと多くの仲間たちを
失った悲しみに、複雑な
心に満たされています。

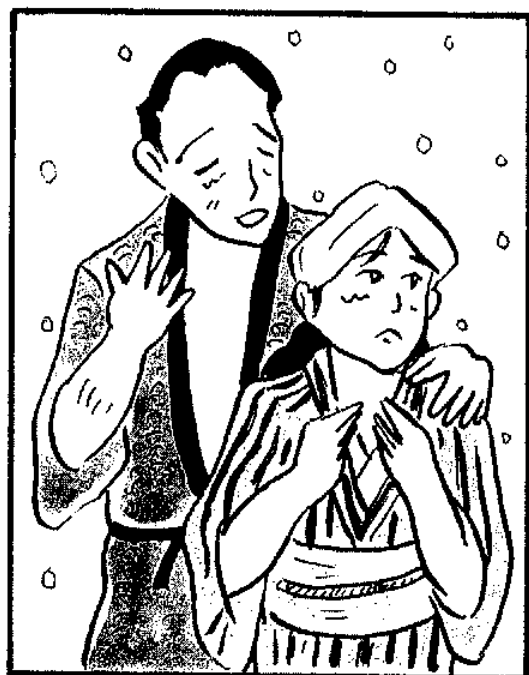


神様に
もらった命だ、
大切に



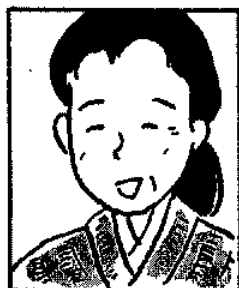
…そして村人たちへの
感謝の心にも。







サンク
THANK
ユー
YOU
へばな
HEBANA

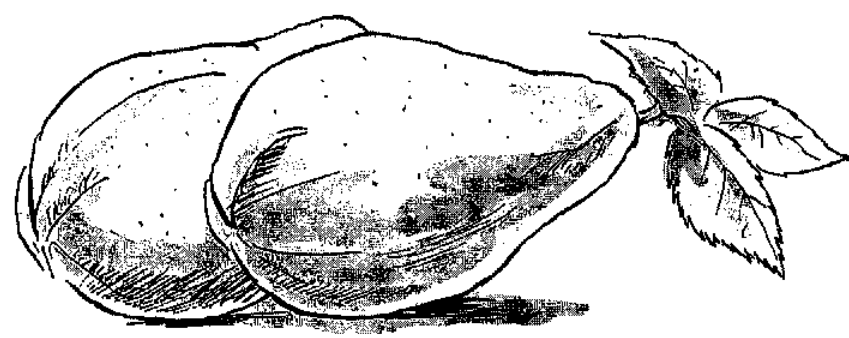
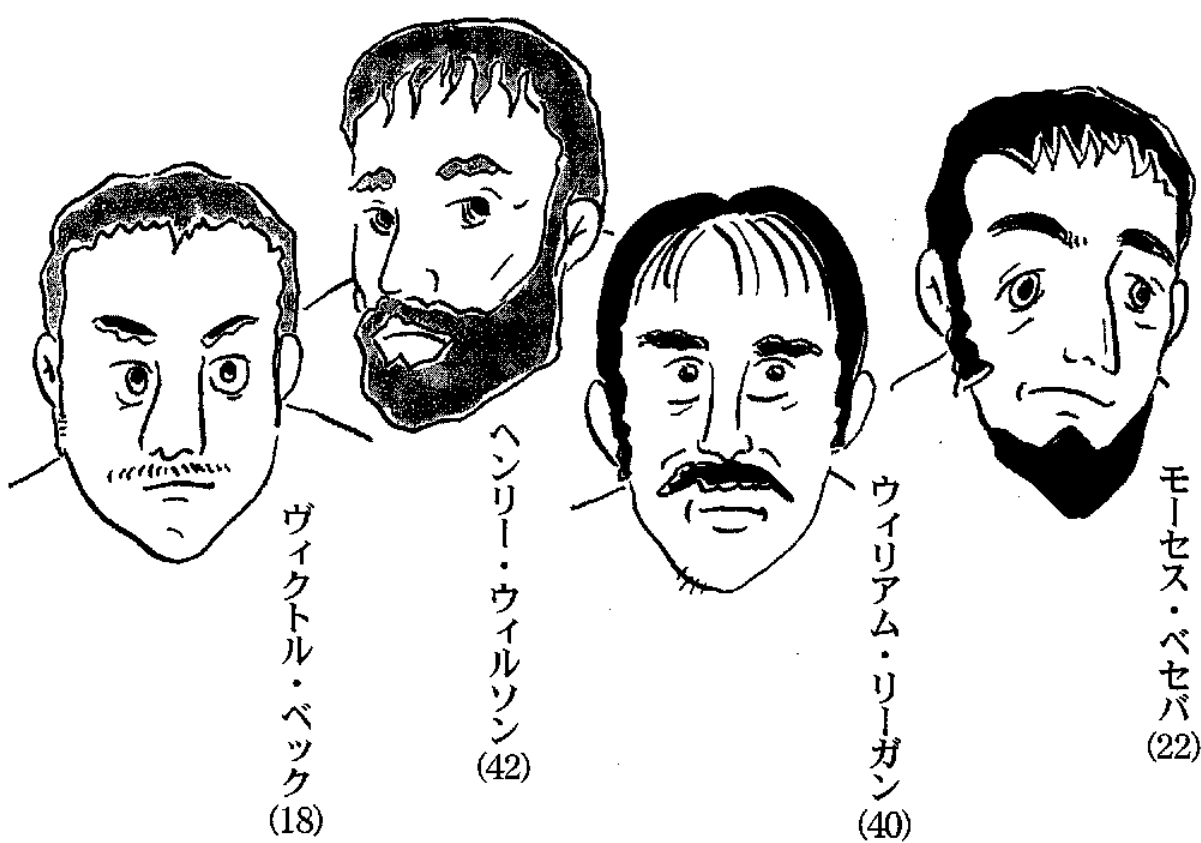


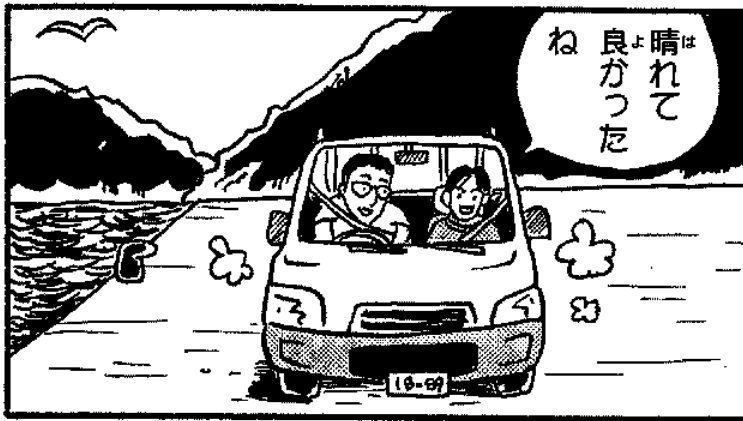
しゃりきむら
車力村のみなさん、
ありがとうございました。
みな
皆さんのことは、一生忘れません。
いっしょうわす

ヘンリー・ウィルソン

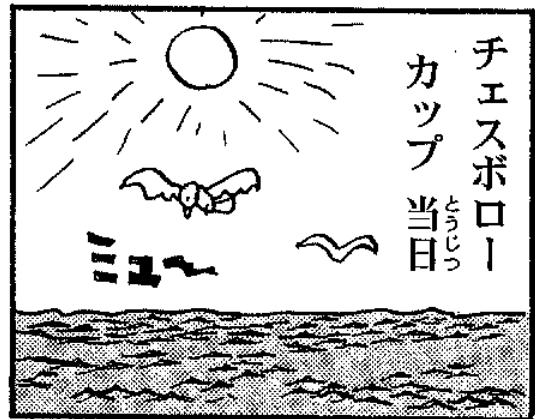
翌^{よく}十一月三日、
 青森^{あおもり}にてゆつくり
 休^{やす}んだところで
 函館港^{はこだてこう}に向^むかい、
 ちようと横浜港^{よこはまこう}に
 向^むかう船^{ふね}をみつけ、
 その後^ご、家族^{かぞく}の待^{まち}つ
 アメリカ
 メーン州^{しゅう}バス市^しに
 帰^{かえ}って行^いきました。

明治^{めいじ}22年11月
 (1889年)





晴れて
良かった
ね



チェスボロー
カップ 当日



けど、
死んだ
十九人の
人たちは
かわいそう
だったね



コウキ、
本読んで
みたか
すごい話
だったろう

うん！
まだ途中
だけど、
でもすごく
感動した

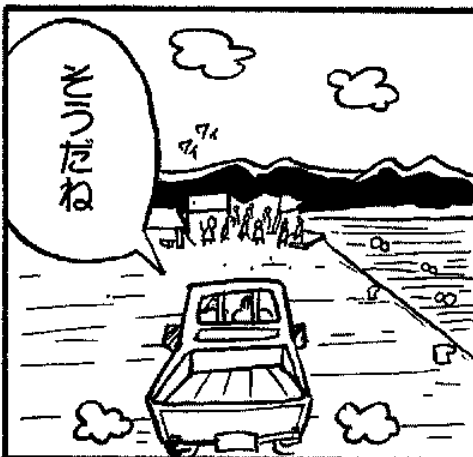


コウキ、
洞爺丸って
知ってる
か？



昔、台風で
沈んだっていう
青函連絡船のこと？
確かあの本に
書いてあったよ

船の大きさも
違つが、洞爺丸の
事故の時は千人以上の
人が死んだんだ。
その時よりもすごい
暴風雨だったらしいから
四人も助かったのは
とてもすごいことだったん
じゃないかな



そうだね



ああ
人の命は何にもまじつて
かえがたいもの
なんだよ



村の人
たちは
頑張った
んだ

あとがき

しゃりきむら せんじんたち みずか きけん かえり あ くる なみ ぼうふう う なか
車力村の先人達は、自らの危険を顧みず、荒れ狂う波と暴風雨の中で
そうなんしゃ きゅうじょ
遭難者を救助した。

こおり つめ はだか みずか たいおん そせい
氷のように冷たくなったウイルソンを裸になり、自らの体温で蘇生さ
くどう
せた「工藤はん」さん。

くら やまみち はし つづ ふたり わかもの
64kmの暗い山道を走り続けた二人の若者。

せいかつ まず ほんかくてき ふゆ まえ じぶん きちよう しょくりょう ていりょう
生活も貧しく、本格的な冬を前に、自分たちの貴重な食糧を提供した
おお むらびたち
多くの村人達。

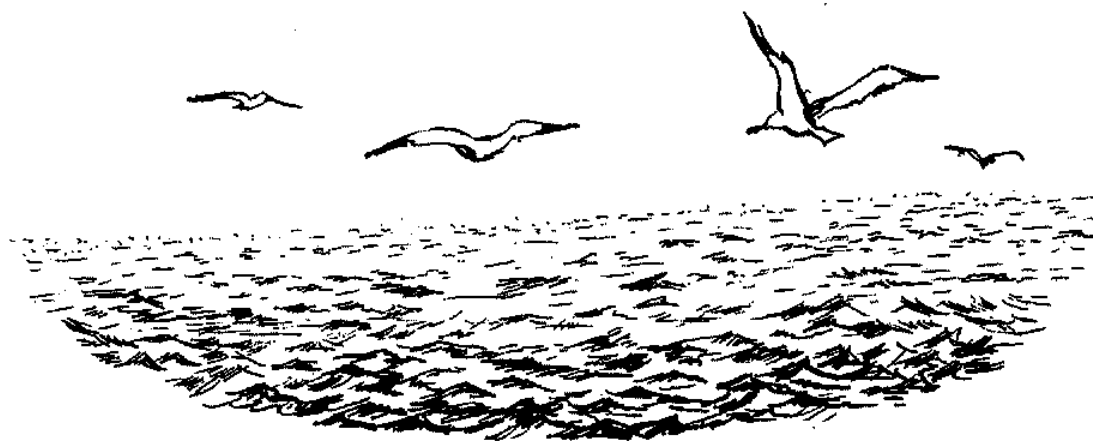
まぎ ゆうき にんげんあい
そこには、どれをとっても紛れもない勇氣と人間愛があった。

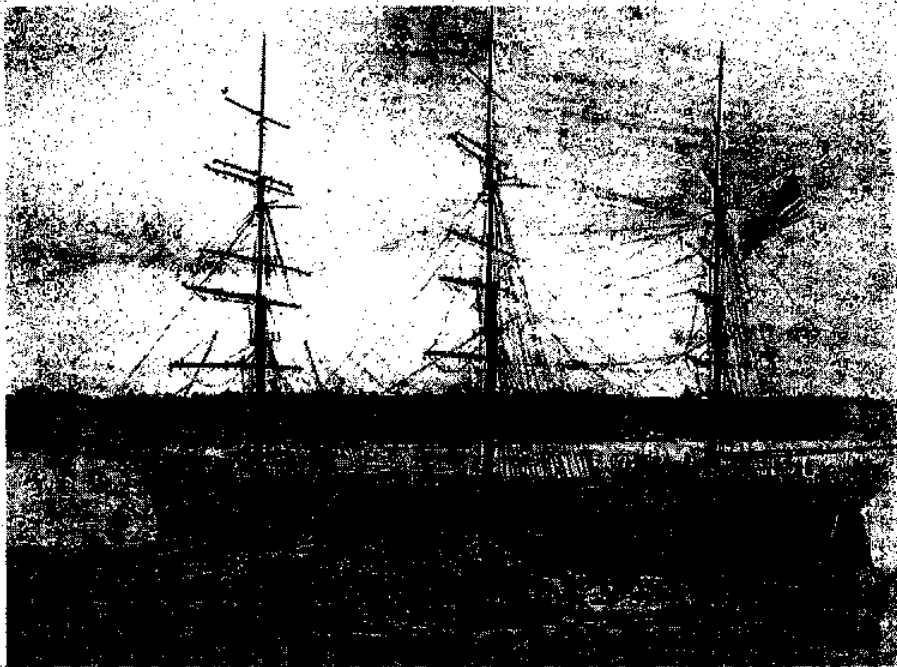
か こ しじつ うす なか こどもたち ぜ ひ しゃりきむら ほこ
過去の史実が薄れていく中、子供達には是非このことを車力村の誇り
おも いのち たいせつ こころ やさ ひと ひと い
と思い、「命の大切さ」や「心の優しさ」そして「人は、人のために活
ひと
て人」ということを深く心に刻んでもらいたい。

ほんし せいさく あおもりし おおたかこう せんせい ちよしよ べいこくはんせん
なお、本誌制作にあたり、青森市の「大高興」先生の著書「米国帆船
こう さんこう どうし ただい きやうりく
チェスボロー号」を参考にさせていただいたほか、同氏の多大なご協力
ふか かんしゃ れい もう あ
に深く感謝とお礼を申し上げます。

しゃりき せん ちよう
車力村長

なり た さ た ろう
成田 佐太郎





アメリカに於けるチェスボロー号の積荷作業風景

漫画 和田 恒

協力 大高 興

米国帆船

チェスボロー号 漫画誌

二〇〇四年二月一〇日 発行

編集・発行 車 力 村

青森県西津軽郡車力村大字車力

字花林六五(〒〇三八-三三九二)

TEL 〇一七三-五六一二二

印刷 有限会社アート印刷

(無断転載、複製を禁ずる)